

いかなれや野邊にかり飼ふ淺草のくはむおまのはみのこしつる 長嘯子

按ずるに、舉白集などにも、其事となければ、かばかり趣の似たる事を詠せり。また丙辰記行にも、馬を大士の化身なりなど、旁此繪馬に靈ありて抜け出たる事なしとも云ふべからず。此繪馬昔も人のもてはやしけるにや、寛永年中、觀音堂回祿のとき、木村市兵衛といへる者來り、名畫の筆跡焼けうせん事を歎き、助け出したりとて、別當智樂院僧正、其志を感じて、繪馬の縁に左の如く記し置かれたり。

寛永十九年二月十九日炎焼之時、武州江戸之住木村市兵衛出レ之。

紅葉狩繪馬 同レ所に掲けたり。曾我蛇足

静長刀 本堂の後の方、家豐ナゲシにかけてあり。世に義經の妾靜御前納むる所なりと云ひ傳へたり。これ恐らくは靜流の長刀ならん歟、あるひは云ふ、長刀鍛冶志津三郎兼氏の作なるべしと。

山門 樓上に文殊菩薩の像を安置す。樓下の左右には金剛力士の像を置く。來由は此卷報恩寺什寶蛇反鈎の條下に詳なり。されど往古の靈像は回祿に亡びたりとぞ。今ある所の像は後人の作なり。毎年春秋二度の彼岸の中日ならびに正月七月十六日は諸人の登る事す。

額 淺草寺

曼珠院二品良尚法親王の眞蹟

五層塔 山門の内右の方にあり、轉輪藏 同所にあり、一切經を收む。前に傳大士ならびに普賢菩薩の像を置く。此ふたつの堂は、内に五智如來を安置す。其始め安房守公雅の建立にして、今ある所の堂は、天和年中焼亡の後の御建立なり。

隨身門 同所東の方にあり、豐樂問戸 鐘樓 同所に命權問戸の像を置けり。

按ずるに、本尊縁起の中に、永和四年戊午十二月十三日伽藍回祿あり、嘉慶元年より三歳の居諾を送るといへども、未だ一字の再興も致さず、大衆愁吟絶えざる所に、修行の聖定濟なるもの、十方に勸進し、應永に至り、建立成就すとあり。然れば、名所記等の書に、天慶中安房守平公雅觀音堂再興のとき、一軀の鼻鐘を鑄て、たかく一樓にかくるとあるは、永和の回祿に亡びたる鐘の事にして、至徳四年に至り、再び今ある所の洪鐘を鑄治せしとせるべし。至徳四年は嘉慶と改元の年なり。

日本國武州豊島郡千束郷金龍山淺草寺洪鐘銘並序

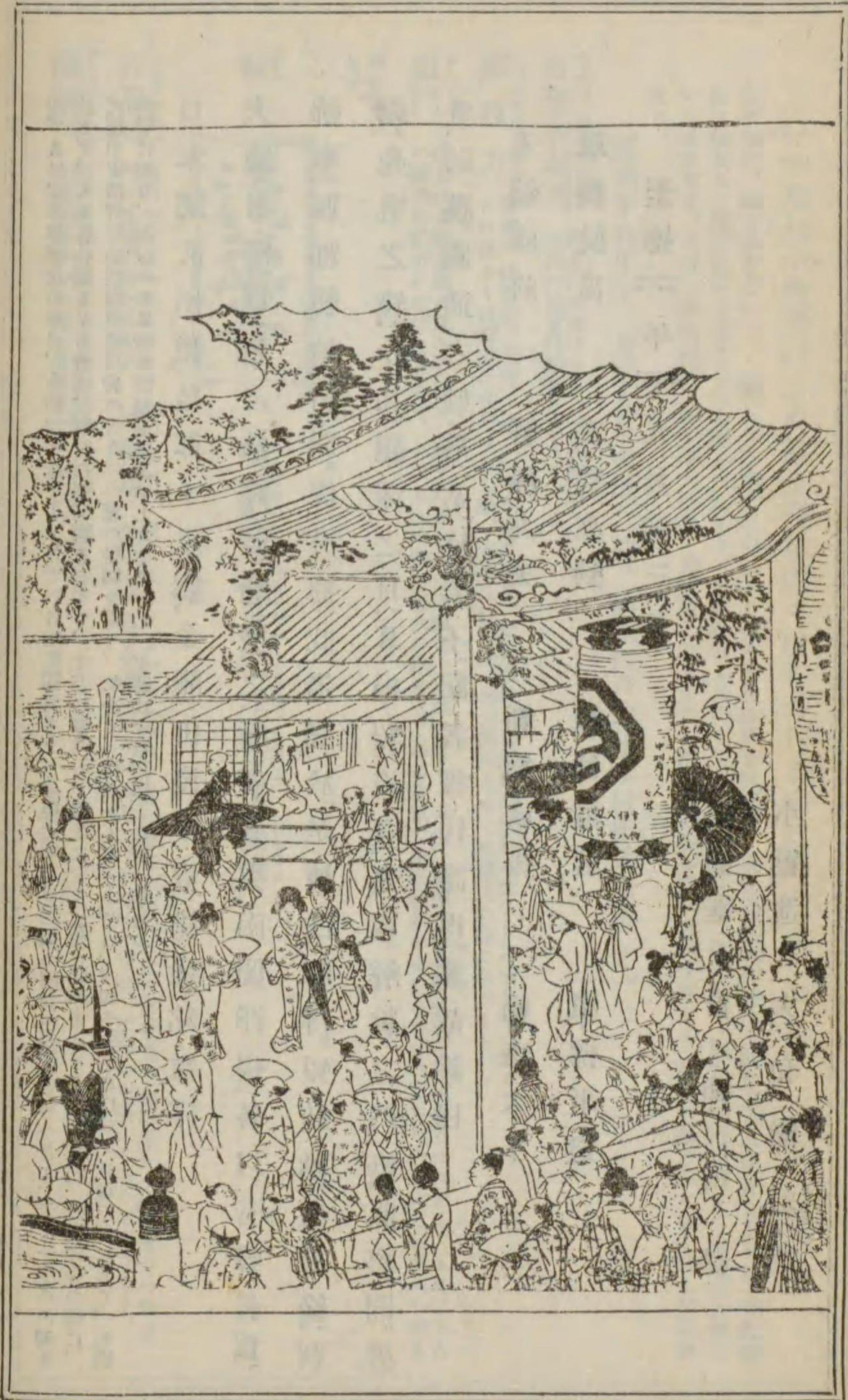
夫鐘者震梵苑之枯禪。發騷壇之深省者矣。南閣浮提。各以音聲長爲佛事。西郡勝地。特開榛莽。勸此道場。於是傳法。聊持短疏。勸發善緣。新鑄鼻乳之鐘。永扣龍澤之月。耳根契證者。速趨解脫之門庭。眼裏聞聲者。則護圓通之妙果。當時若不記者。後代誰得識哉。銘曰。

未鑄成前 響隔九天 新鑄成後 福應大千

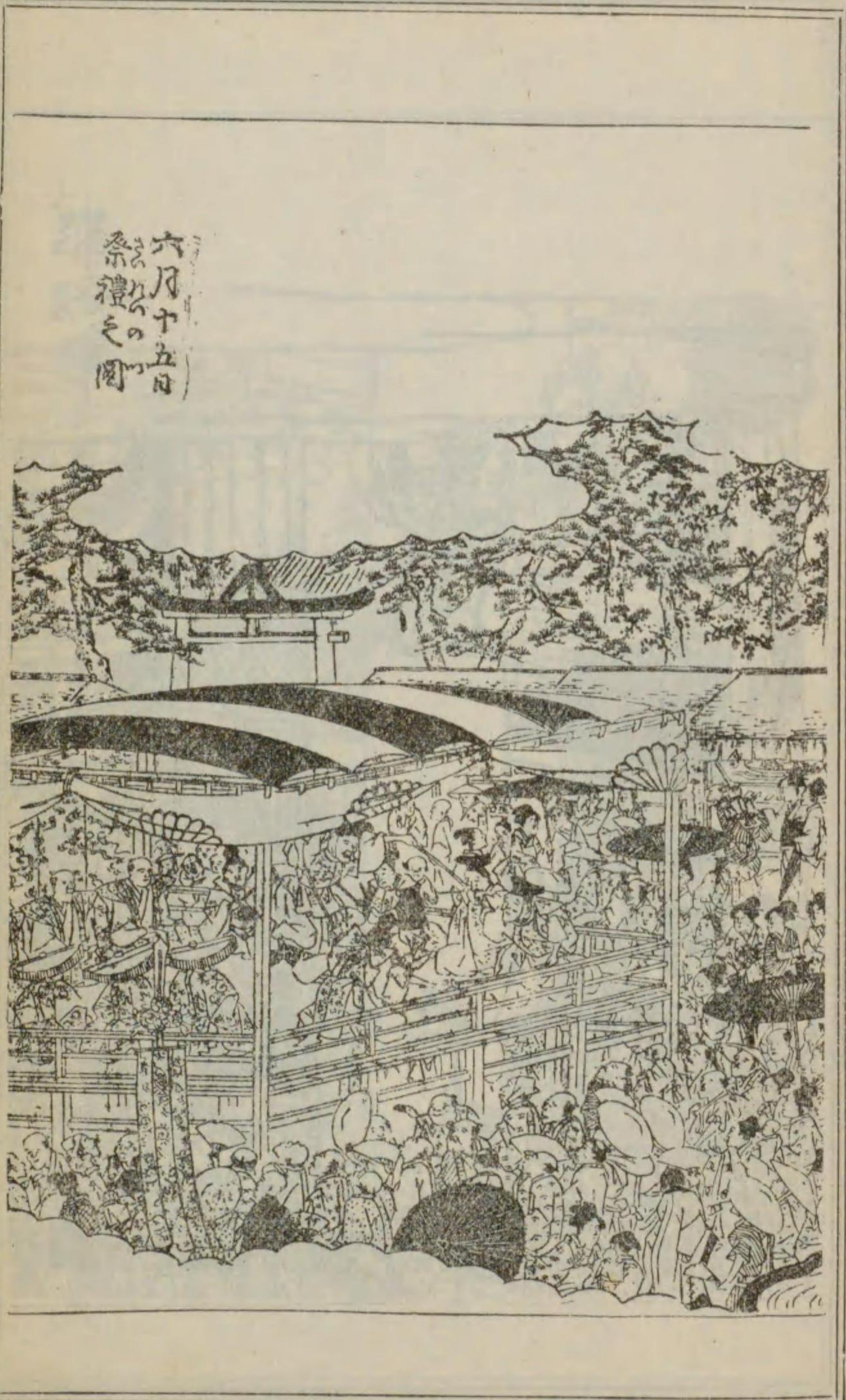
規模脫出 當空高懸 輕輕撞著 墮佛事邊

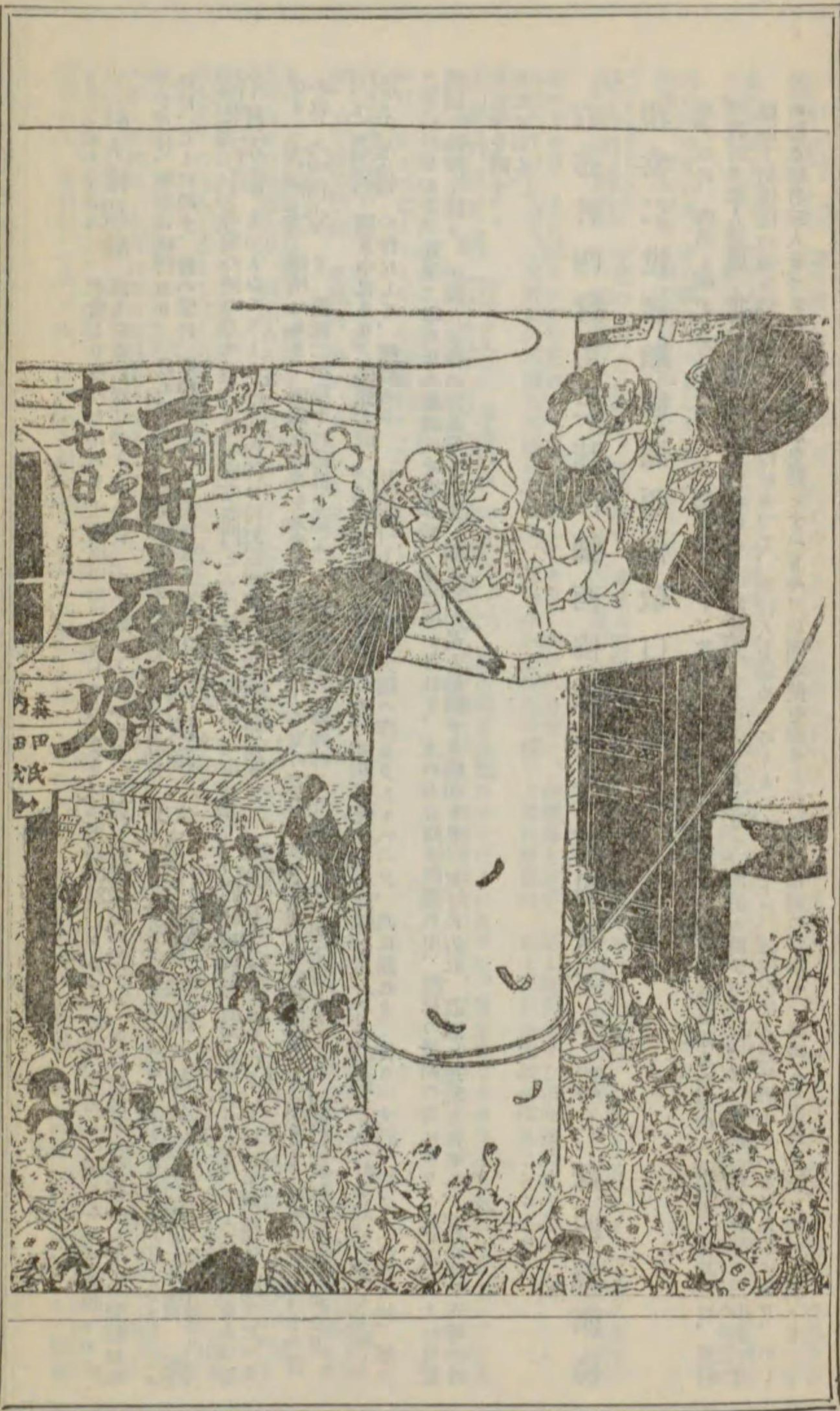
至德二年丁卯五月初三日

大勸進 僧 都 海 譽
小勸進 大和國道高

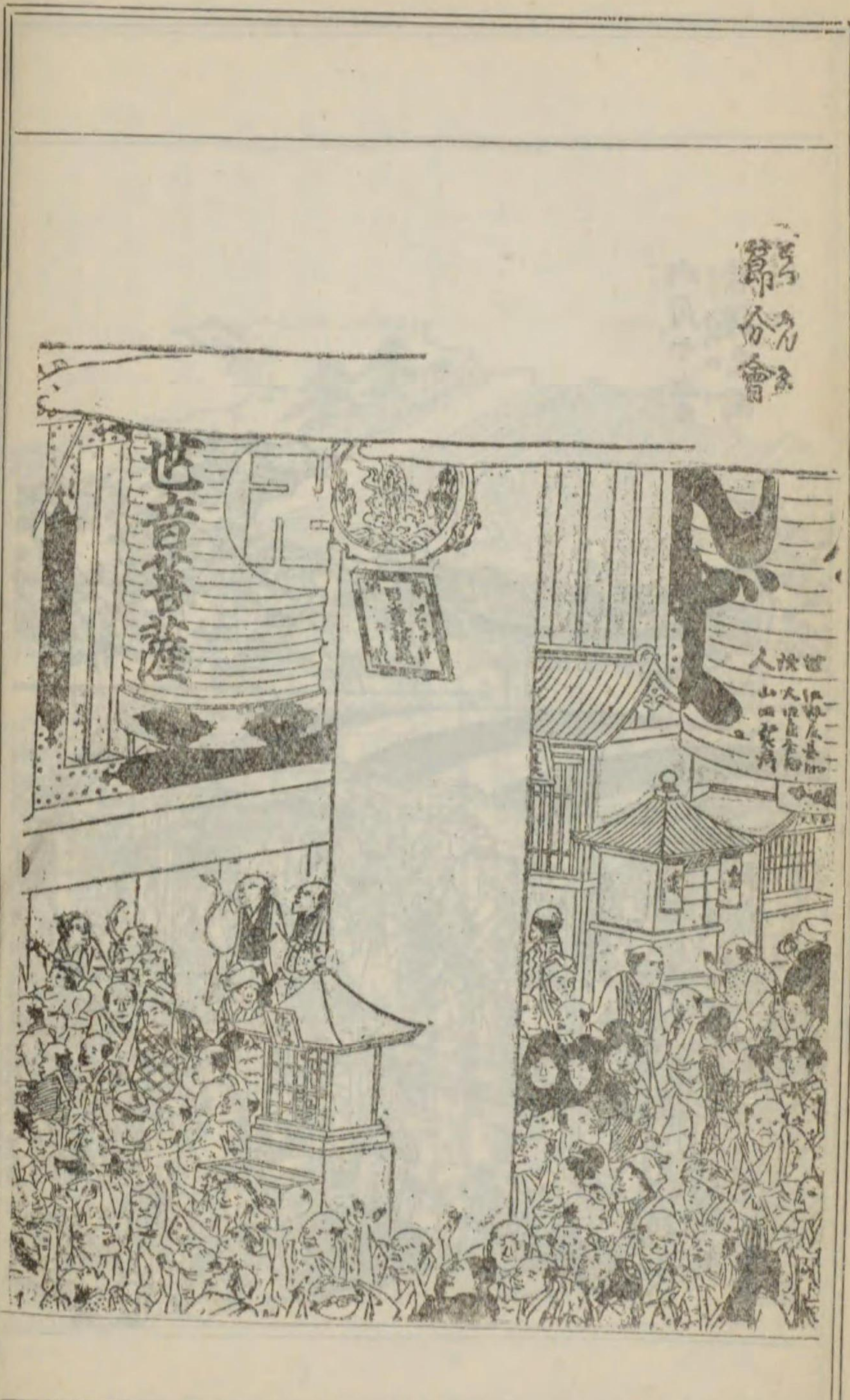


六月十五日
糸禮之圖





節分會

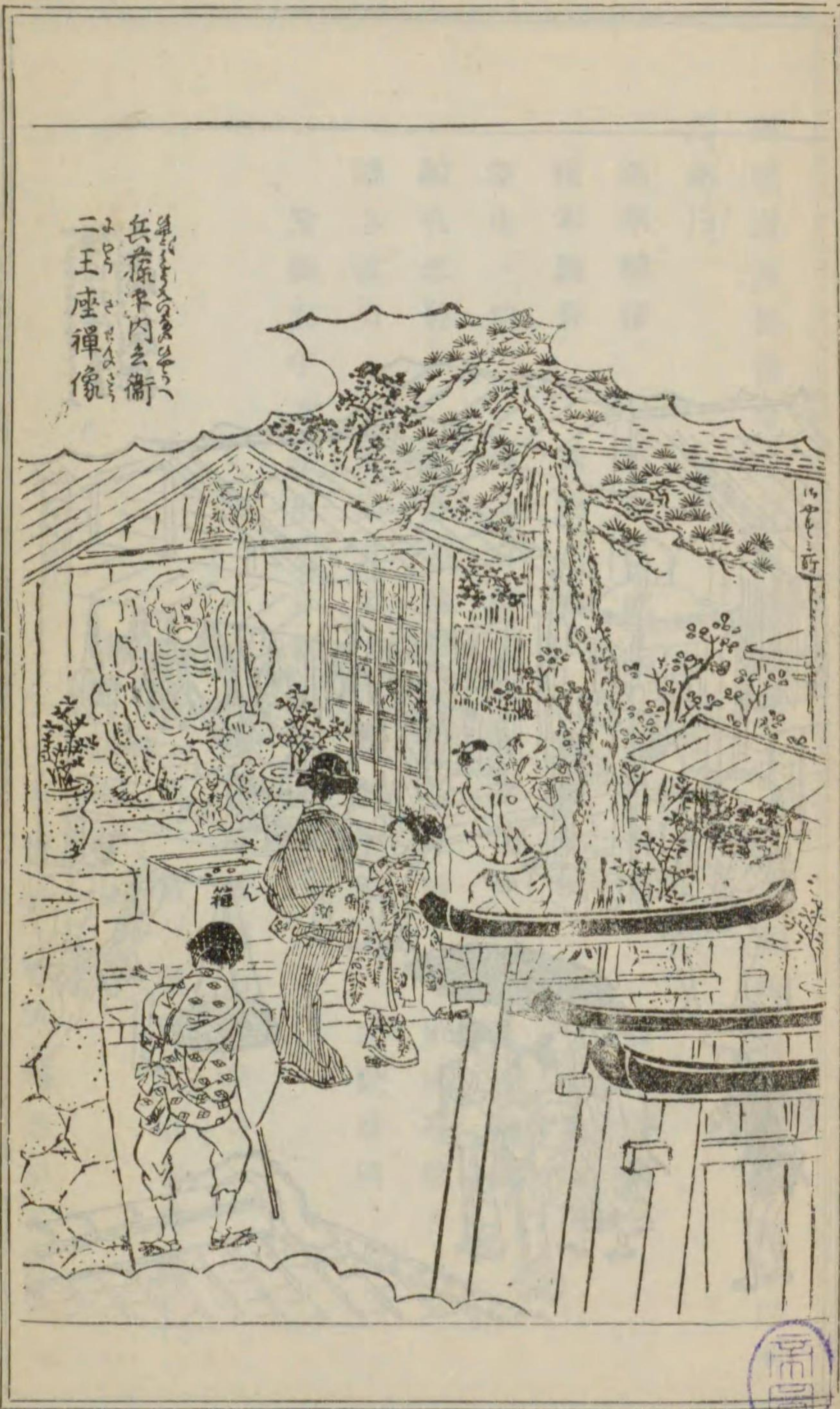


勢至の銅像のみありて、堂社なし。紫の一本に、山門の東の方に大佛を安置し奉らんと築きたる山ありといへるは、今の辨財天の社ある所の小山をいへり。故にむかしは大佛山といひけるよし。按ずるに、淡島明神の地に、錢塚辨天といへる小祠あり。是も當社と一體の神ならんか。小田原記、および北條五代記等の書に、大永二年九月のはじめ、北條氏綱よりの使として、富永三郎左衛門、古河の御所へ参りける歸るさ。當寺の觀音へ参詣せしに、折ふし十八日なれば、當よりも殊に参詣の人群集す。此とき辨天堂の邊より錢湧き出づる事ありて参詣の人此錢をとる。寺僧制しけれどもきかず。富永奇異の思ひをなし、歸りて此事を氏綱へ申しけるよしを記せり。

鯨鐘 同所にあり二六時是を撞けり。

鐘銘曰

寛永丙子歲、大猷院家光公。詣當山觀音堂。見伽藍破壞。即命改作之。凡二十餘所。又於堂後林中。創建東照宮。後僅數歲。民屋火起。神宮佛閣悉煨燼。公復命老臣某等。營造如初。自爾昌還。日往年來。超四十。風雨所侵。寢至敗毀。今大樹幕下。承先公之事。起土木之功。命山城守戶田忠昌。使十郎左衛門尉建部昌孝。五郎左衛門尉三浦義成。八郎右衛門尉國領重清。董匠事。嗚呼結構之崇。彩飾之美。仰而可望。俯而可欽。功德之大。豈可量哉。其樓上所掛之鐘。亦破裂。因改鑄之。備後守牧



兵衛平内去衛
二王座禅像

鎌田政清造
六ヶ藏石燈籠



野成貞喜捨黃金二百兩爲常報十二時之資糧鐘既成作銘並序刻之銘曰。

鎔銅鑄鐘	冶功已成	撞之擊之	殷々雷轟
鐘本無音	觸物能鳴	觸物是何	一切衆生
衆生一切	種々有聲	音聲種々	唯一銅鯨
鯨吼忽發	迷夢頓驚	況斯薩捶	威德崢嶸
誠念彼力	恭稱其名	諸若解脫	悲願維明

元祿五年次壬申八月日

武州豐島郡金龍山淺草寺
別當 權僧正宣存拜撰
鑄師武州深川
大田近江大掾藤原正次

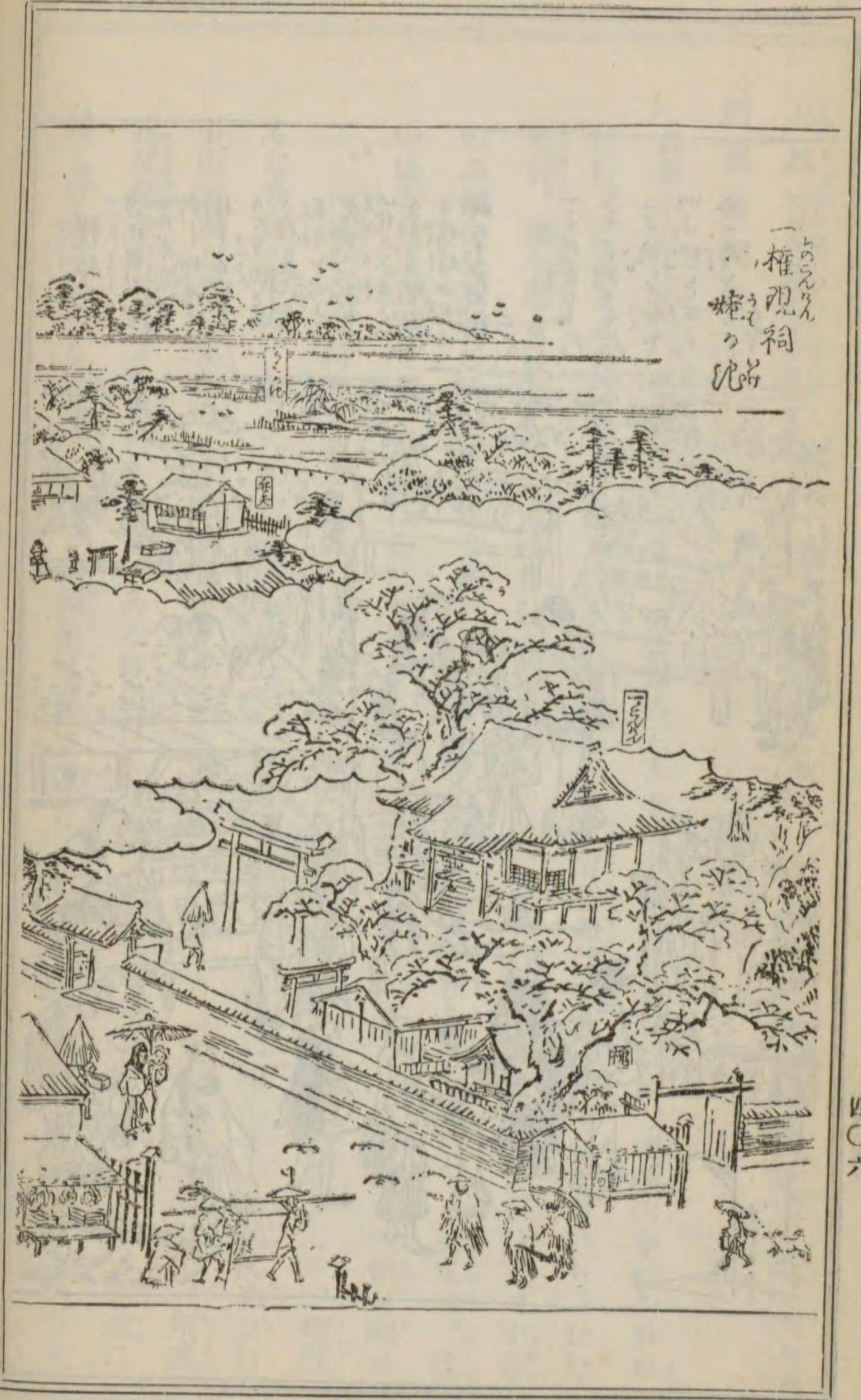
石枕 いしのまくら 坊中東中谷明王院にあり。庭中に小池あり、是を姥が池と號す。また當寺の什寶に、此石の枕あり。傳説は、文明年中、道興准后回國雜記に出たる文章をここに記す。頗る俗傳と異なり、舊記たるをもつて、左に擧げて其傳へ来る事の久しきををしらしむ

回國雜記云

此里のほとりに、石枕といへるふしぎなる石あり。其故を尋ねければ、中頃の事にやありけむ、なまさぶらひ侍り、娘を一人持ちはべりき。容色おほかたよのつねなりけり。かの父母、娘を遊女にしたて、道ゆきびとに出でむかひ、かの石のほとりにいざなひて、交會のふぜいを事としはべりけり。兼てよりあひづの事なれば、折をはからひて、彼父母、枕のほとりに立寄りて、ともねしたりける男のかうべをうちくだきて、衣裳以下の物を取りて、一生を送り侍りき。さるほどに、彼娘つやく思ひけるやう、あなあさましや、幾程もなき世の中に、かよるふしぎの業をして、父母もろともに惡趣に墮して、永劫沈淪せむ事のかなしさ、先非におきては悔いても益なし、是より後の事、さまざま工夫して、所詮我父母を出しぬきて見むと思ひ、ある時道行く人ありと告て、男の如く出立ちて、彼石に臥しけり。いつもの如く心得て、頭を打くだけけり。急ぎ物ども取らむとて、引きかづき



楊枝店
内楊枝を
常く店に
備へし
柳屋と
稱すりのを
りて平原とを
さるると今
其
業を
此の
多楊枝
柳の
一まはり
二まはり
三まはり
四まはり
五まはり
六まはり
七まはり
八まはり
九まはり
十まはり



たる衣きぬをあけて見れば、人獨ひとりなり。あやしく思おもひてよくくみれば我娘わがむすめなり。心こころもくれまどひて、あさましとも云いふばかりなし。夫それより彼父母かのふぼすみやかに發心はつしんして、度々たびたびの悪業あくごふをも慙愧ざんげ懺悔ざんげして、今の娘いまのむすめの菩提ぼだいをも深くとぶらひはべりけると語傳かたりつたへけるよし、古老こらうの人申しければ、

つみとがのくつる世よもなき石枕いしまくらさこそはおもき思おもひなるらめ

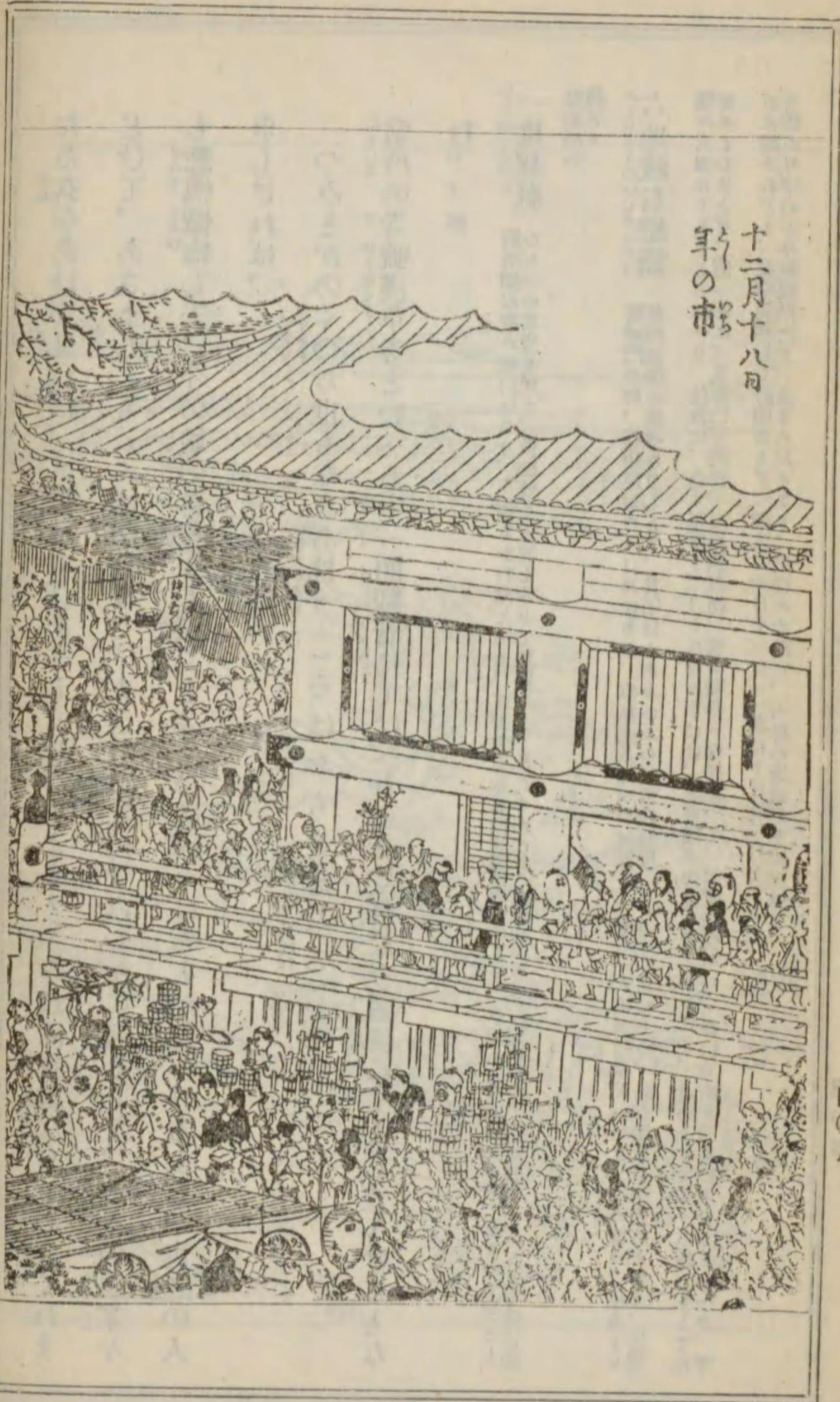
當所たうしょの寺號じがうせん淺草寺せんそうじといへる十一面觀音じゅういちめんくわんおんにてはべり。たぐひなき靈佛れいぶつにてましくけるとな

む。下略

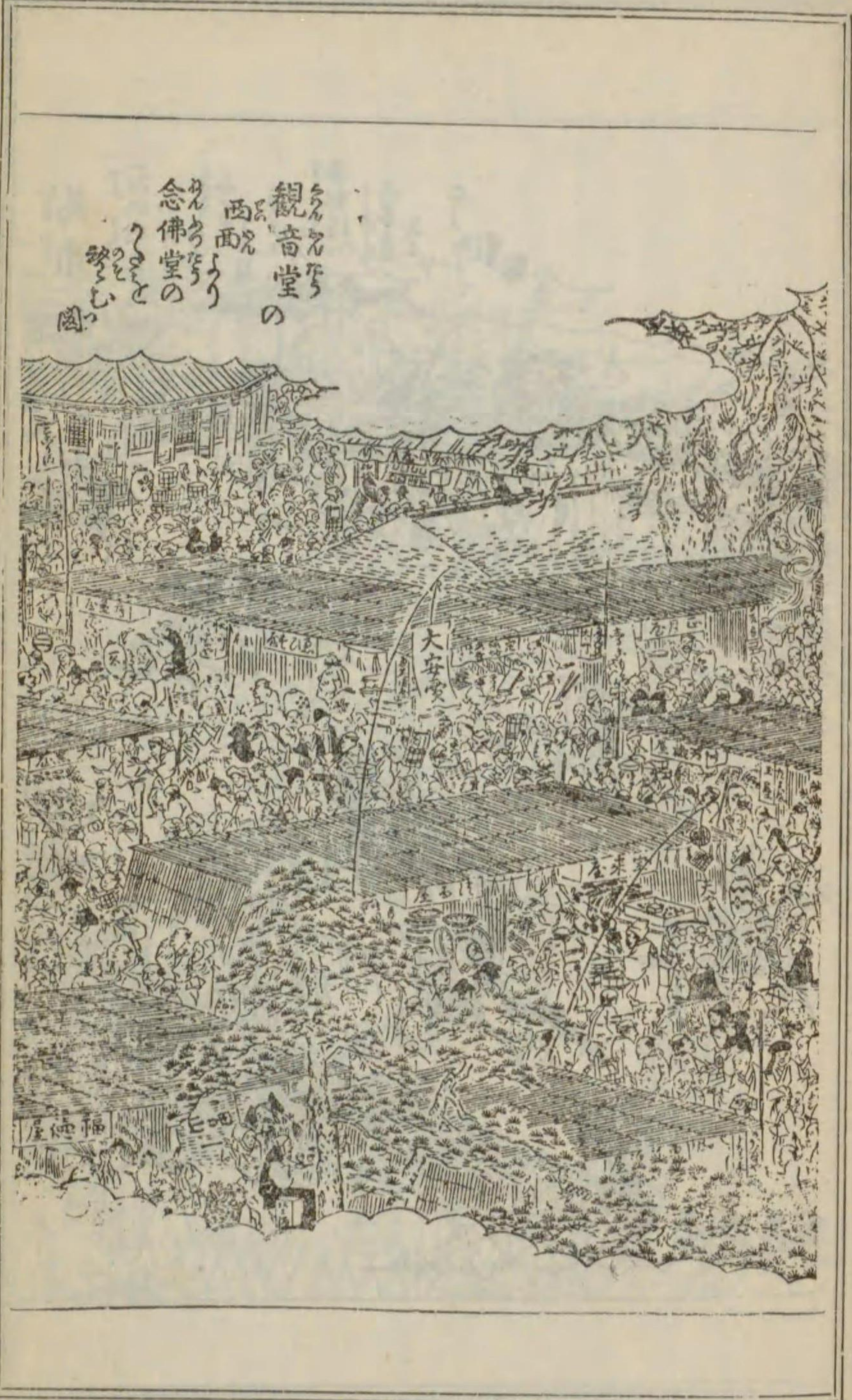
一 權現社いんのこんけん 同所顯松院の境内にあり。土俗あかむ堂と云ふ。往古當寺本尊觀世音出現のとき、草刈の輩、鬚アカザをもつて柱とし、音影向おんかげむかひの槐かゝりあり。

六 地藏石燈籠ろくじさうのいしどうろう 雷神門の外、花川戸町の入口角にあり。故に土人此所の河岸をさして、六地藏河岸といへり。この地は、往古より奥州海道の馬次うまじなりしとぞ。其頃はくわんもんの門前旅籠屋ハタゴヤ町にして、此六地藏石燈籠のあたり、馬駕うまがの立場にてありしといへり。此故に、今も毎年十二月十八日の市には、此邊淺草海苔を買ふ家々にて、近在より參詣する旅人をして止宿せしむるとぞ。傳へ云ふ、久安二年丙寅、左馬頭義朝、當寺觀音へ參詣あつて、諸堂造營の時、鎌田兵衛正清奉納ありしといへり。竿石に銘あれども、文字剥落して鮮明ならず。唯久安六月十一日一書に十月廿二日とあり、兵衛の九字のみ今猶現然たり。高さ六尺あまり、火袋の六面に、六肘の地藏尊を彫刻せり。

十二月十八日
新市の市



観音堂の
西
念佛堂の
勢



坊舎三十餘宇 當寺は淺草第一の精舎にして、境内靈神靈佛甚多く、枚擧にいとまあらず。故に悉く拾遺にゆづりて、こゝに略せり。

專堂坊 齋堂坊 常音坊 此三坊は、漁者三人の遺齋にして、妻帯をれば、今に至り子孫連綿として相續す。則ち隔年三月十七日祭禮の時、三人の輩三基の神輿を供奉す。又三坊のうちより、觀音略縁記、牛王寶印等を出せり。

雷神門 當寺南の惣門なり。左右に風雷の二神を安置す。明和の回祿に罹りて烏有となりしが、寛政の今再建ありて、昔に復せり。

額 金龍山 曼珠院二品良尙親王の眞蹟

本尊縁起に曰く、人皇三十四代推古天皇の御宇、土師臣中知といへる人、故ありて此地に流浪

ふ。日本紀に曰く、垂仁天皇三十一年、野見宿禰に、始めて土師臣の姓を賜ふとあり。野見宿禰は天穗日命十四世の孫なり。こゝにいへる中知も此遺裔なるべし。山岡明阿彌陀佛云ふ。中知は奈加登茂、又登茂奈利とも訓ずといへり。家臣檜熊

濱成、武成と云ふ二人の兄弟附添ひて、主従三人、恒に漁獵を産業とし、こゝに年月を送けり。

檜熊或は檜前(ヒノクマ)に作る、新撰姓氏録に、檜前舍人連と云々。然る時は、檜前に作りて可ならん歟。續日本後紀に、檜前舍人直由加麻呂、武藏國加美郡の人にして、土師氏と祖を同じうするとあり。又延喜式、兵部省諸國馬牛の牧の中にも、武藏國檜前の馬牧とあり。是等によるるときは、濱成武成も此國の人ならん歟。

同三十六年戊子三月十八日の朝、碧落に雲消えて、蒼溟に風靜なりければ、小舟に乘し、此所の沖に出でて、網を下すに、遊魚はさらにな

く、幾度も同じ觀音大士の尊像のみかより給ふ。異浦に至りてもいよくしかり。依て主従

驚き、是を奉持して歸り、機縁の淺からざるを思ひて、其家に安すといへども、只臭魚の穢

に雜る事を恐るゝのみ。世に草刈の童集つて、藜をもつて假の御

一字の香堂を經營り、彼尊像を安置し奉る。今の一權現の地其舊跡なり。其後舒明天皇の御宇、十年戊戌正月

十八日、靈告ありて回祿す。其後又三ヶ月を経て炎上し、夫より回祿七度に及ぶといへども、本尊は自ら火焰を免れ出で給

て無垢の靈場となさんか爲め、かくは本尊示現ありしとぞ。依て炎上の後靈驗いよくいじりし。後久しく堂宇破壊におよびしを、孝徳天皇、大化元年乙

巳、勝海上人、東行の次、適こゝに來て再營す。則ち當寺の開山と稱す。このとき勝海上人本尊の花容を拜して、

天慶五年壬寅、安房守平公雅 大系圖に、從五位上平公雅武藏守に任ずるよし記せり。前太平記第六卷に、藤原秀郷平親

王將門を誅する功によつて、天慶三年三月廿九日、武藏下野兩國の守に任ぜらるゝとあり。又同書に、同四年七月十六日將門記に二月十四日誅すとあり。將門純友誅戮の時、兩度の戦ひに軍功あるを以て、武藏守に任ぜられしが、同五年の夏、任限満たずして重病にかゝつて卒す。依て公雅を此國の守に任ぜらるゝとあり。公雅は常陸大掾國香の弟上總介良

兼の長男にして、平將門を誅め、當寺に詣で、當國の大守たらん事を祈求す。いくばくならずして遷任

し、此國の守となりければ、靈驗の空からざるをあふぎ奉り、本堂および寶塔、鐘樓、樓門、

經藏、法華、常行六所の社壇 六所の社壇のまだ考へず、を造立し、田園數百町を附して、長く龍華の曉を

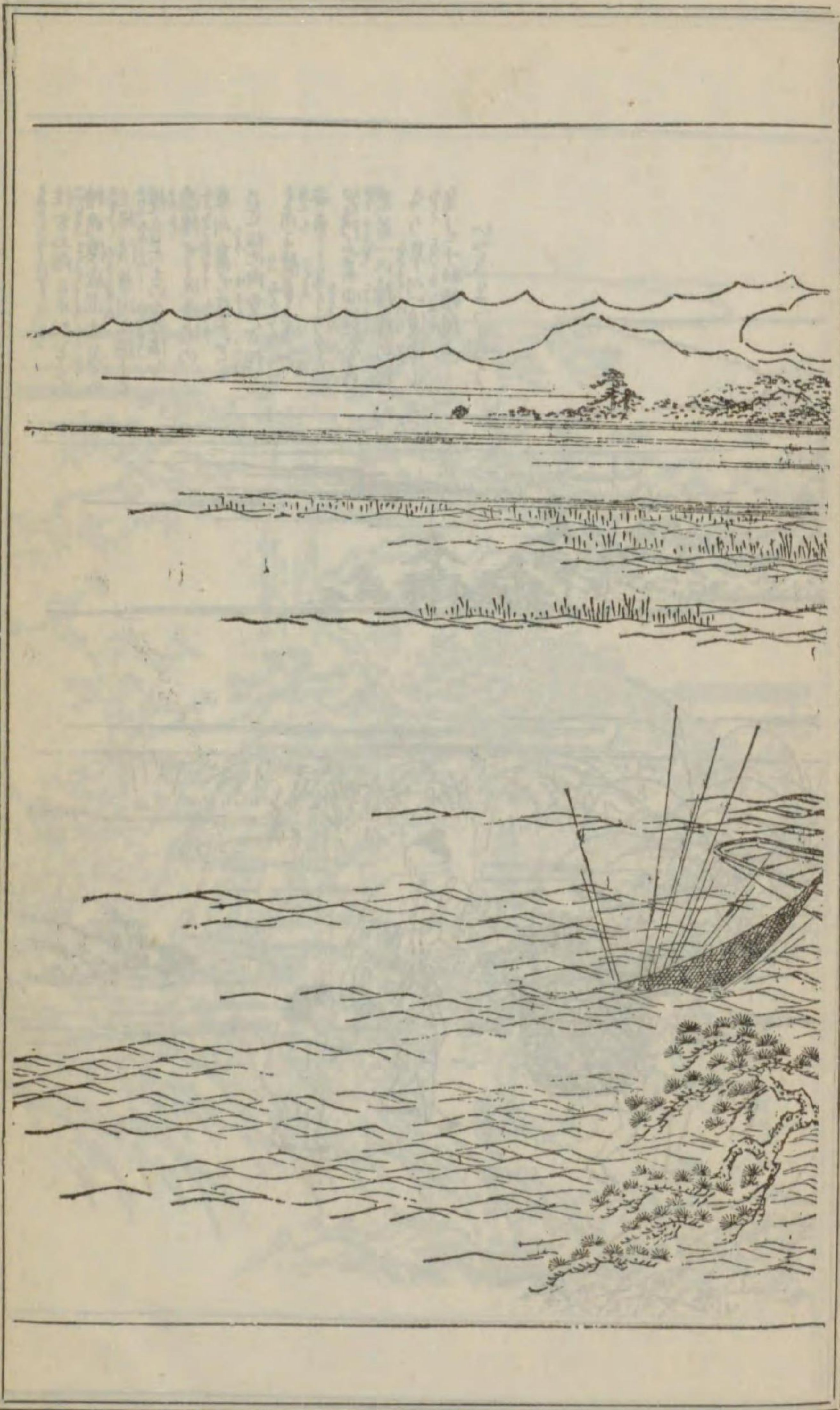
期せしむ。又長久二年辛巳十二月廿二日、大地震動して佛遙に後、白河院承曆三年己未十二月四日、堂

閣顛倒せり。寂圓阿闍梨、永承六年に造營す。

開陽之部 卷之六

四一三

後草寺観音大士
の土視あり一ハ
推古天皇二十六年
戊子三月十八日あり
土師臣中知とよひ
繪前廣成武成等
の土徒三人の宮
元川、細とわいて
は卒をんと得まり
しよ一録記
の中よ詳あり



往古土師臣中知と云ふ
 神前傳成武成等の
 草川一羽一
 湖音大士の是依と
 感得て以此此の
 草川集て茲を
 乃て板の御堂と他
 其内は散奉ると
 安重しとありと
 のはけんを田舎の
 野谷一の権視の他
 ろり草川一羽一
 乃て十社權視と
 Sushigawa



塔回祿す。其時本尊火中を出て、坤の榎の梢にうつり給ふ。承徳二年戊寅四月、藤原成實、四箇年の間、當國を拜任し、猶重任の望ありて祈願し、靈驗あり。依て代々罕籠の田畑を尋ねて、元の如く皆施入し奉る。按ずるに、大系圖に、源成實と云ひし人、武藏介にたり。なりたる事あり。こゝに藤原とあるは誤なるべし。其後、左馬頭源義朝、當寺へ參詣ありて、堂塔を修營し、彼坤の榎を以て、新に觀音の像を彫刻して納めらる。其像今内陣に安ず。臺座に奉行鎌田兵衛政清と書き付けてあり。坂東願禮記に、康治年中、義朝當寺觀音へ詣るとあり。又花川戸六地藏の石燈籠の銘に、久安二年丙寅とありて、鎌田兵衛の建立なりといへり。依て按ずるに、康治より久安まで、わづかに五年の間なればいづれも政清命をうけて普請の事なすべし。又仁安三年戊子、用舜法印、大衆に同心して、佛閣を修營す。治承四年庚子十月十七日、縁起に、八月十七日とあるは誤なり。十七日は、北條を初め宗徒の人々、八牧判官兼隆が館にむかふよへも渡らざる先なれば、頼朝當寺へ參詣あるべきにあらず。又盛衰記に、治承四年九月十一日、武衛武藏下總の境なる松戸の庄市川に著き給ふと、東鑑には、治承四年十月二日、武衛大井(ト)平(ト)隅田の兩河を渡らるるとあれば、八月十七日とするは大なる誤なり。右ひやうのすけみなもこのよりさもさんけい。兵衛佐源頼朝參詣ありて、田園若干を寄附せらる。是平家追討の祈願に依てなり。承久三年辛巳には、禪尼政子二品、及び相州、武州兩刺史敬信し、願書を捧げ、白檀の大悲の像一軀と、白色の綾羅の帳一ながれ、信濃布千端を寄附あり。また伏見院御宇、正應二年己丑十月廿一日、大輔聖といへる沙門、其頃堂宇の破壊を歎き、十方に勸進して、正安二年庚子三

月十八日修營落成す。其後建武年中、將軍尊氏、鎮西發向の折から、夢想に依て當寺觀音へ願書をこめられ、同觀應三年壬辰、今年文和と改元あり、南朝の正平七年なり。閏二月廿日、縁起に三月廿日とあるは誤なり。武藏野合戦にも、兼て勝利あらん事を祈願ありて、合戦の後、美田を寄せらる。永和四年戊午十二月十三日、伽藍回祿するなる者、勸進の功を募り、應永にいたり建立成就せり。夫より後、天文四年乙未八月十八日、炎上す。其頃相州小田原の城主北條氏綱、當國を領しければ、破壊の諸堂再興ありて大伽藍とし、天文八年己亥五月十八日當寺奉加帳に、島津長徳軒、大道寺盛富、松田盛秀等の名を注し加ふ。是本文の意に合せり。又知足軒友山翁の説に、元和中迄の棟札に、武州河越城主大道寺駿河守是を奉行すとありと云々。忠善上人を以て別當職とす。忠善上人は北條幕下遠山丹波守の末子なり。又其師忠海上人といへるは、攝州細川律師定禪の末葉、武州金澤の城主伊丹三河守の子なり。三河守宿願の事ありて末子を沙門とし、當寺の別當とす。是より後は、代々伊丹遠山の兩家より別當職を相續せしとあり。然るに元祿年中、故ありて、或人云、貞享二年の事なりとぞ。別當知樂院權僧正宣存、鎌倉へ退居し、夫より東叡山に屬す。當寺本尊は、殊に大神君御信仰最も厚きに依て、寺領若干を附せられ、寛永十九年二月十九日、回祿の後も、慶安三年庚寅六月三日、手鉞はじめありて、堂塔御建立ありしよりこのかた、公より修理を加へられ、誠に無雙の靈場となれり。

修正會 除夜より正月六日に至る一七日の間、毎夕追儼あり。 牛王加持 同五日巳の刻執行す。同日三社權現の社前に流鏑馬(ヤブサメ)あり。 多羅尼會 同十二日より十八日に至り一七日の間、晝夜盂蘭盆にて修行す。

祭禮 隔年三月十八日なり。この祭禮は、往古正和元年の神託に依てこれをはじむ。十七日に三社の神輿を本堂へうつし、拍板、ビンザサヲ獅子舞あり。當日は神輿を淺草の大通りを渡り、淺草橋に至る。それより船に乗じ、歸興は駒形より上らせらる。此日舊例として、武州六郷、大森等の海村より獵船を出し、かしこより漁人來りて、これを供奉す。往 同日近在の農夫、震を持ちて出でて、雷神 拍板 古此地の獵師を大森村の邊へ移しけるより、今も祭禮に此儀有りといへり。 門の前、および馬道等の邊にて是を驚ぐ。 拍板 毎年六月十五日執行す。此日も三月十七日の如く、本堂の前に舞臺をしつらひ、是を勤む。神樂其 千日參 七月十日前夜より參詣外神事を執行す。此祭禮は、鎌倉右府將軍再興ありしといへり。其拍子木、其古雅にして殊勝なり。 千日參 群集せり。俗にこの日をもつて、四萬 年の市 毎歳十二月十七日十八日兩日のあひだ、衢に假屋を備け、往連飾懸來飾物等、すべて歳首の賀に用ふべき種六千日詣と稱す。 年の市 種を賣買す。淺草大通および下谷通り、ともに群集す。殊更境内は尺寸の地なく、只人を以て地を覆ふに異ならず。實に此日の繁昌江戸第一にして、遠近に轟 節分會 此日節分の守札をいだす。是を受け得んとする輩、堂中に充ちて、其器けり。往古は毎月三八の日、此所にて市立ちしとぞ。 節分會 此日節分の守札をいだす。是を受け得んとする輩、堂中に充ちて、其器抑當寺は一千百七十有餘年を経るの古刹にして、實に日域無雙繁昌の靈區なり。其靈驗の著き事は、普く世に知る所なり。常に金鈴玉磬の響絶えず、焼香散華の勤行怠る事なし。朝より夕に至る迄、參詣の貴賤袖を連ねて場に充滿てり。殊更月毎の十七日には、通夜の緇素堂中に參籠して、終夜誦經念咒怠慢なし。又境内賣物の數多きが中にも、錦袋圓、淺草餅、楊枝、珠數、五倍子、茶釜、酒中花、香煎、浮人形の類、殊に淺草海苔は、其名世に芳し。手遊、錦繪等を商ふ店、軒をならべたり。他邦の人ことよに至りて、其繁昌をしるべし。 淺草川 隅田河の下流にして、舊名を宮戸川と號す。 古鹿子(フルカノコ) 白魚、紫鯉の二品を、此

河の名産とす。美味にして是を賞せり。鰻鱺、蜆も又佳品とす。

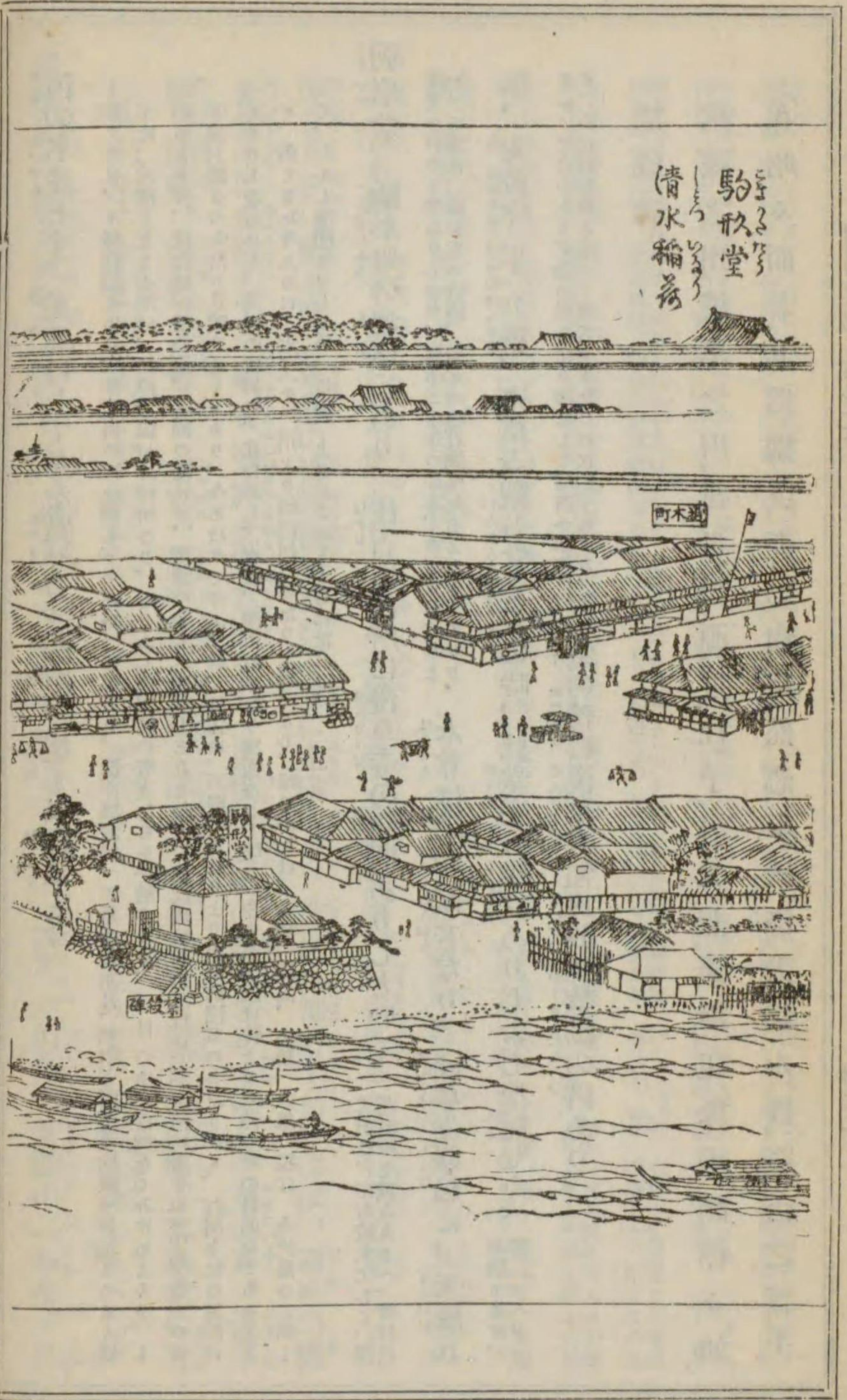
按ずるに、本尊縁起の中に、宮戸川の沖に網を下すといへる事あり。源平盛衰記、治承四年九月、賴朝下總より武藏へ打越えらるる條下に、石濱とまうす所は、江戸太郎が知行所なり。をりふし西國船の著きたるを千艘あつめ、三日の中に浮橋をくみけるとあり。しかるときは、往古は石濱の邊、入津の邊にて、西國の船も入來りしとみえたり。又氏康武藏野記行に、隅田河に著きぬ。(中略)むかひは安房上總まのあたり見渡さるるとあり。今あはせて考ふれば、往古は、石濱のあたりより東南此淺草のあたり迄も、打開きたる海面にてありしなべし。土俗の口碑に、其むかし、本所、深川のあたり海面なりし頃は、今の眞土山は沖より入津の船の目的にてありしとぞ。仍てまた考ふるに、木下(キケ)川より須田村のあたりを限りとし、南のかたは、寺島、柳島、牛島、大島、猿江、永代島など稱して、むかし海面なりしといへる事、よりどころとするにたれり。

駒形堂 駒形町の河岸にあり。往古は此所に淺草寺の惣門ありしといふ。其頃は、左右並木にして、櫻殊更ながめも深かりしにや、寛永二十年の印本、あづまめぐりといへる書に、駒形堂の近邊、並木の櫻花爛漫たるよしをしるせり。本尊は馬頭觀音なり。淺草寺縁起に、天慶五年、安房守平公雅、淺草寺觀音堂造營の時、此堂宇も建立ありしよしを記せり。新願ある者、(ウシ)にはかならず駒の形を作り物にして堂内へ奉納す。故に駒形堂と唱へ、地名もまたこれに因てある。此堂の傍に淺草寺領内殺生禁斷の碑あり。

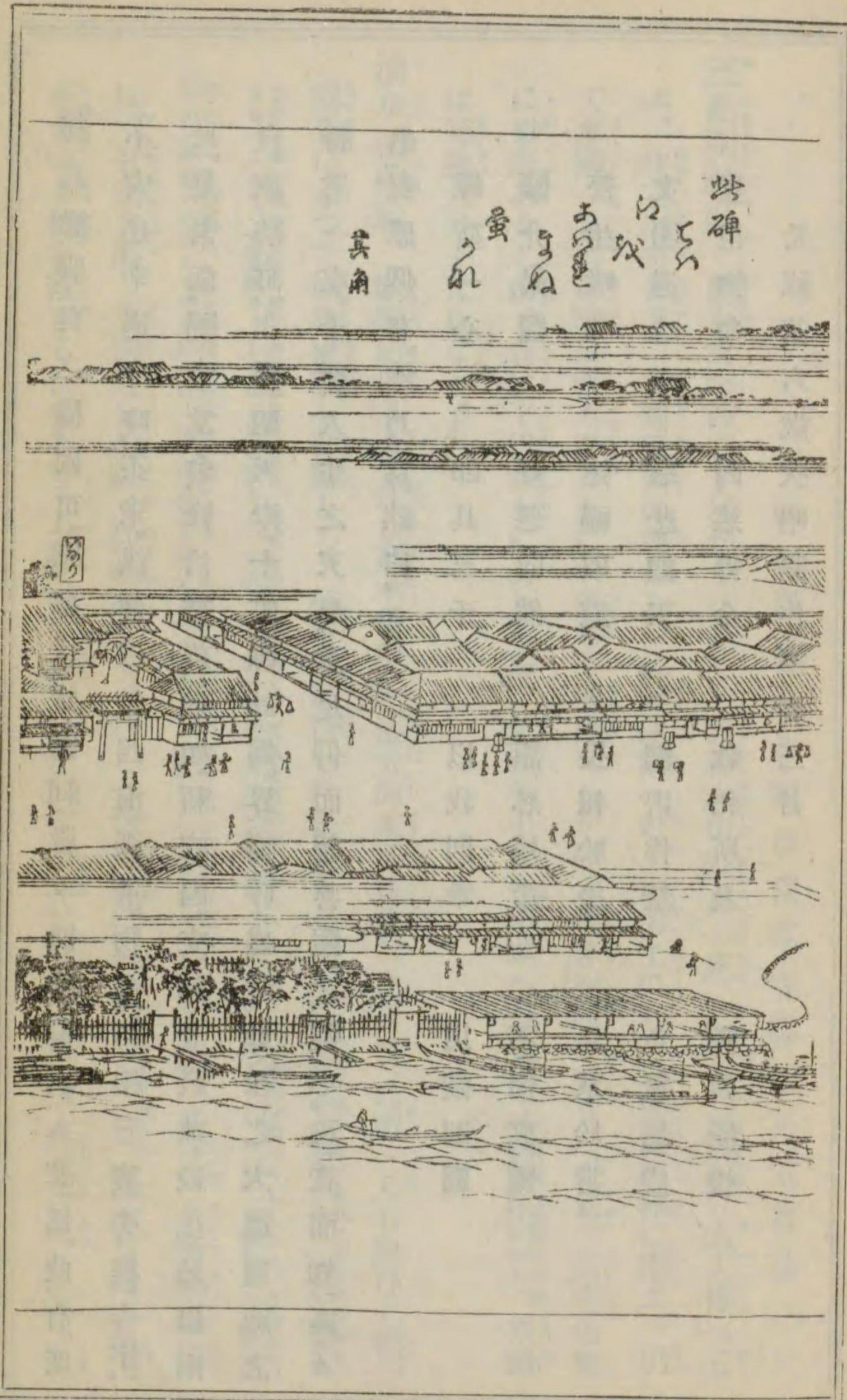
禁殺碑

武藏之州。淺草之川。遠出乎源。近注于海。大悲薩埵。現像垂跡。洋洋如在。昭々而著。其爲靈境。亦已尙矣。然恣事釣漁。天傷水族。冤苔之慘。不

駿秋堂
清水稲荷



此碑
白成
あつ
まぬ
之
其角



く是を汲む由まうしければ、大師憐み、獨鈷を以て加持したまひければ、其所に清泉涌出す。其傍に當社を勸請し給ひけるといふ。

諏訪明神社 巨所諏訪町にあり。祭神は信州の諏訪に同じく、健御名方命なり。當社の權輿は至つて久遠にして、來由等詳ならず。

榎寺 同所黒船町にあり。淨土宗にして、増上寺に屬す。池中山正覺寺と號す。本尊阿彌陀如來は、惠心僧都の作にして、開山は觀智國師なり。往古當寺に名ある大木の榎ありし故に號とせりといへり。

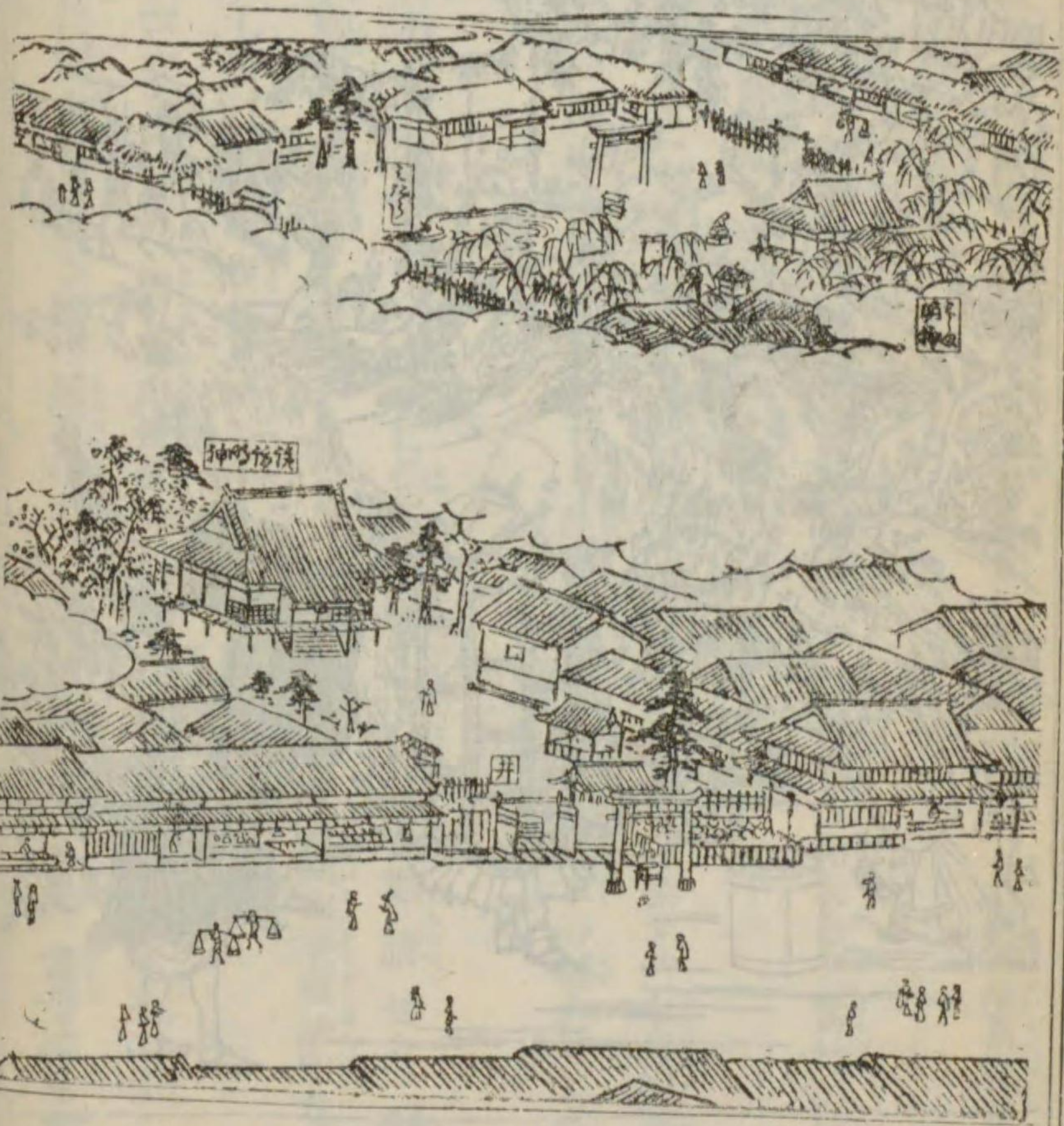
石清水正八幡宮 大倉前にあり。元祿五年、台命に仍て石清水正八幡宮を勸請せり。昔は文八幡と稱し、高野山人派の僧住職ありしが、故あべつたう別當を大護院と號し、雄徳山と云ふ。開山幸沼法印なり。つて其地を改められ、石清水正八幡宮を勸請せり。

護摩堂の本尊は五大明王にして、運慶の作なり。閻魔堂 八幡宮より南の方三丁を隔つ。稱光山長延寺と號す。本尊閻羅王は運慶の作にして、其丈一丈六尺あり。額に閻王殿とあるは、延享年中、來聘韓人の筆なり。當寺は慈覺大



改法大師東國在死の
とこ入り武蔵のふり
りてりみまの
やそのふり二老
のまろく水を運ふあり
大師(原)く是をあられと
あひたらうせの(此)を加持
し(此)の(此)と(此)と
清泉涌出する
に(此)を(此)と
(此)を(此)と
(此)を(此)と
(此)を(此)と
(此)を(此)と
と(此)の(此)と
と(此)の(此)と

三島明神社
識訪明神社



師草創ありて、疇昔は下野國にありしを、文永年中、此地へ遷すとぞ。

或説に、昔は霞ヶ關にありしを、國初の頃、馬喰町へうつ

され、後復いまの地へひかるるといへり。毎歲正月七月十六日、參詣群集す。

奪衣婆像 運慶の作にして、本尊閻王と同木なりといへり。化馬地藏尊 聖徳太子の作、昔は紀の那智山にありしとぞ。昔佛法を講明せし女あり、花

山觀世音 花山院深く觀音薩埵を尊信し給ひ、眞蹟の普門品、大悲の大陀羅尼等の經卷をもつて、大悲の像を作らせたまひ、佛眼上人

尊像なり。故あつて東叡山よりここに移し奉る。是則ち爰佛(オヒブツ)の權輿なり。當寺境内に、文永十一年の古墳あり。

祇園社 同所閻魔堂の南に隣る。當社牛頭天王は、天曆年中の鎮座なりとぞ。大倉前の總鎮

守にして、別當を大圓寺と號す。

十王堂 境内にあり、慶長十八年(又寛文ともいへり)御建立ありしとぞ。中尊は地藏菩薩にして、左右に冥府十王の像を安置せり。

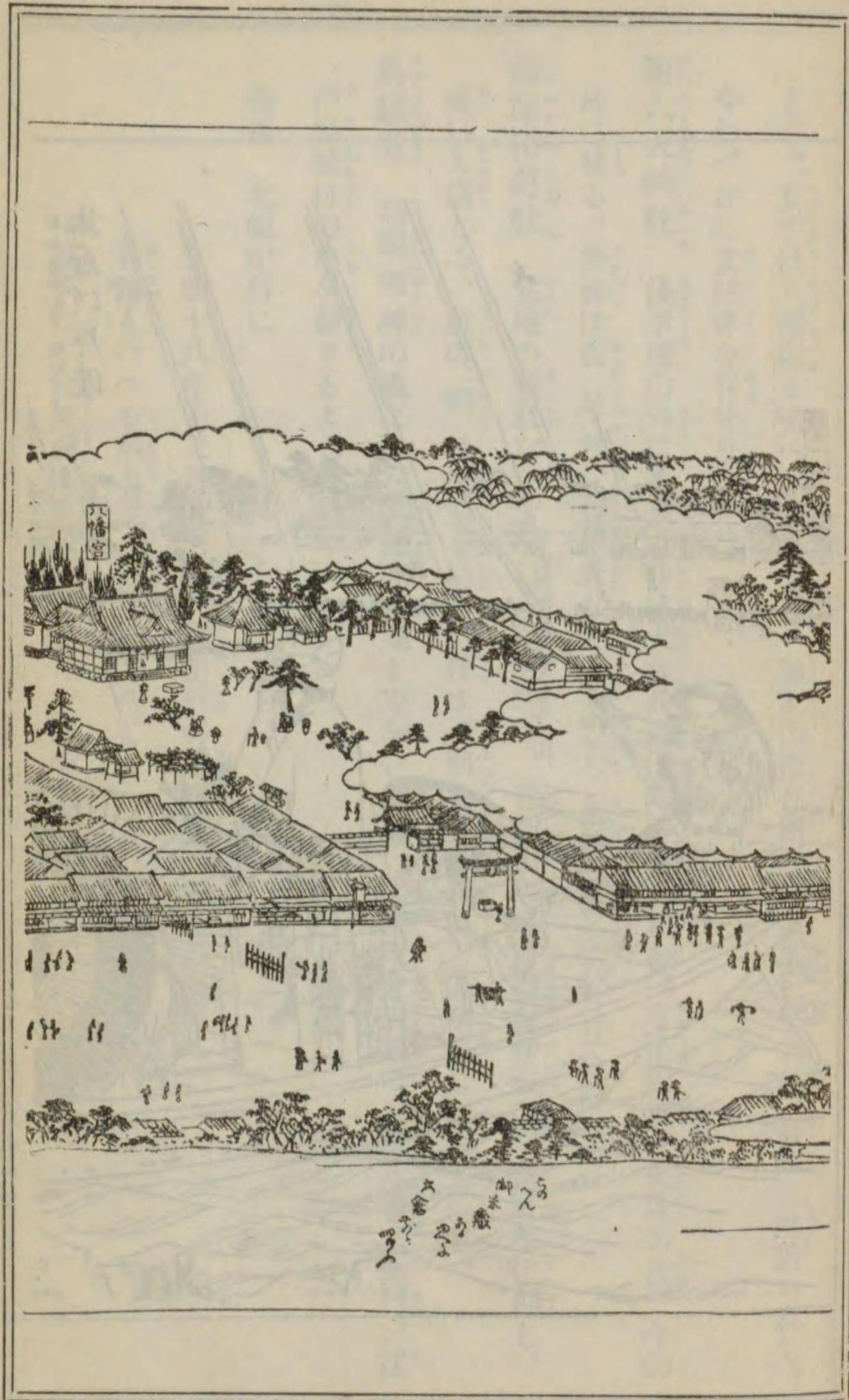
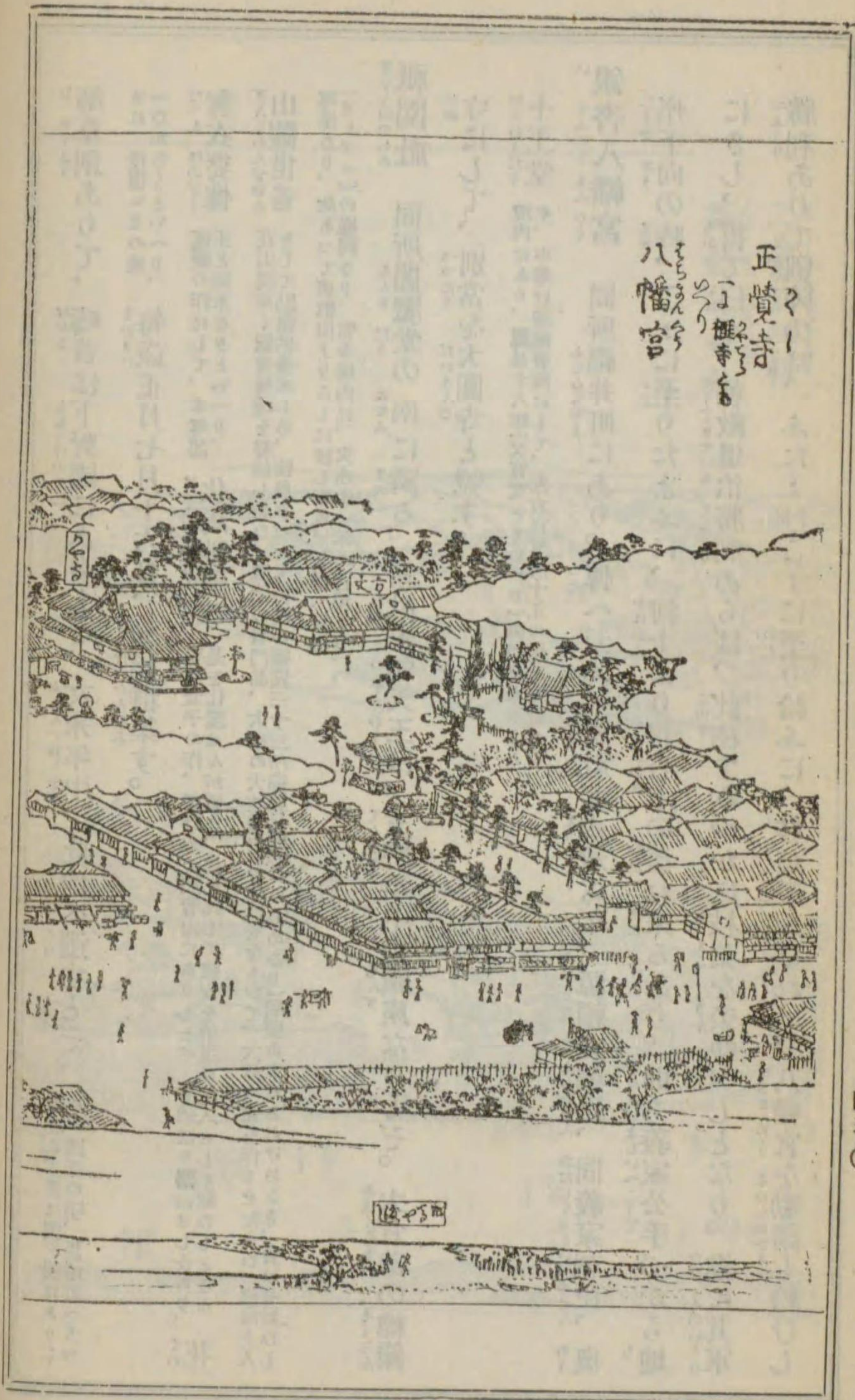
银杏八幡宮 同所福井町にあり。傳へ云ふ、當社は永承六年、源頼義朝臣、同義家朝臣、奥

州下向の時、こよに至りたまふに、河上より银杏木の流れ來るあり。則ち義家公手づから地

にさし、誓て曰く、朝敵退治勝利あらば、此樹すみやかに枝葉を榮ゆべしとなり。遂に其軍

勝利ありて凱陣の時、ふたよびこよに至り給ふに、枝葉榮えければ、八幡宮を勸請し給ひし

正覺寺
八幡宮





とぞ。其昔は八幡塚と唱へけりとなん。神木の銀杏樹は、延享二年の秋、暴風に吹折られて、今わづかに其枯株を存せり。

第六天神社 浅草橋の外にあり。昔は大倉前森田町にありしを、享保四年、火災の後、今の

地に移る。祭神は面足尊、惶根尊なり。天神六代祭禮は毎歳六月五日なり。

篠塚稻荷社 當地の舊社なり。往古此所を孝原の里と云ふよし、社傳に云へり。昔新田の家臣篠塚伊賀守、當社を信仰し、

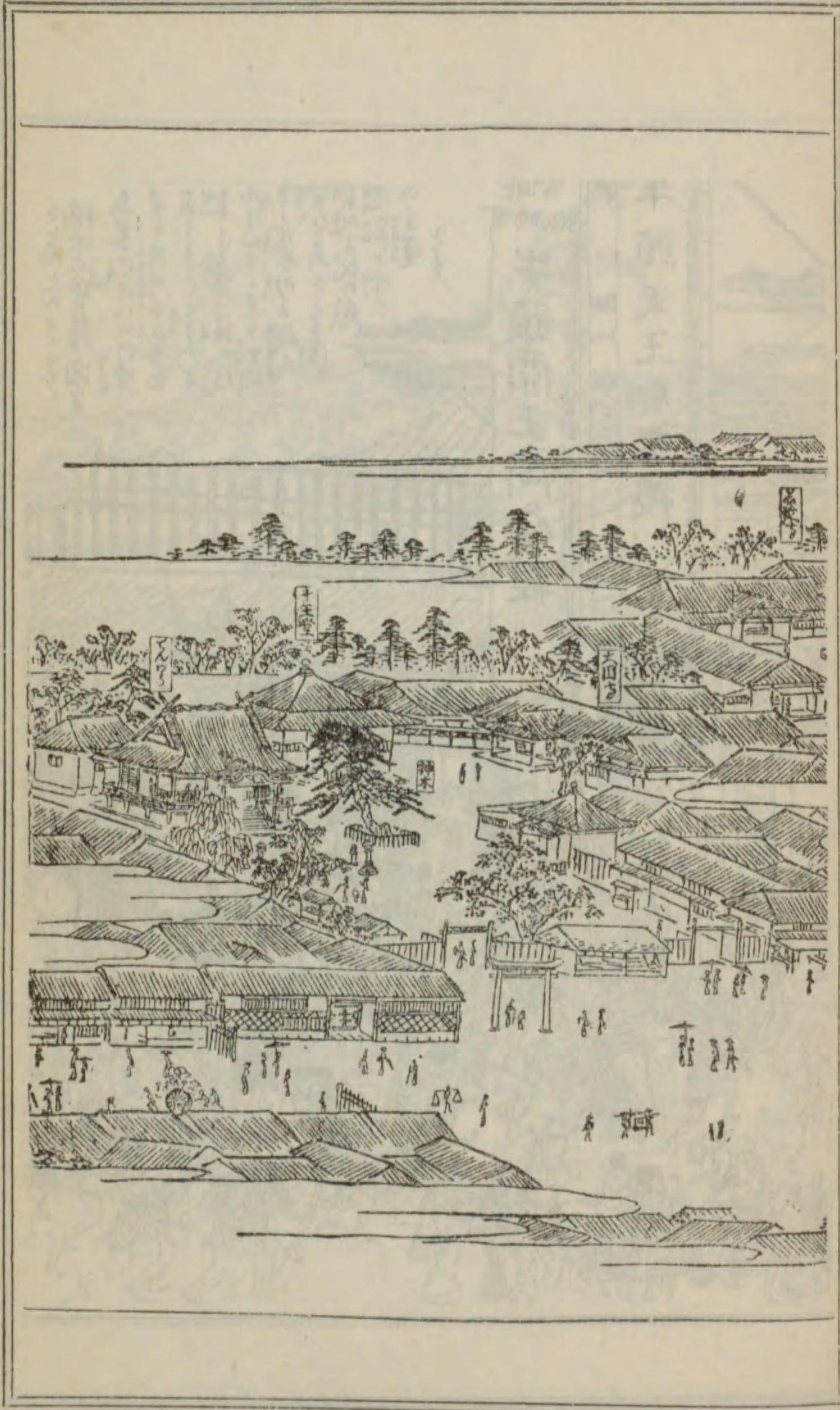
晩に入道して、社の側に庵室を結びて住す。別當玉藏院は、其裔孫なりと云へり。

鳥越里 鳥越明神の邊より、大倉前の邊までをいへり。北條家分限帳に、富永善左衛門、江

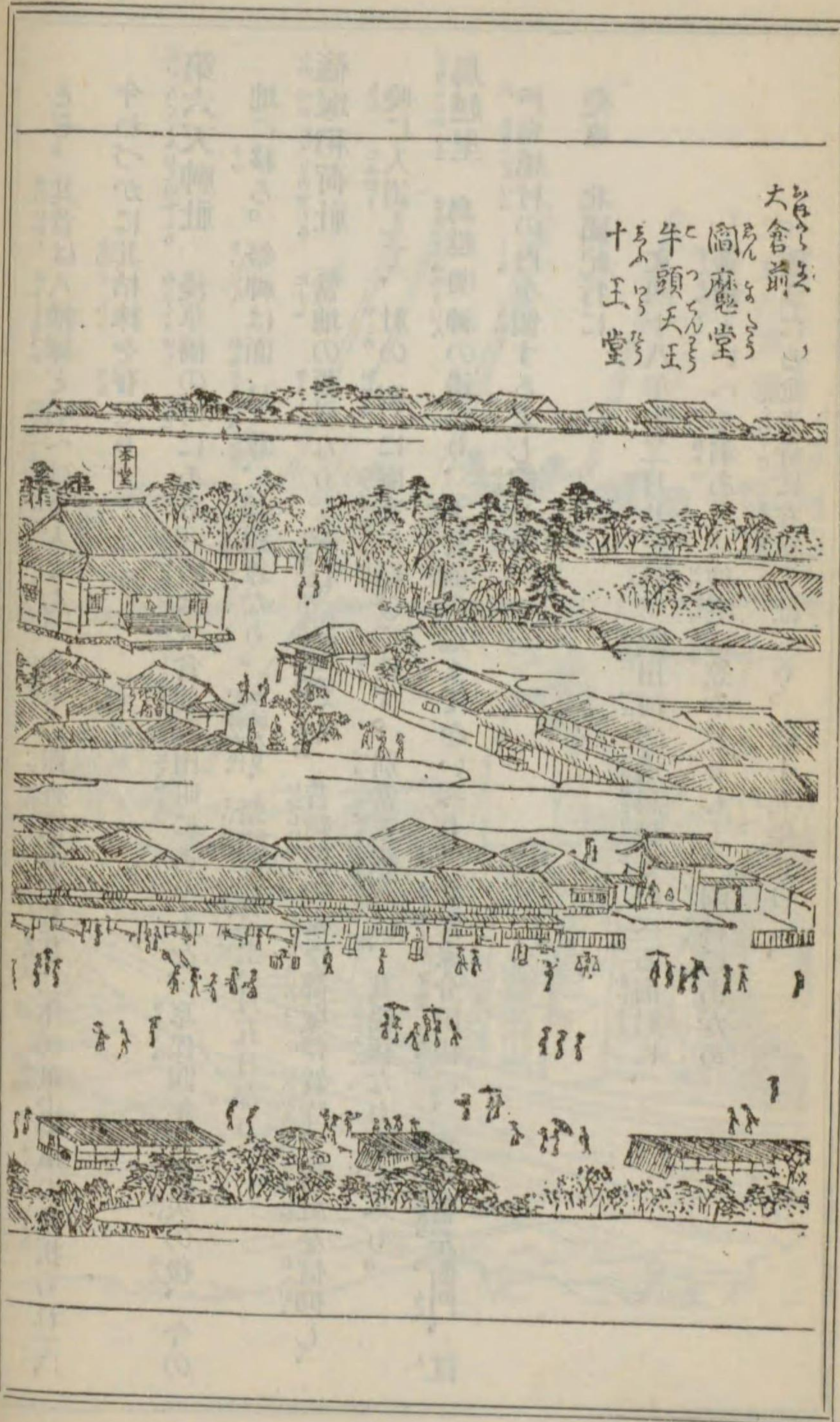
戸鳥越村の内を領するよし記せり。

堯惠 北國紀行に

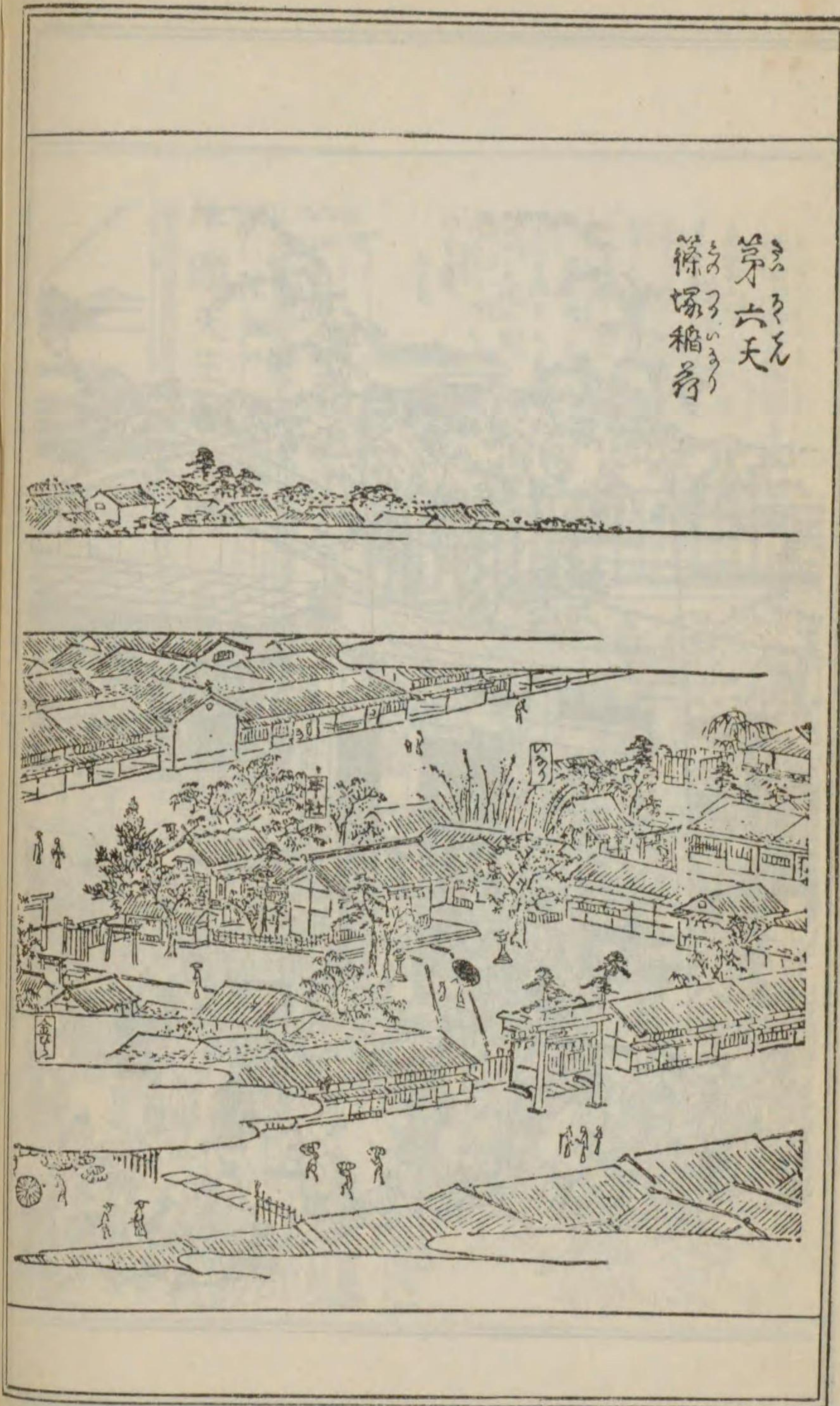
文明十八年十二月廿三日、隅田河の邊鳥越といへる海村に、善鏡といへる翁あり。彼宅に笠やどりして、閑林にあがめ置きたる金光寺に在宿しはべり。同十九年元日に、



大倉前
 高麗堂
 牛頭天王
 十王堂



第六天
孫塚稲荷



をさまれる波をかけてや筑波根のやまとしまねに春の立つらん 堯 惠

回國雜記

鳥越の里といふ所に行きくれて

暮にけりやどりのいづくといそぐ日になれも寝に行く鳥越の里 道興准后

鳥越明神社 元鳥越町にあり、此邊の産土神とす。祭神日本武尊、相殿天兒屋根命なり。昔は第

熱田明神を合せて、鳥越三所明神となづけしが、正保二年、此地公用の爲に召上げられ、三谷にて替地を給ひ、

なれども、舊記等散失して、勸請の年曆來由等詳ならずといへり。祭禮は隔年六月九日な

り。

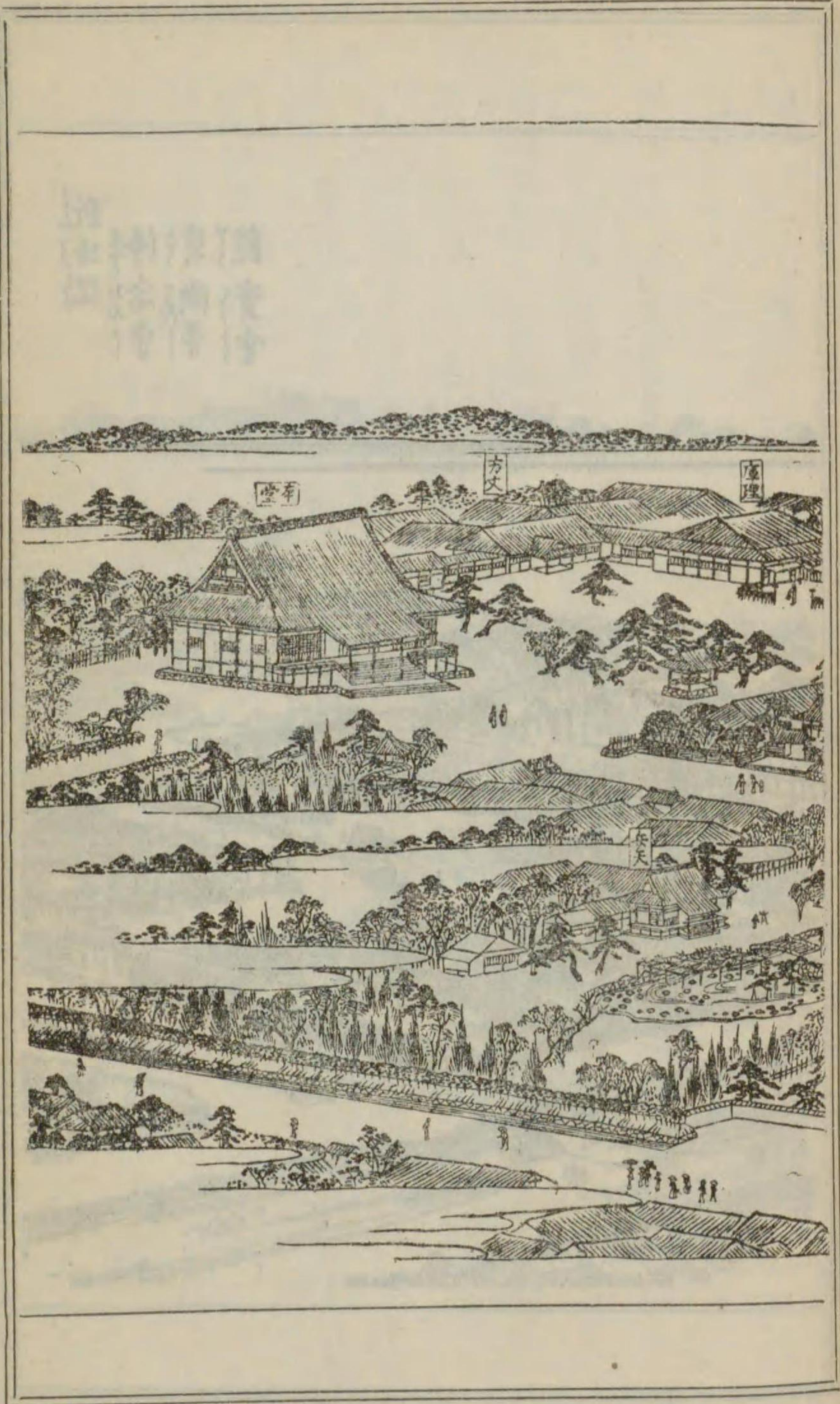
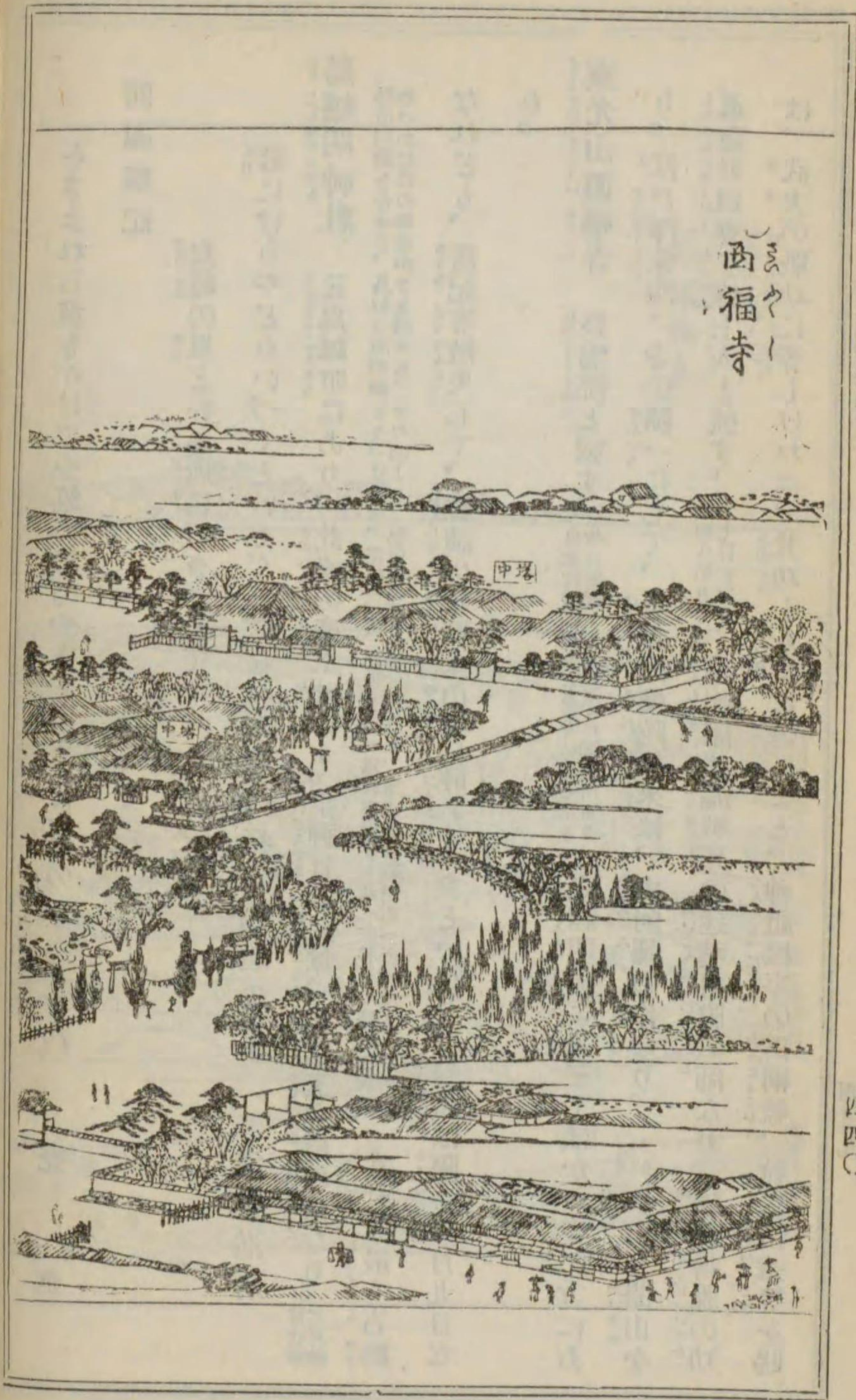
東光山西福寺 良雲院と號す。良雲院殿御尊骸を當寺に葬し奉る。鳥越明神より三丁ばかり東の方にあ

り。江戸浄宗四ヶ寺の隨一にして、本尊阿彌陀如來は、安阿彌の作なり。三州上りうつ 開山を

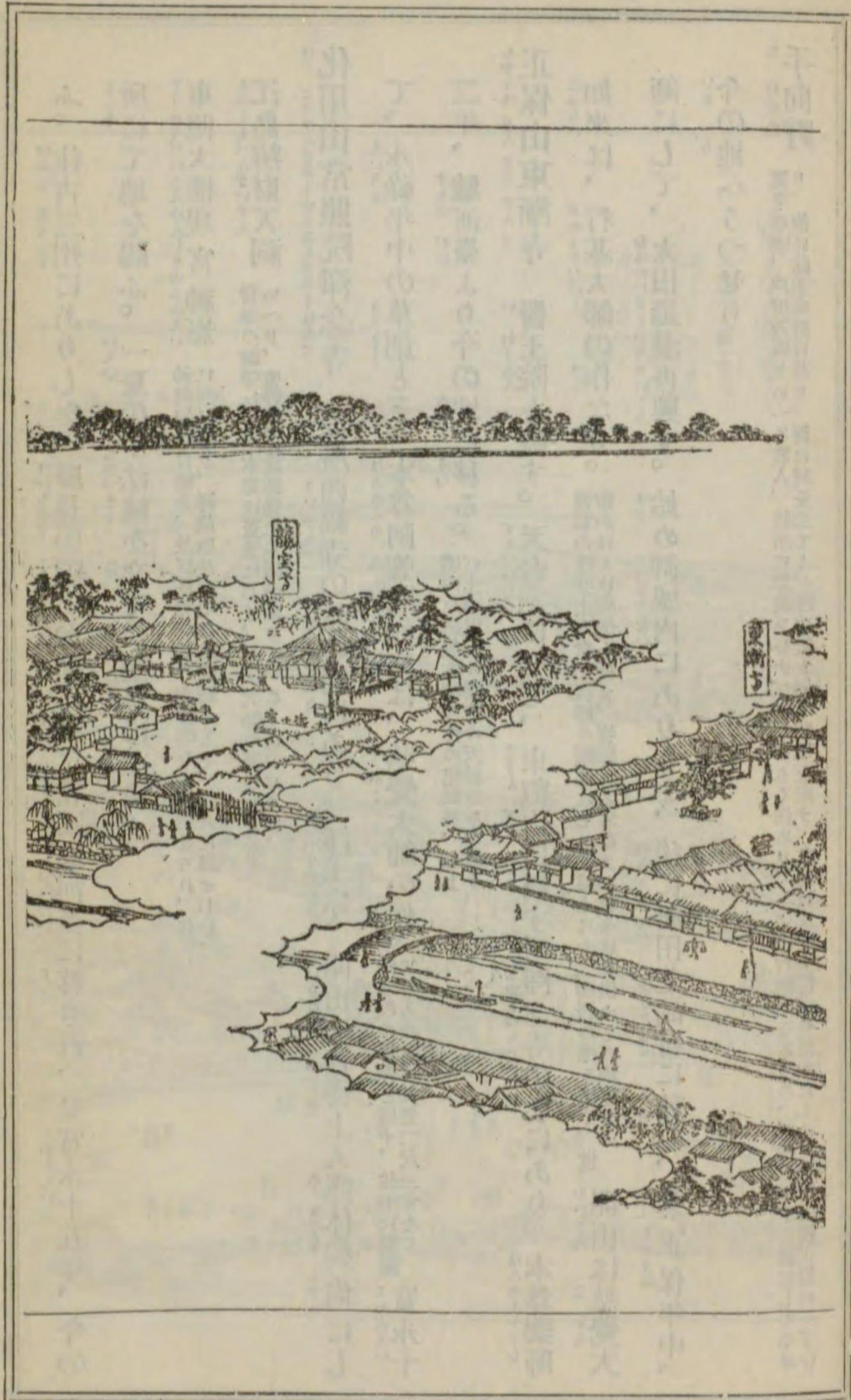
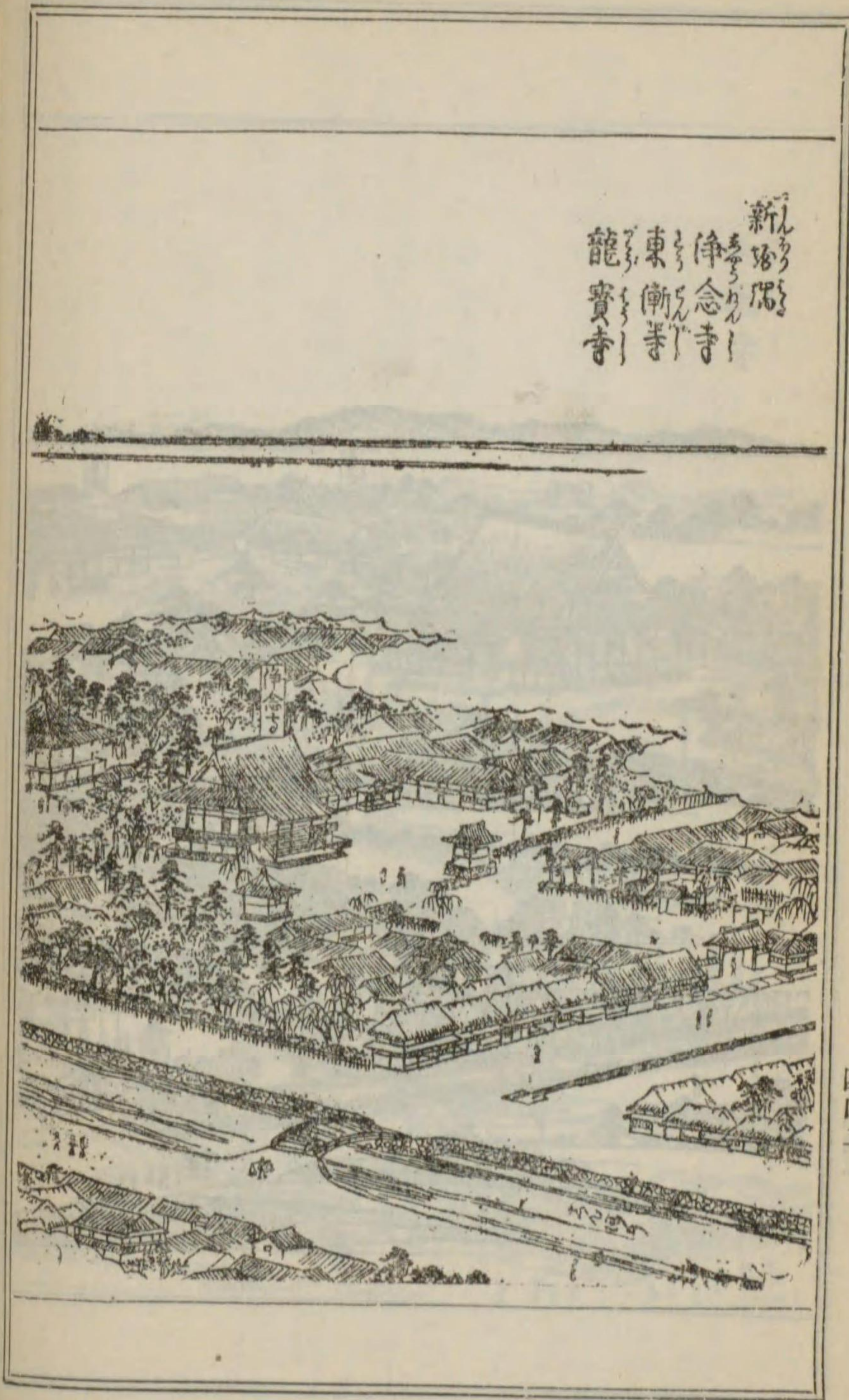
眞蓮社貞譽了傳上人と號す。元和八年五月二 遠州犀ヶ 淵戰死の迷魂得脱の師なり。迷魂得脱の功

は、武夫の戦功に等しければ、其功を永世に傳へよと、神祖松平の御稱號、竝に山號等を賜

函福寺



新堀
浄念寺
東漸寺
龍寶寺



ふ。往古三州にありしを、慶長の頃、台命に依て當國駿河臺に移され、又寛永十五年、今の所にて地を賜ふ。一夏の中法幢を立て、檀林に准ず。

東照大権現宮神影 神祖竝に台徳公、及び良雲尼公の御壽影をも寄附せられ、共に三軸あり、毎歳四月十七日御祭禮のとき、諸人に拜せしむ。

江島辨財天祠 當寺の鑄守たり。本尊は畫像にして、弘法大師の筆なりと云ふ。當寺第二世稱譽上人感徳ありて、ここに安置せらる。

化用山常照院淨念寺 同所西福寺の北の通にあり。淨土宗、開山は性譽上人露休和尚にして、

永祿年中、草創とぞ。本尊阿彌陀如來は、慈覺大師の作。作り收の尊像と稱す。胎中に鑿鋸くわん九寸、其長二尺三寸なり。寛永十

二年、駿河臺より今の地に移る。境内に慈覺大師の作の聖觀音、および土中出現の渡唐の天神等を安置す。

正保山東漸寺 醫王院と號す。天台宗にして、東叡山に屬す。淨念寺の北にあり。本尊藥師如來は、行基大師の作なり。

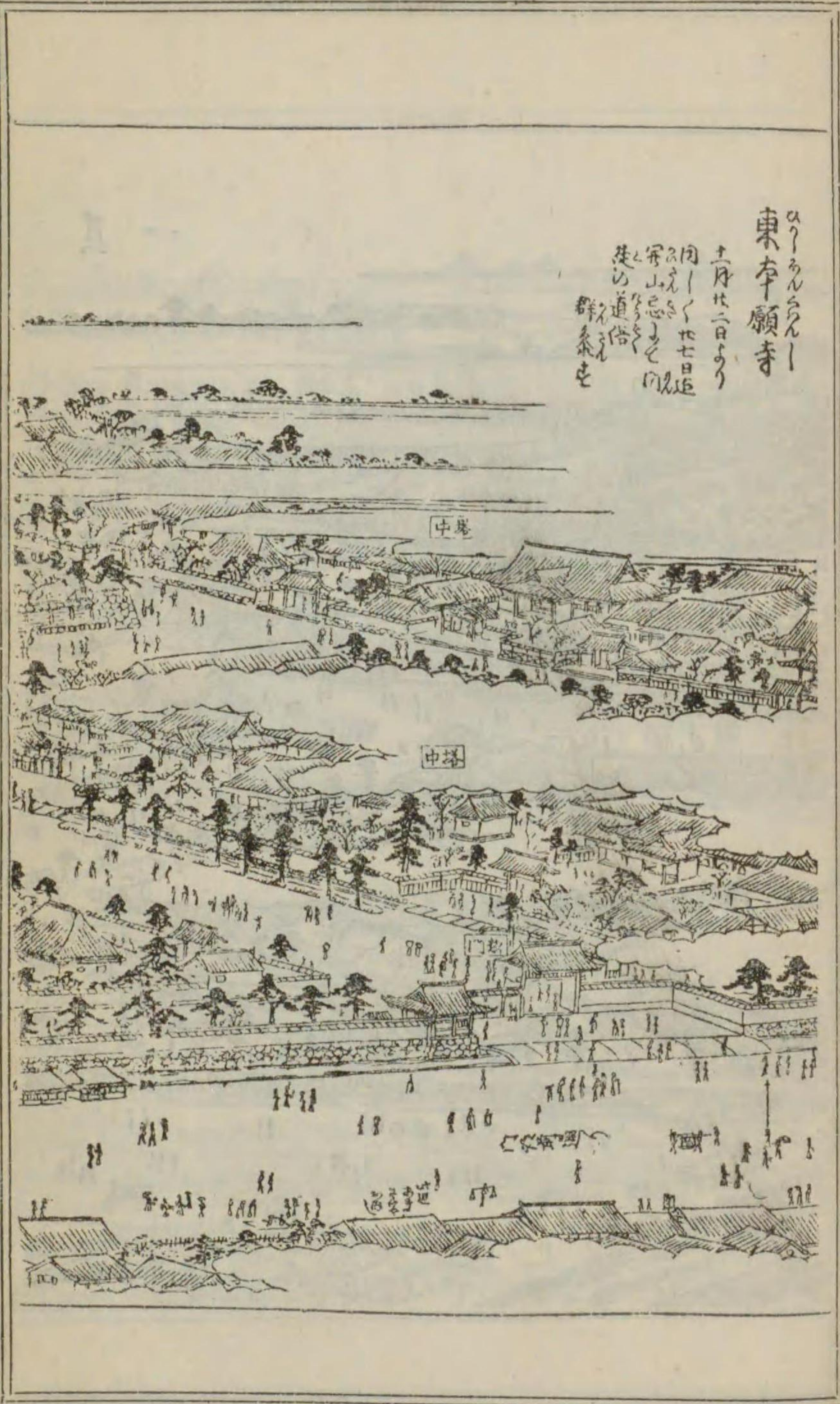
書寫の性空上人常に護持の體像にして、脇士に十二神將の像を置く。世俗かはらけ藥師と稱す。寄願ある者必ずかはらけを供するの故なり。世開山は慈覺大師にして、太田道灌再興す。

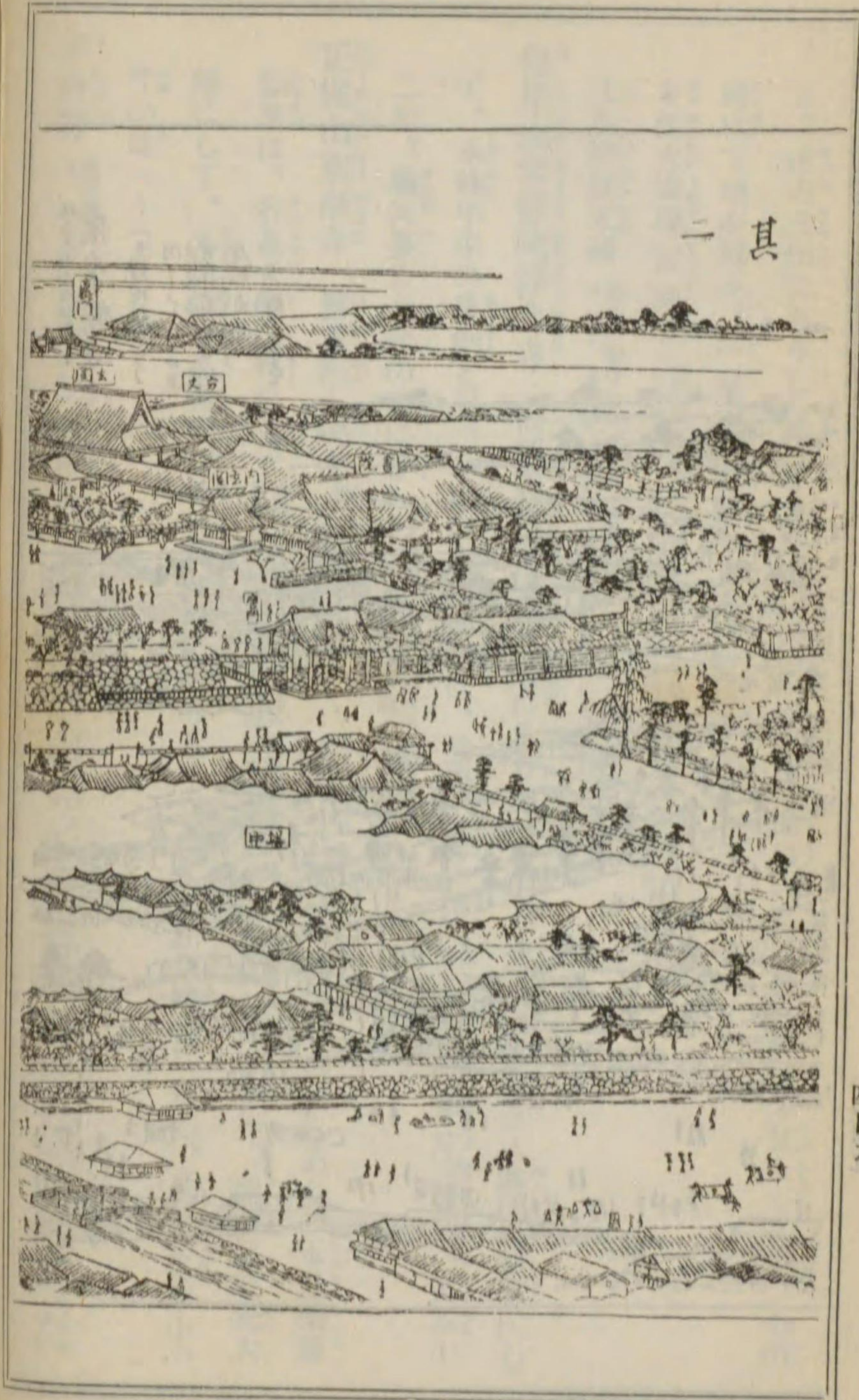
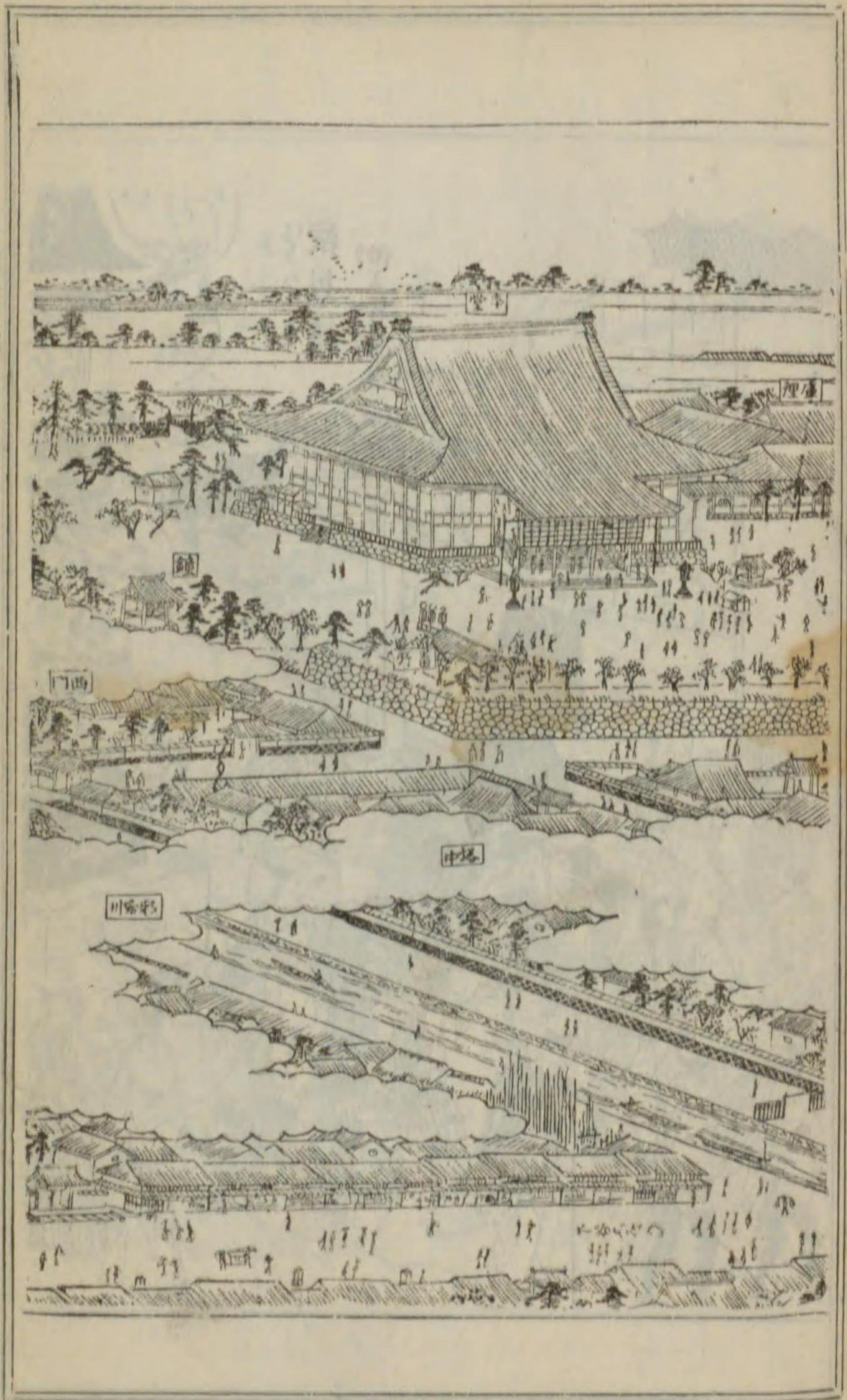
始め御城内にありしを、後に神田芝崎村に移し、又正保年中、今の地へうつせり。

手向野 寛文の頃、戸田茂睡といへる歌人、此所に草庵をむすび、しばらく住めり。一子伊右衛門なるもの、天和二年十八歳にして卒せり。故に此手向野に葬り、傍に碑を立て、手向野と彫て和歌を記す。其地は同所金龍寺の境内にして、茂睡夫婦、竝に一子伊

東本願寺

土丹は二日より
同く七日迄
寄山忌を
建の道俗
群衆を







右衛門が墓さへあり。されば金龍寺のあたりを手向野と、紫の一本にもいひしなるべし。されど新寺町東陽寺の境内なるよし諸書に載せ、東陽寺にも今は此茂睡が歌さへ石碑にゑりたり。或人云ふ、此邊往古は奥州海道にして、刑罪場なり。其頃往來の人香花など手向けられどもしるべからず。

風の音苔のしづくもあめつちの絶えぬ御法の手向にはして 茂 睡

東本願寺 ひがしほんぐわんじ 新堀端大通にあり。開山教如上人、其先本山の住職たりしを、豊臣家のはからひ

として、順如上人 じゆんじやうにん の舎弟也。を本寺の門跡に定められ、教如上人をば故なく退隠せしめ、裏屋

舗に置かれしを、此故に東門跡を 神祖竟に召出され、開祖上人の眞影を御寄附ありて、六條室町

の末にて、新に御堂屋舗を下し賜る。夫より後東西とわかる。其後江戸に末寺建立あり度き由詔へ、則ち

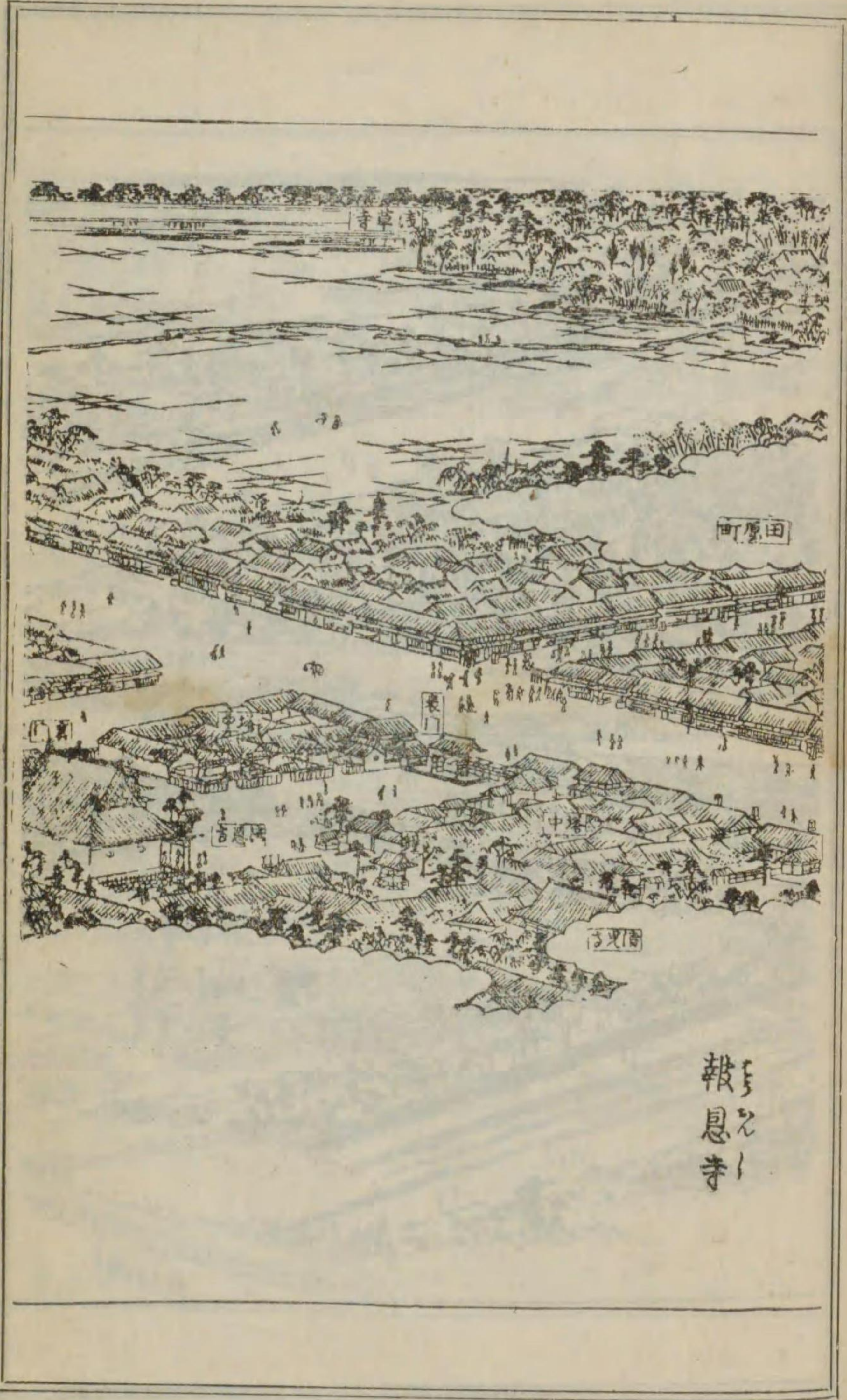
外、加賀屋敷と唱ふる所なり、明暦の後、今の地に移されたり、當寺は朝鮮人來聘の 旅館となる。

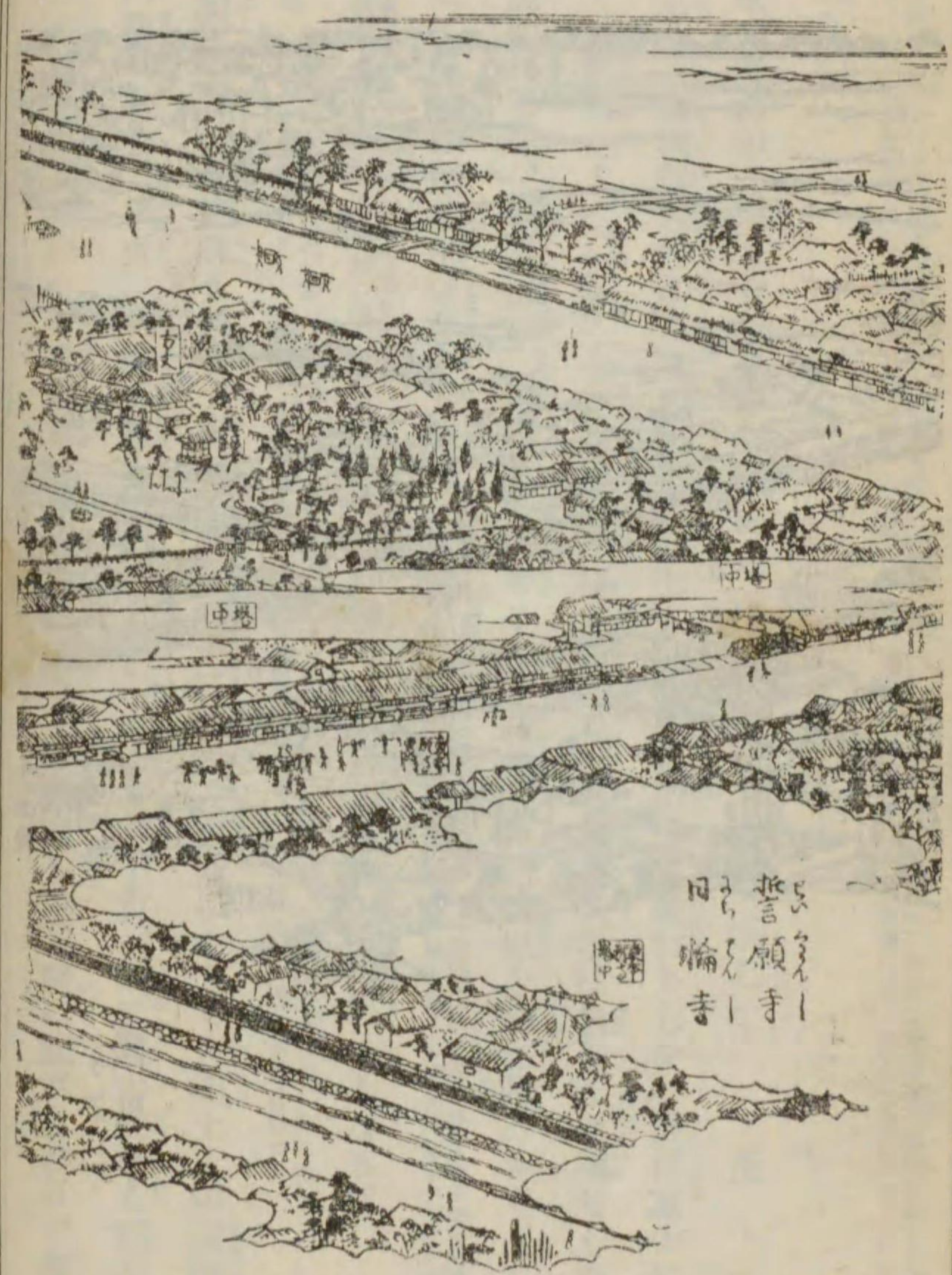
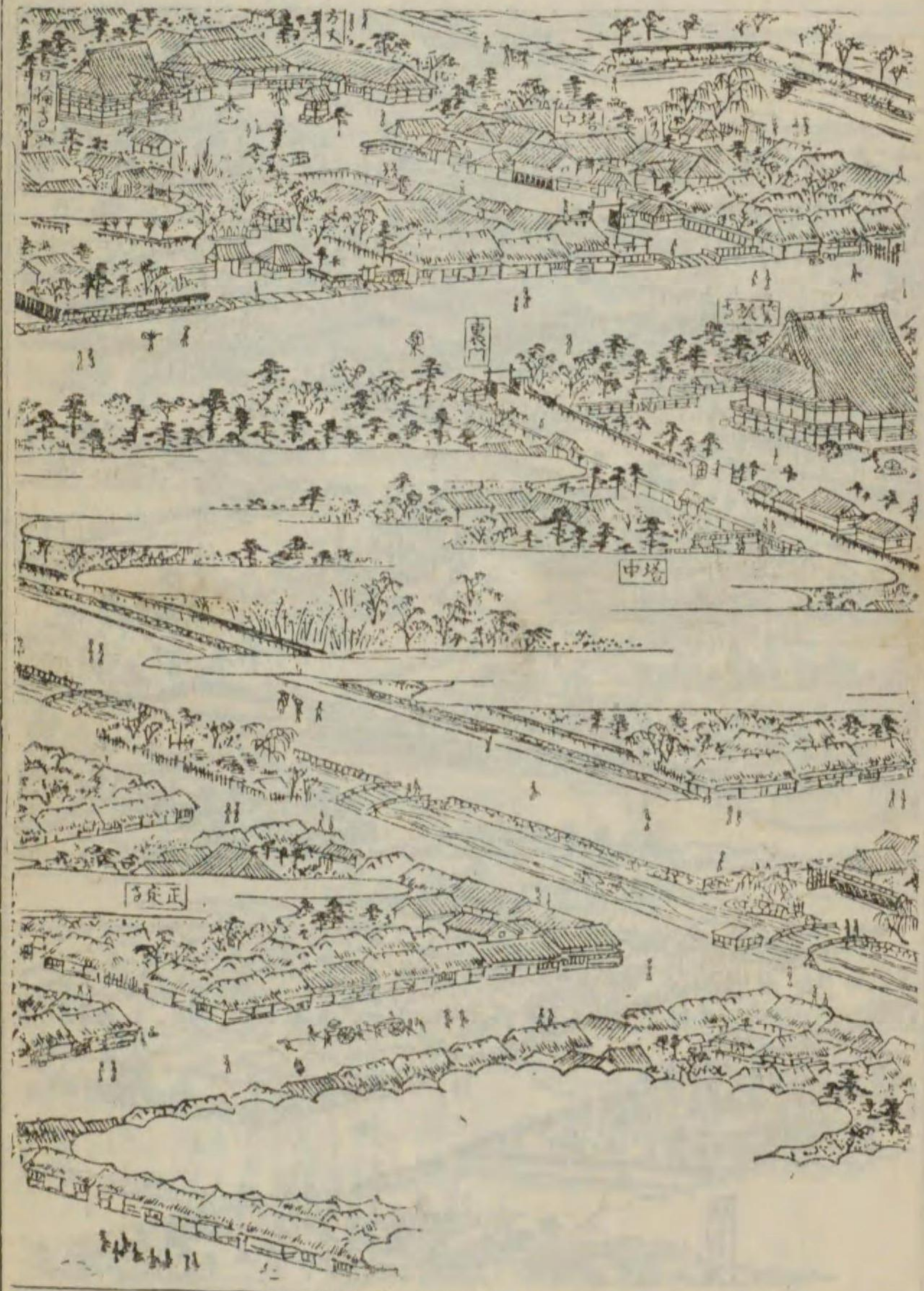
立花會 りふゑのゑ 毎年七月七日興行す、参 開山忌 かいざんき 毎年十一月廿二日より同廿八日までの間、讀經說法あり。俗に是を

高龍山報恩寺 かうりゆうざんほうおんじ 謝徳院と號す。東本願寺の東に隣る一向派にして、宗祖上人の遺跡二十四

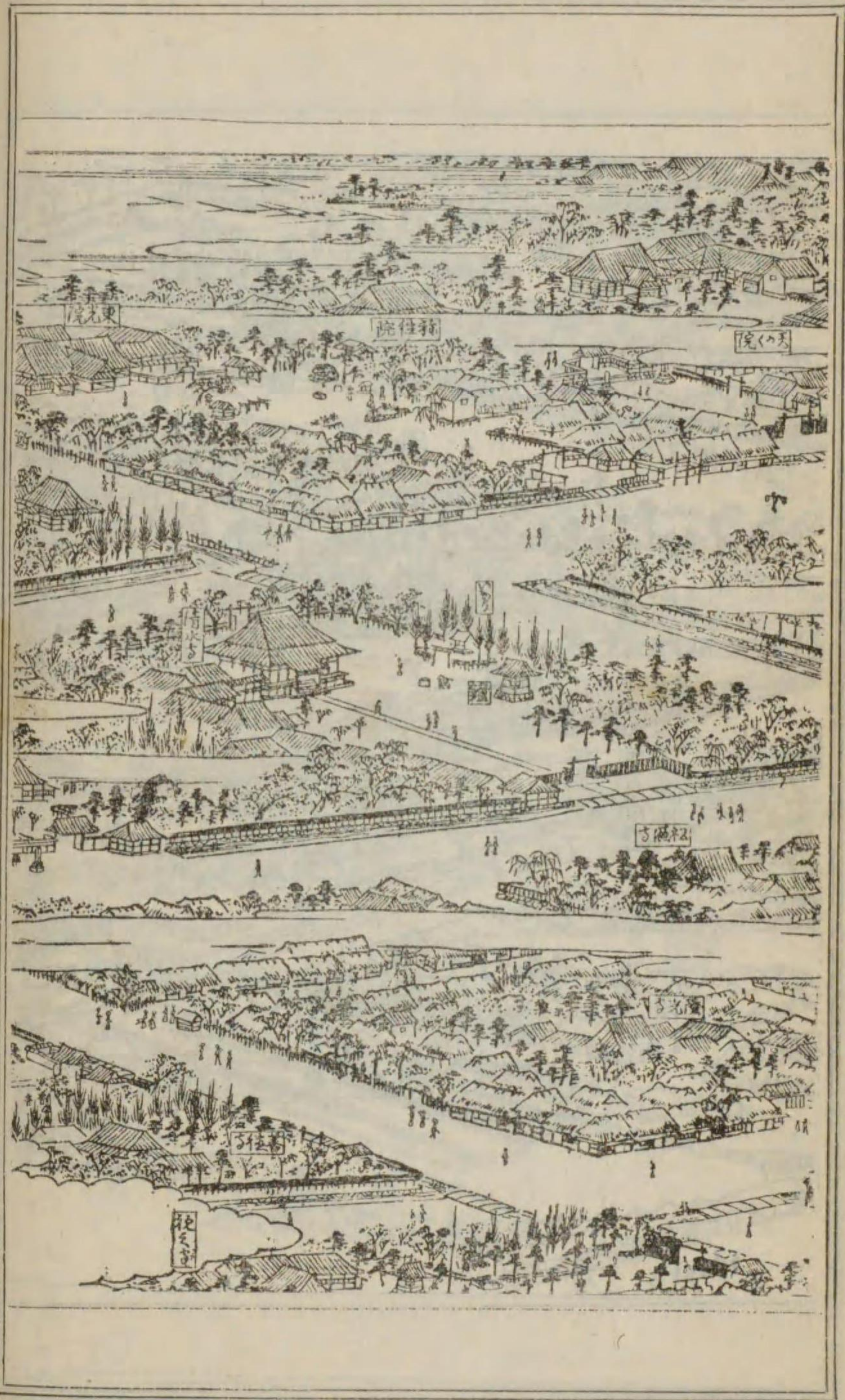
輩所の隨一なり。當寺は下總國豊田の庄横會根に有る事數十世、後結城の城主七郎左衛門晴

朝の臣多賀谷何某といへる者の爲に、寺領田園等を押領せられ、終に武州に移り、櫻田にあ

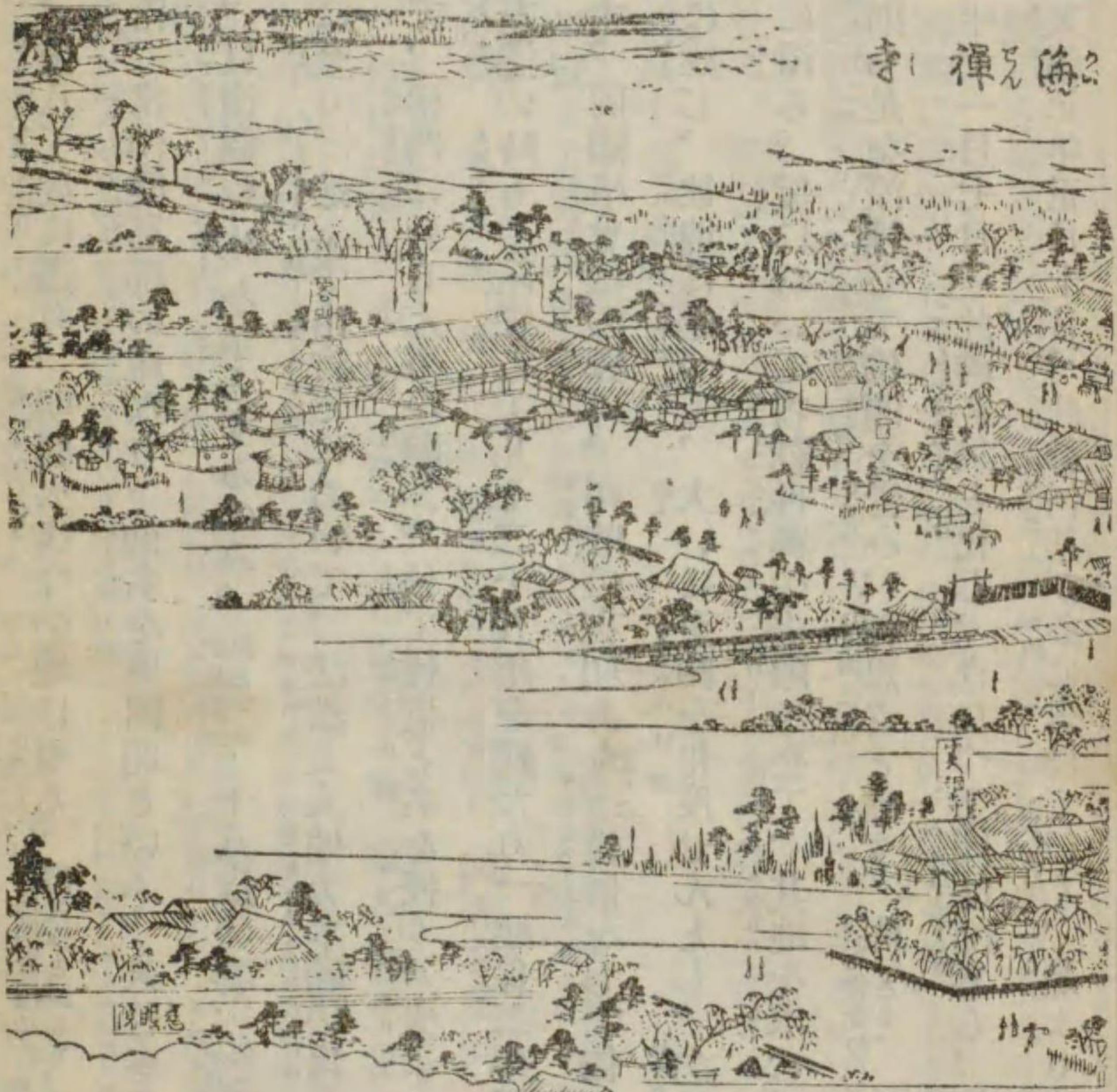




誓願寺
日輪寺



海見禪寺



天嶽院
 禰住院
 東光院
 清水寺
 慈眼院
 聖德寺
 祝言寺

りしが、後八丁堀に遷り、明曆火後の地に至る。舊地横曾根にとむる所の寺を、開光寺と號して、今猶存せり。開山性信房、俗姓は大中臣、常州鹿島郡の産なり。幼名を與四郎といふ。天性多力勇悍、心狼戾にして禮法をしらず。只漁獵殺生を事とするのみ。故に惡五郎といふ。十八歳の春、元久三年、紀の熊野山へ詣で、歸るさ洛陽に至り、適東山吉水において、法然上人他力本願の旨を説き給ふを聞き、頓に鬢髪を薙ぎて、佛門にいらん事を願ふ。依て性信と名を授く。夫より鸞帥に隨て、晝夜側をさらず。師左遷の時も、陪從して凡そ二十五年を経たり。建保二年、師下總に往きて、大いに群生を化す。同國横曾根の郷に、朽敗の古刹あり。性信をして住ましむ。其後貞永元年、竟に師の命に應じ、彼地に還つて、大いに東關を化度せんとし、念佛門を弘通するに、道俗充滿して場に溢る。爰において古刹再興の志願を企て、其地を求む。かしこに沼あり、飯沼といへり。則ち是を湮埋して佛閣を營み、報恩寺と號す。則ち當寺の權與なり。その沼の側に天滿神の祠あり。同年十一月七日、此神老翁と化し、きたつて聞法隨喜し、師弟の約懇勤なり。此時紫の白帳料にた又天福元年正月十日、此神何某が夢に告げて曰く、是より後永く師資の禮讓として、御

手洗の鯉魚を報恩寺に贈るべしと、云々。依て鯉魚二喉を捕りて師に贈る。師も又是を謝せんが爲、神前に鏡餅二枚を供す。此贈答の例今に至つて怠慢なし。毎歳正月十一日、飯沼天神の御手洗の鯉二喉を報恩寺に興行し、後鏡餅を開き祝ふを舊例とす。建長二年の頃、性信夢見る事あつて、奥州山中に自ら過去生の枯骨を得たり。其地に寺を營みて法徳寺と號す。中古濟家のつひ竟に建治元年七月十七日、下總において寂を示す。化壽八十九。以上開山傳の要

寺寶 親鸞上人壽像 右に拂子を持し、左に珠數を持つ。嘉貞乙未年、性信坊洛陽に至るのとき、高祖に謁して、東國漸く宗風五色佛舍利 本尊名號 十字の名號なり。宗祖上人の眞蹟 同九字名號 の眞蹟なり。 珠數一連 親鸞上人より性生椋の實の念あり。 性信坊過去生骨 夢想に依て奥州土湯山中に得るところの枯骨也。 教行信證一部六卷 人臨洛のとき、性信坊に附屬ありしとぞ。今なほ當寺に傳へてあり。 蛇反劔 長六寸七分、波平の作とも、又は了戒の作ともいへり。性信坊横曾根の古院に住する頃、其沼に惡龍すとき斗敷の僧一人來り、山門の傍に熟睡す。時に池中より惡龍出て彼僧を呑まんす。しかるに腹中より寸鏡飛出て、彼惡龍を防ぐ。又山門の金剛力士出て、足をもつて惡龍を池中に踏込む。淺草寺の山門に安置せしが、そのかみ回祿に亡せたりといへり。性信此體を見て、僧を請じ、具に件の趣を語る。往きて見るに、金剛力士の足泥土に漫せる跡あり。則ち性信寸鏡を乞得て惡龍を退けんとす。終に惡龍雲に乗じて常州三俣の水の中に入る。後この劔を證智比丘尼に與ふ。この尼は性信のむすめなり。尼あるとき鹿島へ詣で、舟に乘りて三俣に至るに、風烈しく、須臾にして波浪起り、既に船を覆さんとす。時に其寸鏡自ら飛出て水中に入りければ、風浪たちまちをさまれり。下向に又舟に乘じてこゝに至るに、前の惡龍水中よりあらはれ、彼寸鏡頭にあり。尼是を得て歸る。是より後字して蛇反の劔といへりとぞ。

建長三年の秋
性信は爰想を
生かすに過去
生の枯骨の不在と
るに奥州信夫郡
大湯山よるけの
猿人あり師云く
此松下よ我過去生の
枯骨あり汝
是と云ふ
得さへすと
猿人云く
我葉を
みされの
明日の禪
れと云ふ
るに貴い
を依り性
信は備者



持ところの
管筋とて
石上は投すれ
其筋とのれと
發一鹿を射
師則是とあ
猿人孫ひき其
あつとと惜り
わ下とやち
枯骨と得られ
信は歡喜踊
音の其地を
の積念して
号は法得寺
のりん



松風茶碓 上は石にして下は木なり 茶入 唐愛のザン切なり。おび網代にて製す。性信坊の作る所なりといへり。其餘、團扇(ウチワ)や袋は二重葎の唐織。笈(シヤク)四もの刀、雀割の薙刀、および覺如上人の筆の繪傳すべて

田島山誓願寺

快樂院と號す。東本願寺の北にあり。淨土宗江戸四ヶ寺の一室にして、開

山は見蓮社東譽上人なり。本尊彌陀如來は、安阿彌の作にして、世に齒吹如來と稱せり。傳

へ云ふ、往古建仁三年十二月廿八日、元祖圓光大師、室に在して、集會念佛の時、金像の彌

陀尊、佛堂の屏障に映現し、須臾にして没す。大師感嘆して、乃ち佛工安阿彌に命じて、彼

尊容を寫し、御長三尺に彫刻せしむ。自ら開眼ありて、常に持念し給ふ。同三年十月十五日

彼尊像忽然として口を開き、音を發し、親しく大師に十念を授け給ふ。爾來面門遂に啓け、

齒微しく露れ、息を吹き、語を發するの狀に髣髴たり。時の人稱して齒吹の尊像と云ふ。

くわしくは、語燈錄および明遺僧都の添狀 大師の滅後、勢觀坊源智上人、縁起に、小松内府重盛卿の子備中守平朝臣師

智上人は洛陽智恩寺 貞應のはじめ、高野山に常行念佛の道場を創起し、蓮華三昧院と號し、彼

尊像を傳持して本尊とす。竟に安永の末、故ありてこゝに移したてまつるとぞ。

當寺往昔相州小田原にありしを、天正十八年、台命に依て當國にうつされ、文祿元年、本銀

町一丁目において、始めて寺地を賜ふ。又慶長のころ、神田須田町へ移され、明暦の火後、

淺草にて替地を賜ふ。元祿中、用譽龍岳上人、國籠を蒙り、常紫衣を賜る。爾來已降、檀

林の中より住職す。則ち當寺の規模とせり。

神田山日輪寺 芝崎道場と號す。誓願寺の北の方にあり。本尊阿彌陀如來は、安阿彌の作な

り。當寺は時宗にして、當國弘法最初の道場とぞ。相州藤澤清淨 開山眞教坊は、一遍上人第二

世にして、往古諸國遊化の頃、當國豐島郡芝崎村に至るに、かしこにひとつの叢祠あり 神田

是なり。今の神田橋御門の 其傍に一字の草庵を結び、芝崎道場と號す。當寺の權 其後あまたの星霜

を経て、慶長年中、神田明神は駿河臺へ遷され、當寺は柳原のもとに地を賜ふ。又明暦の頃、

今の地にうつる。寺僧云く、往古よりの由緒によりて、今も隔年九月十五日、神田明神祭禮執行の時、當寺より上人以下衆僧

とぞ。當寺任職其阿上人は、 柳營御連歌の御連衆たり。

光明山天嶽院 遍照寺と號す。日輪寺の西に隣る。淨社の法窟にして、天正年中、善空上

人草創す。開山は圓蓮社滿譽上人と號せり。本尊手島觀世音菩薩は唐佛にして、順德帝建保年中、相州鎌倉鶴ヶ岡の社僧良眞僧都入宋の時、育王山能仁寺より將來せる尊像なりしを、其後豐太閣の幕下津田勝重といへる者、此像を感得す。息元重、伊賀國手島と云ふ所に至る頃、此靈像の告によりて、群賊の蜂起を治め、武威を國中に振ひぬ。依て人民伏して、手島殿と稱す。其後元重當國に赴きし頃、故ありて當寺に收む。則ち寺内に、手島元重の墳墓あり。當寺舊は淺草橋のうちでありしが、明曆回祿の後、此地に移る。

一心山稱往院 同西に隣る。捨世寺と號す。淨土宗にして、本尊阿彌陀如來は、丈六の坐像にして惠心僧都の作なり。脇に觀音、勢至の二菩薩を安置す。開山は幡蓮社白譽稱往上人、姓は飯田氏、下の野當寺昔は小田原にありしが、慶長年中、當國へ移され、湯島に地を賜ふ。後復今の地に引れたり。捨世一派常行念佛の道場にして、殊勝なり。當寺に圓光大師月影藥王山東光院 同く西に隣る。鑿王寺と號す。天台にして、東叡山に屬す。本尊瑠璃光如來の像は、佛工春日の作なり。傳へ云ふ、慈覺大師當寺を草創ありしとぞ。往古は顯密二教と

もに引りて、台宗一百八箇寺の總本寺たり。中古太田道灌、此靈像を崇敬し、江城の鬼門に置き、又其後慶長年中、日光御門主一品尊敬法親王、山門無動寺の松林坊賢海法印に仰て再興せしむ。神祖其時院主に命ありて、江城長久の御祈禱として、正、五、九月に、大般若經轉讀せしめらる。此例今に至つてしかり。慶長の頃迄は、常盤寺の北にありしが、其後小傳馬町へうつさる。

大雄山海禪寺 同所新堀の小川を隔てて、西の方にあり。妙心寺派の禪宗にして、江戸四箇寺の一なり。往古平親王將門、總州相馬郡にあつて草創する所の佛刹なり。されど將門亡ぶるの後、年を歴て荒廢におよび、さながら狐兔の栖となりしを、慶長の頃、覺印和尚再興して、寺を江府湯島の地に移せり。其頃、神祖和尚の道德を聞しめし、尊敬あらせられしより後は、寺院も輪奐として、宗流殊に盛なり。明曆回祿の後、今の地に遷させられたり。

清水寺觀世音菩薩 海禪寺の向ふ、新堀端にあり。昔は淺草橋の内にありしが、明曆火後、今の地にうつさる。寺を江北山清水寺と號す。天長年中、慈覺大師、ひとつの勝地を求め、天台法流の一院を建立ありて、みづから一刀三禮にして、千手大悲の像を作り、本尊とす。

其昔は佛閣をならべ巍々たりしに、年去り年來り、星霜を歴るまよに、堂塔大いに破壊せしを、文祿年間、慶圓法印といへる沙門、靈告を得て、叡山正覺坊の探題豪盛僧正と相謀つて、堂宇を修營し、昔に復せしむ。

上宮太子堂 同所一丁ばかり坤の方にあり。寺を用明山聖徳寺と號す。淨土宗にして、本尊

聖徳太子像は、御自作なりといふ。世に孝養の御影と稱す。傳へ云ふ、往古御父用明天皇御惱の時、太子神明佛陀に祈

に自ら作らせ給ふ、御年十六歳の御影像なりとぞ。往古聖實上人、念佛弘通の爲、山靈像を守り奉りて關東に下り、坪根澤に

一字の精舎を建立す。又は局澤に作る。御城内吹上と稱するは、其舊地也。其後亨徳二年、忠蓮社加譽上人良祐和尚中興し、

台宗を改めて淨家とす。慶長の頃、馬喰町馬場の邊に移され、明暦の後、今の地に引れたり。

當寺門の内に、地藏尊の石像あり。相州一澤大食彈警上人の作にして、當山十七世の住侶靈告によつて、土中を穿ち、此地靈尊の御首を得たり。依て石工に命じて全體を補造せしか、其背面に件の旨趣

を刻す。

除厄太子堂 同所北の方、淨土宗天然山慈眼院に安す。聖徳太子四十二歳の御時、除厄の爲、

自ら彫刻し給ひし靈像なりといへり。當寺昔は神田橋本町の邊にあり。明暦回祿の時本尊を失ら。依て住僧德譽上人深

ここに安置せしむといへり。

萬年山祝言寺 同所南の方、通を隔てて西南の方にあり。曹洞派の禪宗にして、良山存久和尚開山たり。往古は江戸城の邊祝言村といへるにありて、天文二十年の頃、太田道灌草創す。

天正の頃、山號を賜ひ、又此地に遷さる。

日蓮大菩薩 同所新寺町より半丁ばかり西南の方にあり。安立山長遠寺に安置す。傳へ云ふ、

往古花洛南禪寺の普門禪師、多年日天子を信敬し、一朝日輪の中に二菩薩の尊影を拜す。依

て自ら筆をとつて親是を摸し奉り、靈告によつて弘長元年辛酉六月、遙に關東に下り、豆

州伊東に至り、同六日、日蓮上人に謁し、彼二尊の點眼を乞求む。則ち上人開眼供養あつて、

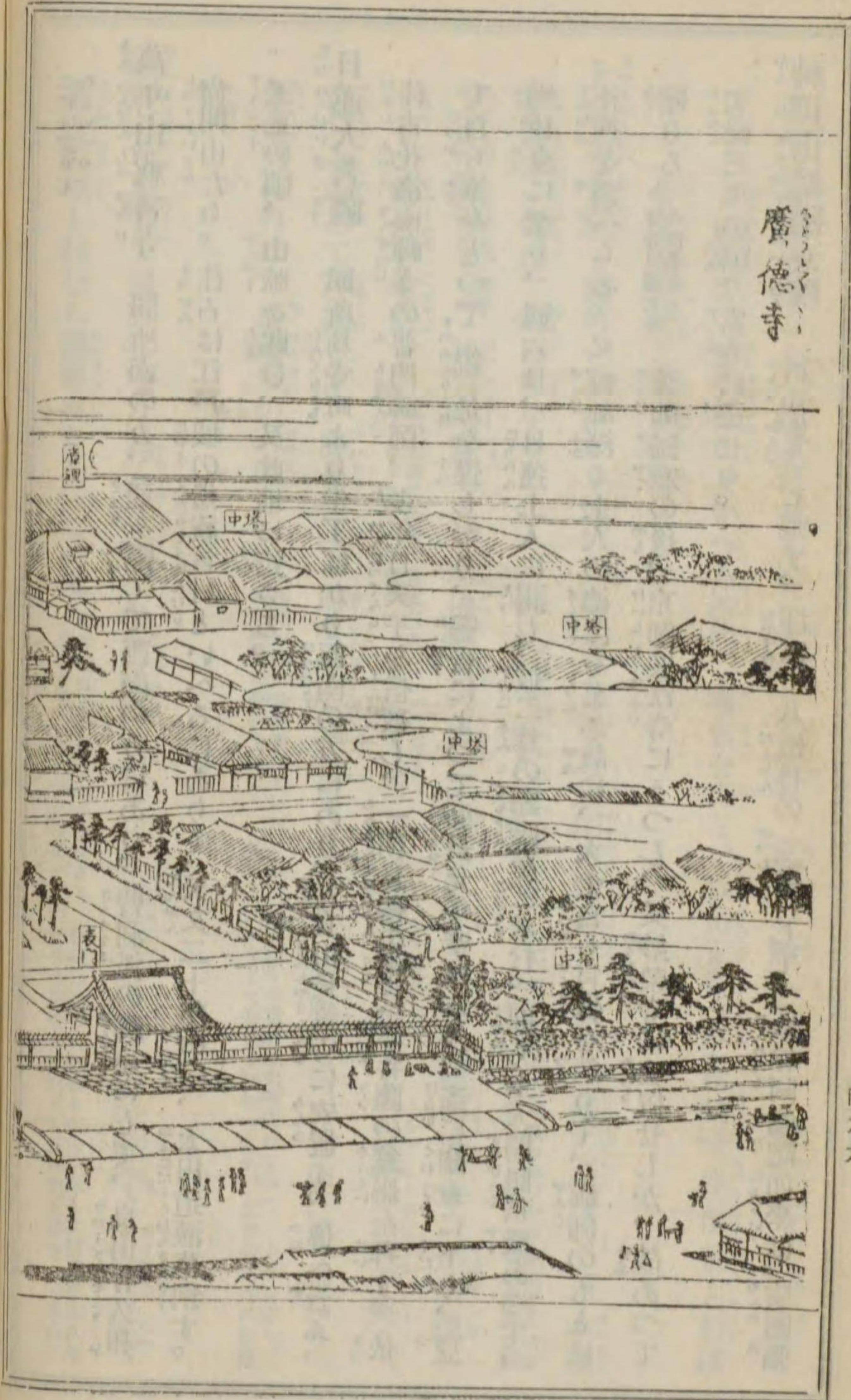
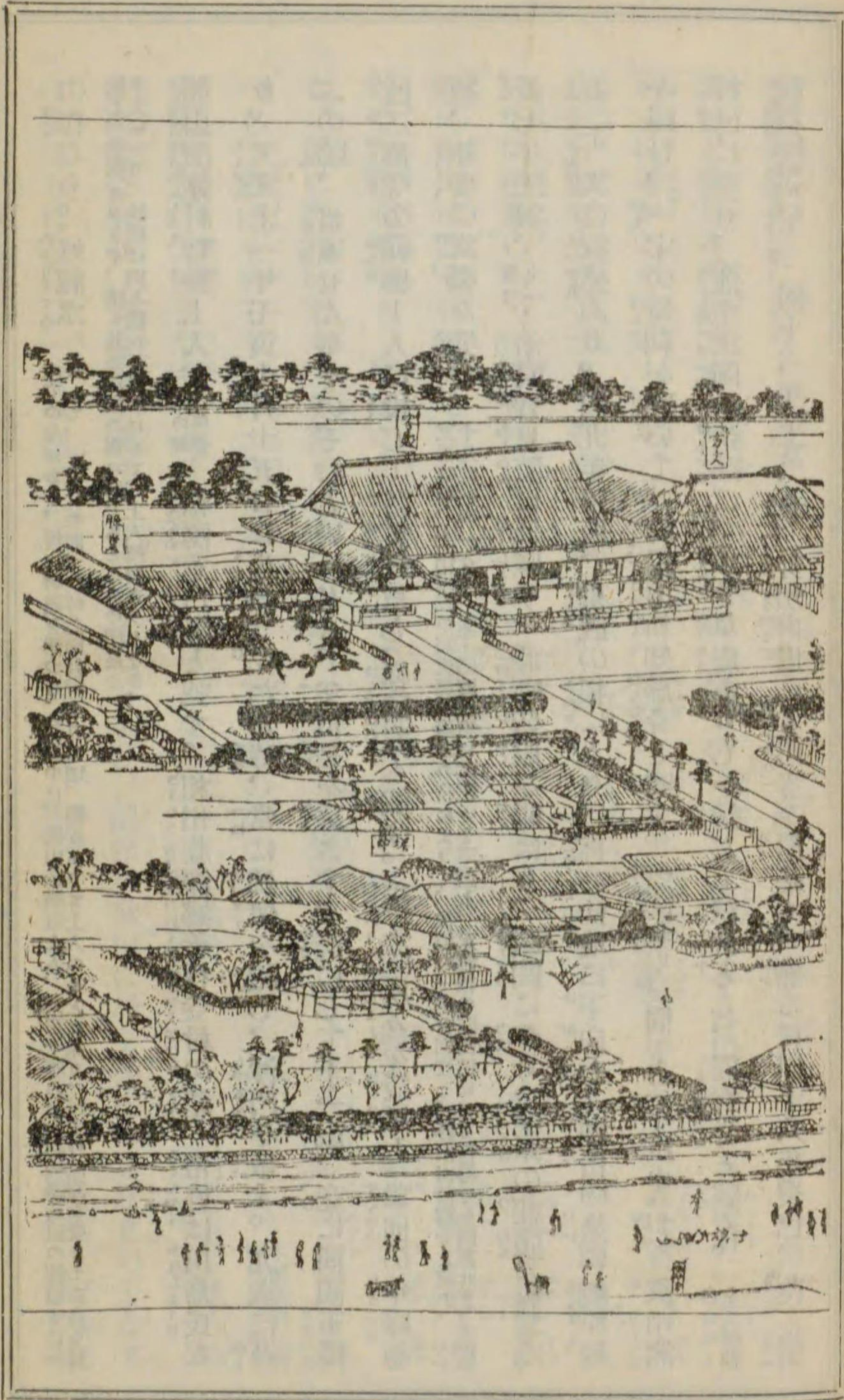
花押を添へらる。又禪師深く上人の德澤を慕ふ故に、大士自ら肖像を造りて、禪師のもとに

贈らる。當寺日蓮大士の像是なり。禪師歸寂の後、京師要法寺にうつし、又妙榮寺に安置せしが、故あつて

文祿三年の頃、當寺に遷せり。

神田山幡隨意院 新知恩寺と號す。淨家十八檀林の一室にして、本尊阿彌陀如來は、安阿彌

開陽之部 卷之六



の作なり。妙龍水 本叟の左にあり、傍に碑碣を建つ。其文中に、開山幡隨意上人。天正十年の秋、越後國高田の善導寺に脱し、戒佛せりとぞ。依て其後法恩の爲に捧ぐるところの清泉なりといへり。妙龍は則ち龍女の法號にして、上人授與ありしなり。

開山演蓮社智譽上人、始の號。幡隨意白導と號す。相州藤澤郷善行寺村の産、俗姓は川島氏なり。

天文十一年壬寅十月十五日に生る。兒たる時、常に佛像を禮し、沙門を敬す。九歳に及ぶの頃、出家せん事をのぞむといへども、父母是を許さず。既にして十一歳、竟に同國玉繩

邑二傳寺の範譽上人に投じて落髮授戒し、幡隨意と號す。爾來所々を経歴し、數回の年序を

經、宗要の玄微を究む、天正年中、上州館林の刺吏藤原康政の請によりて、彼地に一字を創立し、終南山善導寺と號す。又越後の國高田にても善導寺を開基せり。慶

長七年壬寅、十一、洛陽智恩院に住職す。此時紫服を賜はり、鳳闕に登り、淨家の祕蹟を講ず。

主上大に歡感あり。同九年甲辰、東武の招により、再び此地に下向し、神田の臺に臺也。地

を賜ひ、一字の梵刹を闕いて、神田山新知恩寺と號す。明曆の頃迄池の端にあり同十三年庚申、十七、武州熊

谷邑に至り、蓮生法師の遺跡に、小き草庵ありしを轉じて精舎とし、熊谷寺と號く。合命に上りて金欄

の袈裟をたまひ、寺 同十六年辛亥、十、勢州山田に入門寺を開基す。然るに同十八年癸巳、十二蟹

夷の凶賊九州に發り、邪法を弘め、幻術を以て人を惑し、頗る國を傾げんとするの兆あり。

されども是を平治するに干戈を動す時は、國中の人民を鑿にするに至れり、高僧に命じ、

正法に導かしめんにかじ、こよにおいて衆義一決し、幡隨意其器なりとて、直に召れ、大

樹自ら命ぜられて云く、吾聞く、國に患ある時は、必ず佛法の護持によるといへり、師は既に

天下の法將にして、邪徒を退治すべきの英雄なり、又邪徒に對するは、軍將の干戈を揮ひ敵

陣に向ふに等しければとて、蜀江の陣羽織、及び金の軍配團扇とを賜ひ、急ぎ彼地に赴き、

凶徒を教化せしめ、國家の患を除くべきの旨鈞命ありしかば、師も辭するに語なく、命に應

じ、終に九州に至り、邪徒と宗義の對論ありしに、各道理に歸して、凶徒直に志をひるが

へし、邪法を出でて、淨土門に入りける。實に師の徳のしからしむる故なるべし。軍配團扇は幡

陣羽織は法孫其後又令命により、かしこに梵宇を創立し、觀音寺と號す。有馬氏越前國丸岡に移す。其

後崎陽に至り、大音寺を闢き、竟に晩年におよび、紀州和歌山に於て萬松寺を建立してこよ

に住せられしに、一日微疾を示す。上足意天和尙、深川靈巖寺、第二世なり。かしこに至り、師の病床を訪

ふ。師大いに喜び、傳燈の法主たるべしとて、委く傳法あり。且諸弟に教誡し、遂に猊床に坐し、筆を求め、辭世の偈を書して云く、白道運歩數十年、以火消火難思術、と書き畢つて筆を擲け、端坐合掌して高聲に彌陀の尊號を唱へ、眠るが如くにして化す。時に元和元年乙卯正月十五日、歳算七十四。以上行化傳

信州善光寺燈明 寺町、赤城山燈明寺といへる台宗の寺にあり。有心の輩是をうく。寺内に赤城明神を鎮れり。

朝日山永昌寺 願成院と號す。下谷大通にあり。淨土宗にして、鎮蓮社尊譽上人を開祖とす。本尊阿彌陀如來は運慶の作、千手觀音は慈惠大師の作とぞ。世に厄除の寺傳に云ふ、當寺は、天正年間、下谷長者某、其名今しる、草創す。もと同所長者町といへるにありしを、元和の頃、今の地に引きたりとぞ。明曆二年丙申、松浦家の母儀永昌院再興ありしとなり。則ち境内に長者の墳墓あり。

圓満山廣德寺 同所にあり。大德寺派の禪宗にして、始め相州小田原にありしを、天正十九

年、江戸に遷され、神田にて地を賜ふ。事務合考に、昌平橋の内、其ころいまだ足入れの沼地なりしを、とやかくし

其後寛永の末、今の地に遷る。開山を希叟宗芋禪師といへり。當寺の總門は、名匠の差圖にして、是迄風火の難度々におよぶといへども恙なし。最も番匠の規矩とする所なり。詳に梅臘主人あちはせる新齋夜話といへる草紙に出たり。

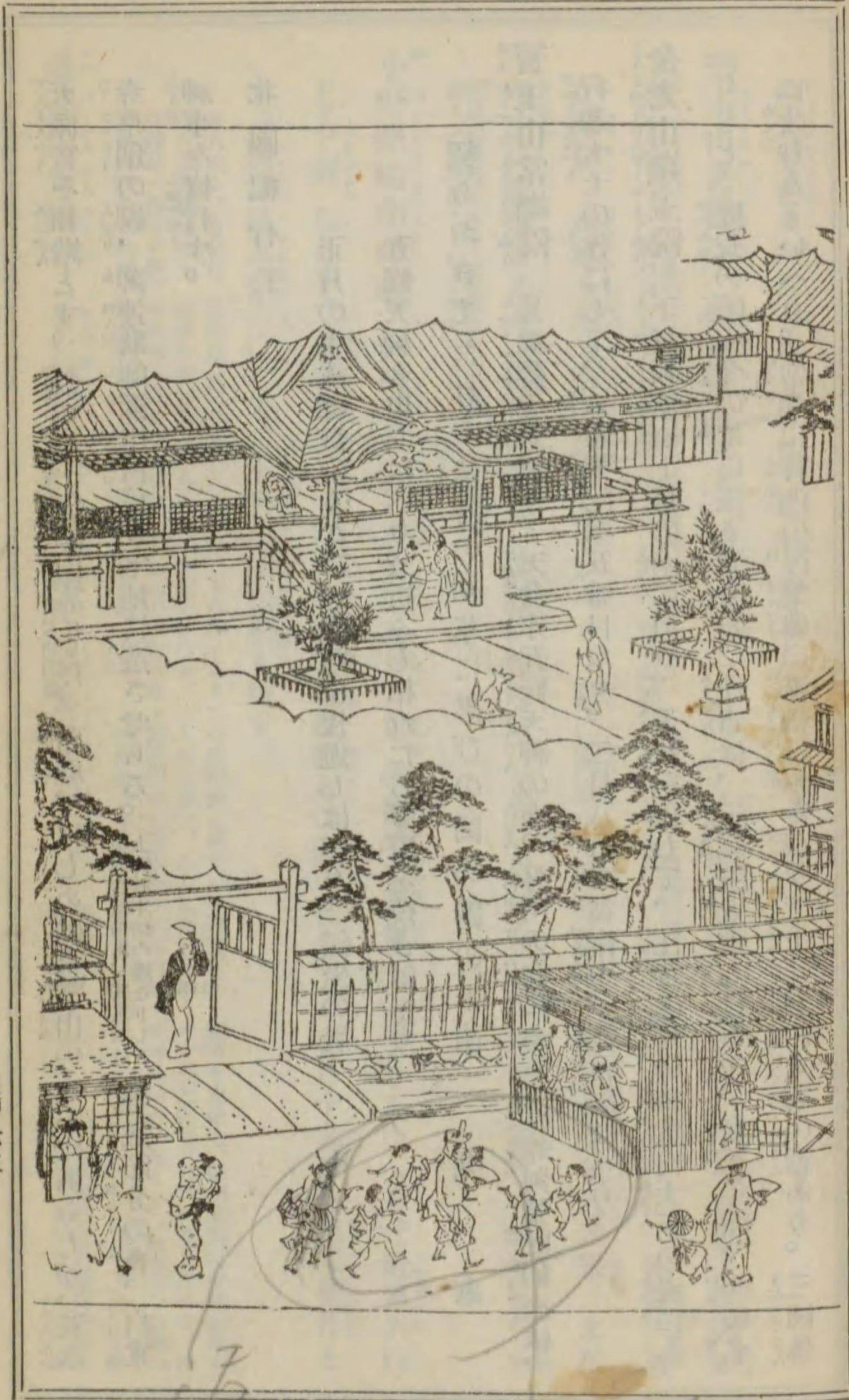
下谷稻荷社 廣德寺の向ふ側にあり。故に俗呼びて廣德寺の稻荷と稱す。是大いなる誤なり。別當を正法院といふ。祭神は倉稻魂命にして、本地十一面觀世音は、行基大士彫刻の靈像なりとぞ。中の烏井に、正一位稻荷大明神と書ける額あり。崇保院公寛法親王の眞蹟なり。拜殿に掲けたる同神號の額は、蓮花光院道恕の筆なり。當社祭禮は、隔年三月十一日に執行す。下谷の鎮守と稱す。

下谷岡 すべて上野のあたりを指していふ。小田原北條家の古文書に、大谷十郎左衛門、江戸回(マハリ)下谷にて菱野分の地を領す。

武藏國風土記殘篇曰

豐嶋郡下谷岡。貢鹿狐兔狸山鶴雉雀等。又貢薯蕷松脂云々。

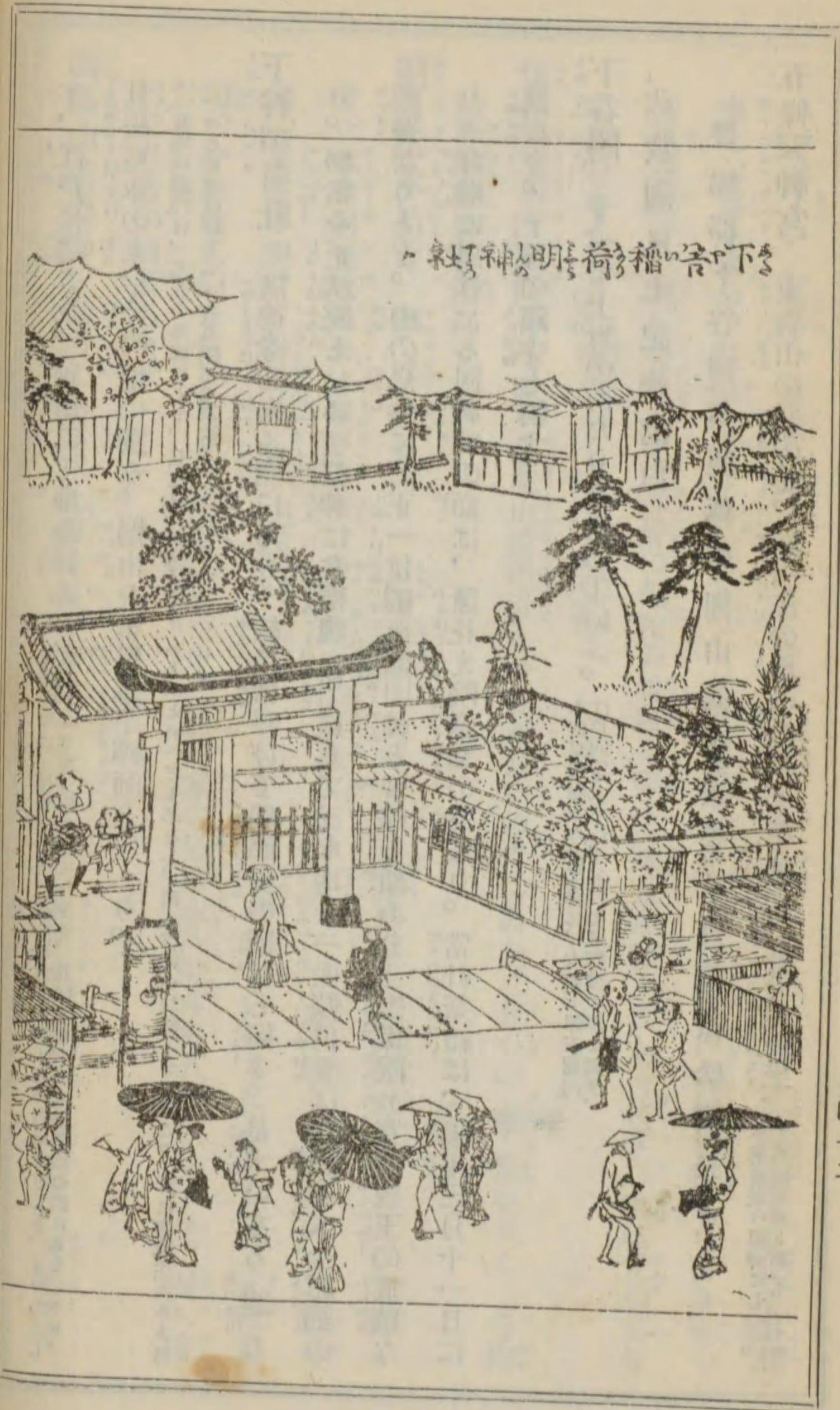
五條天神宮 東叡山の巽の麓、瀬川氏の地にあり。祭神少彦名命一坐、本朝齋道の祖神に記したる五條天神と稱す。北野



子狗
雨

河

下宮の稲荷明神社



天満宮を相殿とす。菅神の像は寛永十八年慈眼大師開眼ありて、當社の相殿に鎮坐せしむ。 當社、はじめは東叡山のうちでありしが、寛永寺草創の砌、御連歌師瀬川昌億が宅地に遷させらる。菊岡沾涼云ふ、其舊地は上野御本坊の邊なりしと。 毎歳節分の夜、白朮神事を修行す。

北國紀行云

正月の末武藏野のさかひ忍の岡に優遊しはべり。鎮坐の社五條天神と申しはべり。折ふし枯れたる茅原を焼きはべり。

契りおきてたれかは春の初草に忍びの岡の露の下萌 堯 惠

寶王山常樂院 長福壽寺と號す。天台宗五條天神の南、忍川の向にあり。本尊阿彌陀如來は、行基大士の作にして、六阿彌陀第五番目なり。二月八月の彼岸中、甚だ賑はへり。

金光山羴玉院 下谷坂本一丁目の南にあり。天台宗にして、往昔は今の御城内大手の邊にありしと。慶長の頃、今の地に遷させらる。往古は、三藐院と號しけるを、寶永年間、今の名に改むるといへり。當寺に釋迦の涅槃像の畫軸一幅を藏す。上に慈眼大師の讚あり。三國傳

燈大僧正天海書としるせり。毎年二月十五日是を拜さしむ。

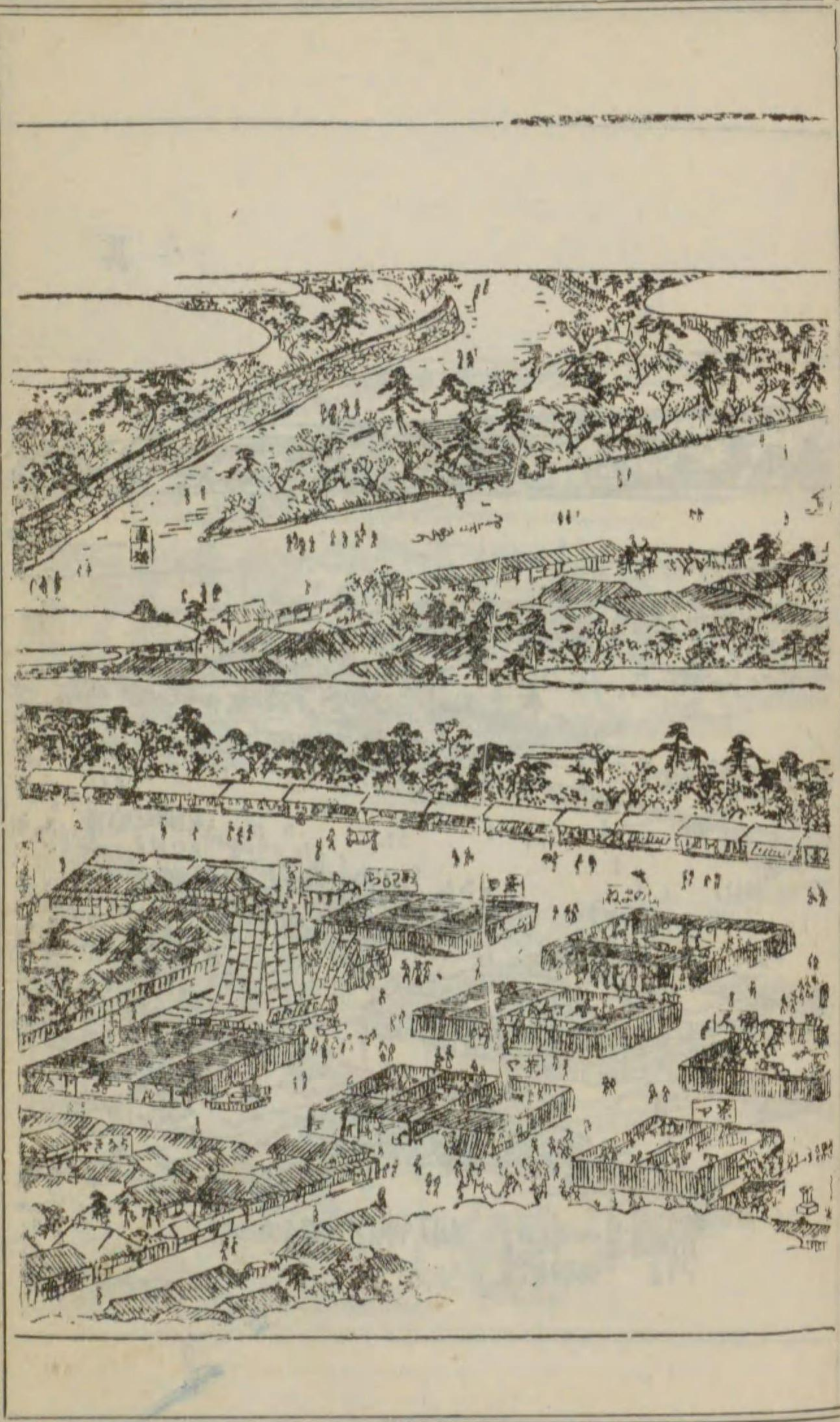
藥王山善養寺 延壽院と號す。同所坂本一丁目の左側にあり。天台宗にして、本尊は藥師如來を安ず。寺僧云ふ、此本尊は小野照崎明神の本地佛なり。このゆゑに、小野照崎明神の社は遙に此地を離るるといへども、當寺藥師堂に相對せりと云ふ。 當寺は、天長年中、慈覺大師

の草創、本尊も同大師の作なりといへり。額に圓滿の二字を刻す。黃檗木庵老人の筆。また境内に閻魔堂あり。閻魔の像は、運慶の作なり。正月七月十六日、參詣群集す。或人云く、當寺州足利學校にありし聖像なりしを、故ありて移世ここに移つしたりと。 閻魔の像は、野

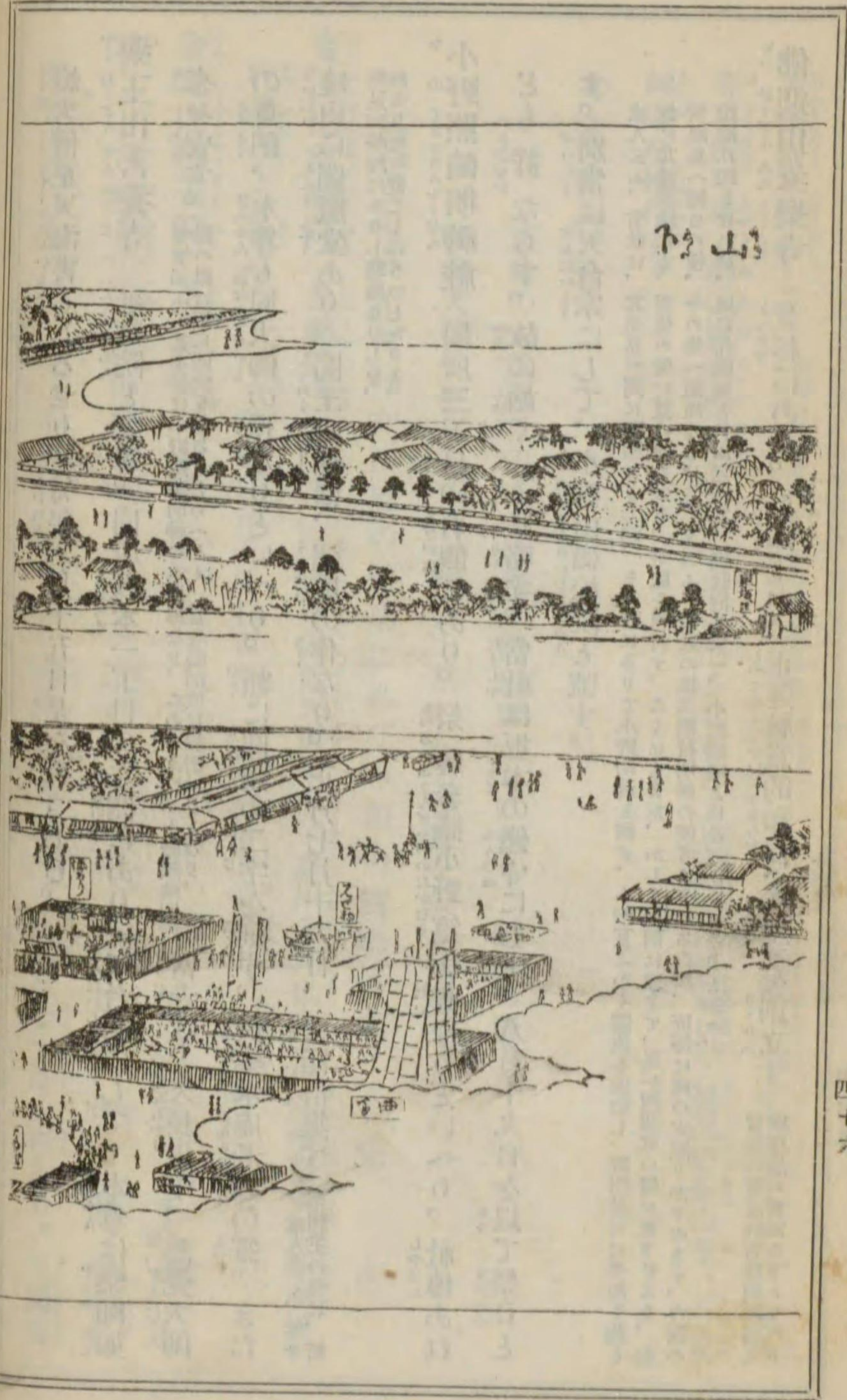
小野照崎明神社 同所三丁目の右側にあり。祭神參議小野篁の靈なりといへり。社傳あれども詳ならず。故に姑くこゝに略す。當社は坂本の鎮守にして、八月十九日を以て祭日とす。別當は天台宗にして、小野山嶺松院と號す。

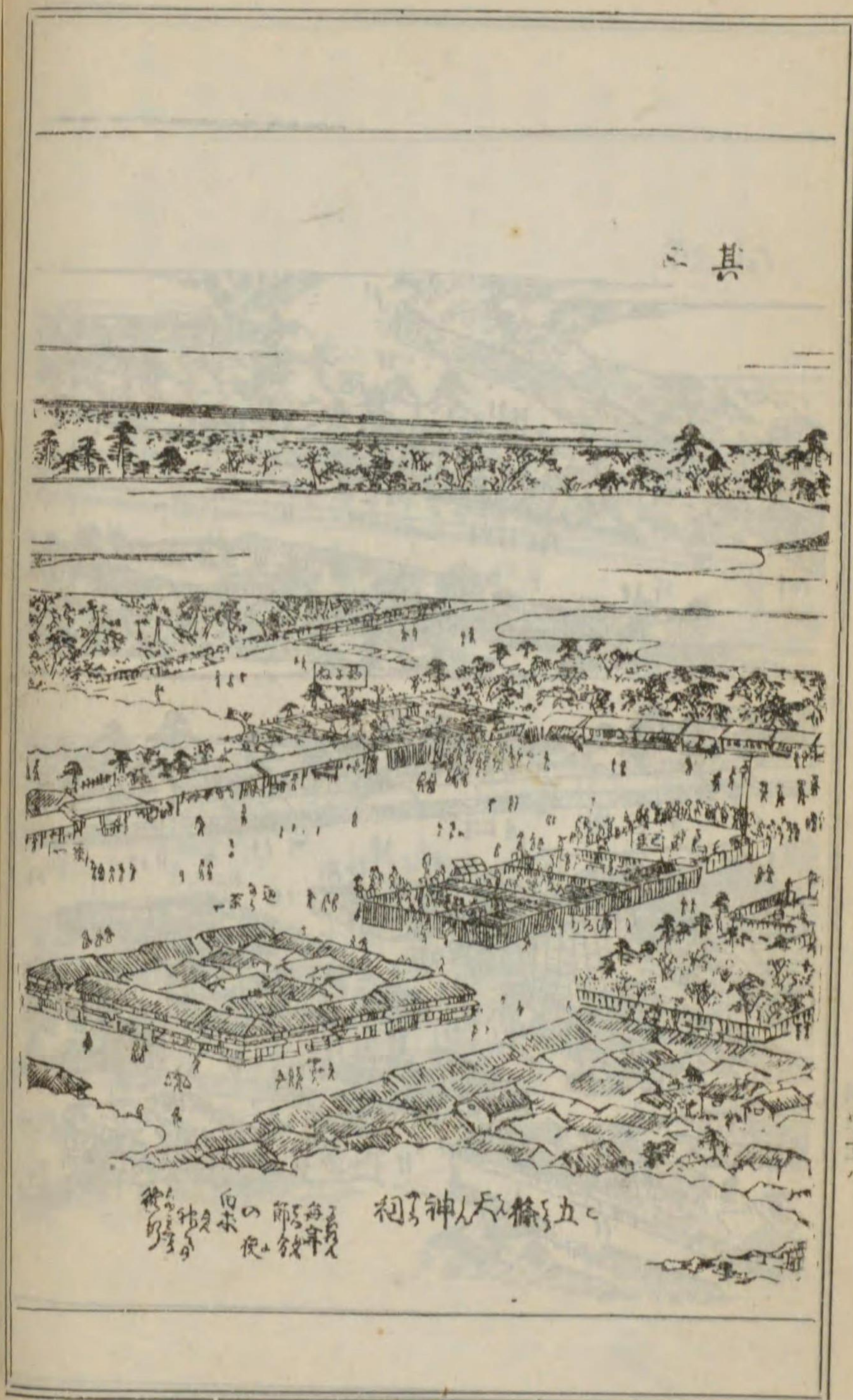
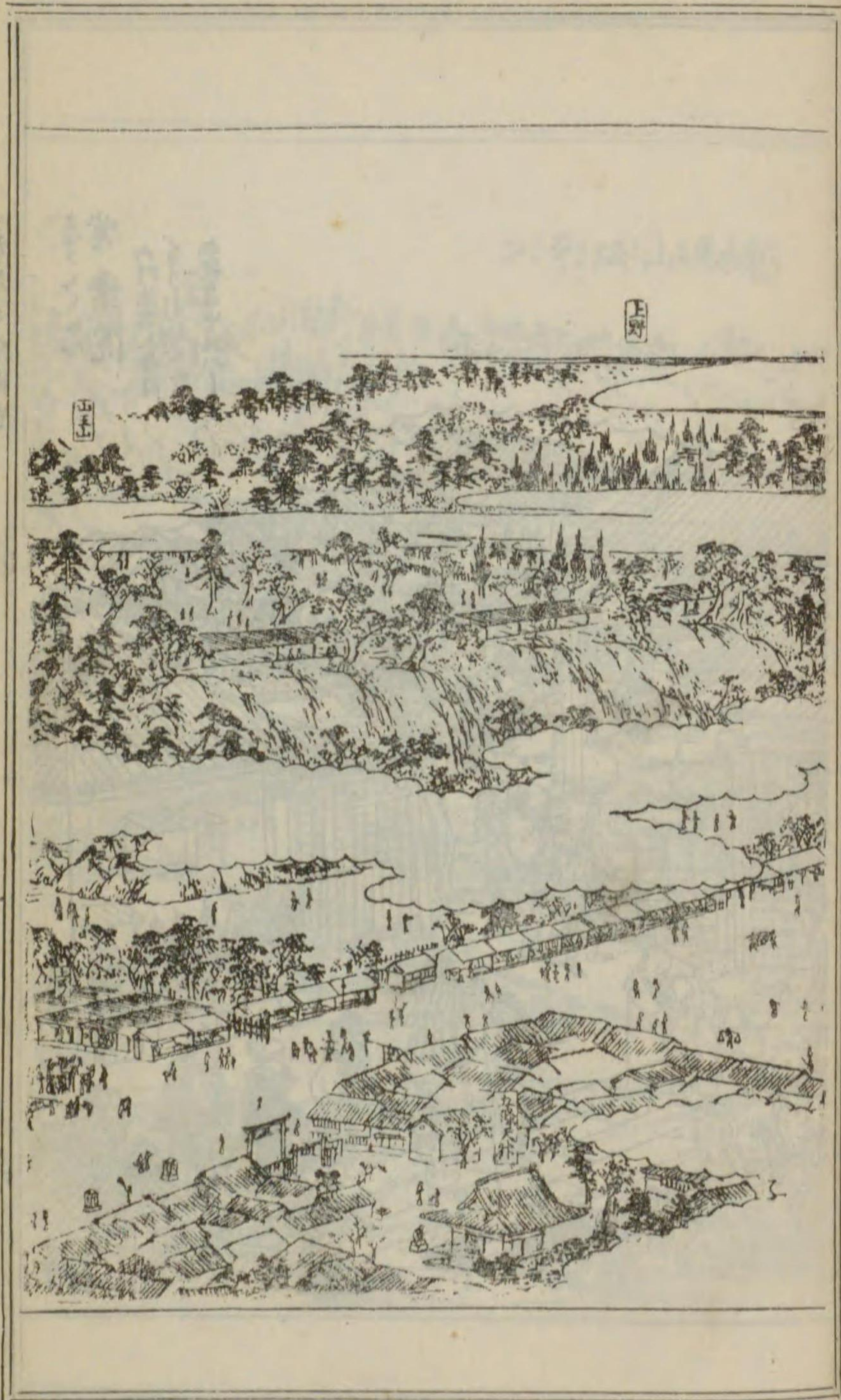
或人云ふ、當社は、其先忍が岡に聖堂ありし頃、その傍にありて小野明神と稱す。小野篁ふかく儒教を崇敬し、野州足利に學校を闢く故に其後彼地にて、聖堂の傍に篁の像を安じ、祭祀を執行す。こゝにもまた、かしこの例に準じて、忍が岡聖堂の傍に置きけるを、聖堂湯島へ遷るの後、今の地へ鎮座なしける。又云ふ、當社の地主稻荷明神の使者なりける白狐、夜毎に尾の末照りかゞやきて、台嶺の松樹に映じければ、尾の先照るといふ意にて、彼此混じ交へ、小野照崎とはなづけけるなりと云々。

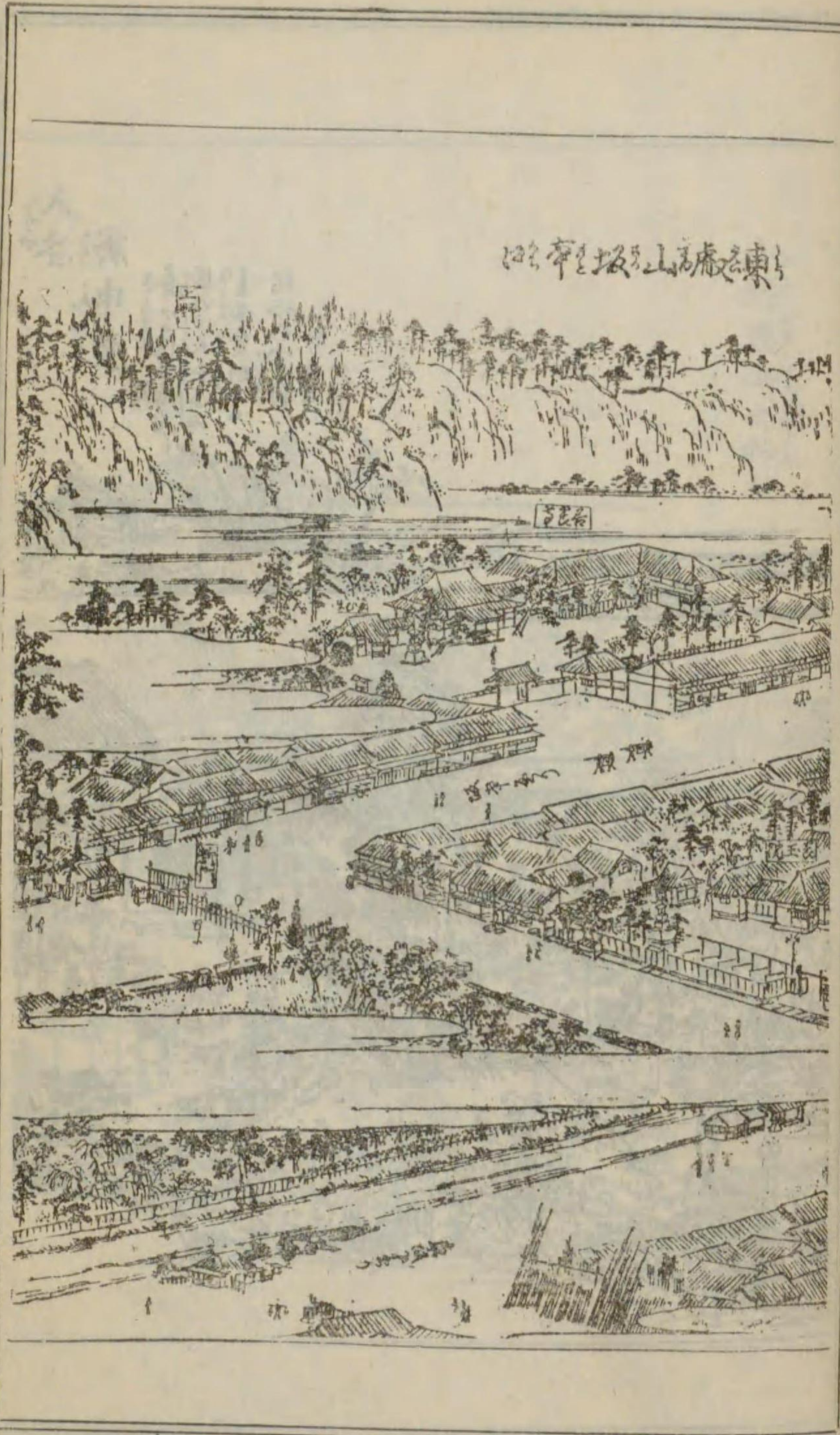
佛迎山安樂寺 金杉にあり。正保年中、正蓮社意的和尚、當寺を創立す。當寺は智恩院宮尊朝法親王御閑居の舊地なりといへり



山崎





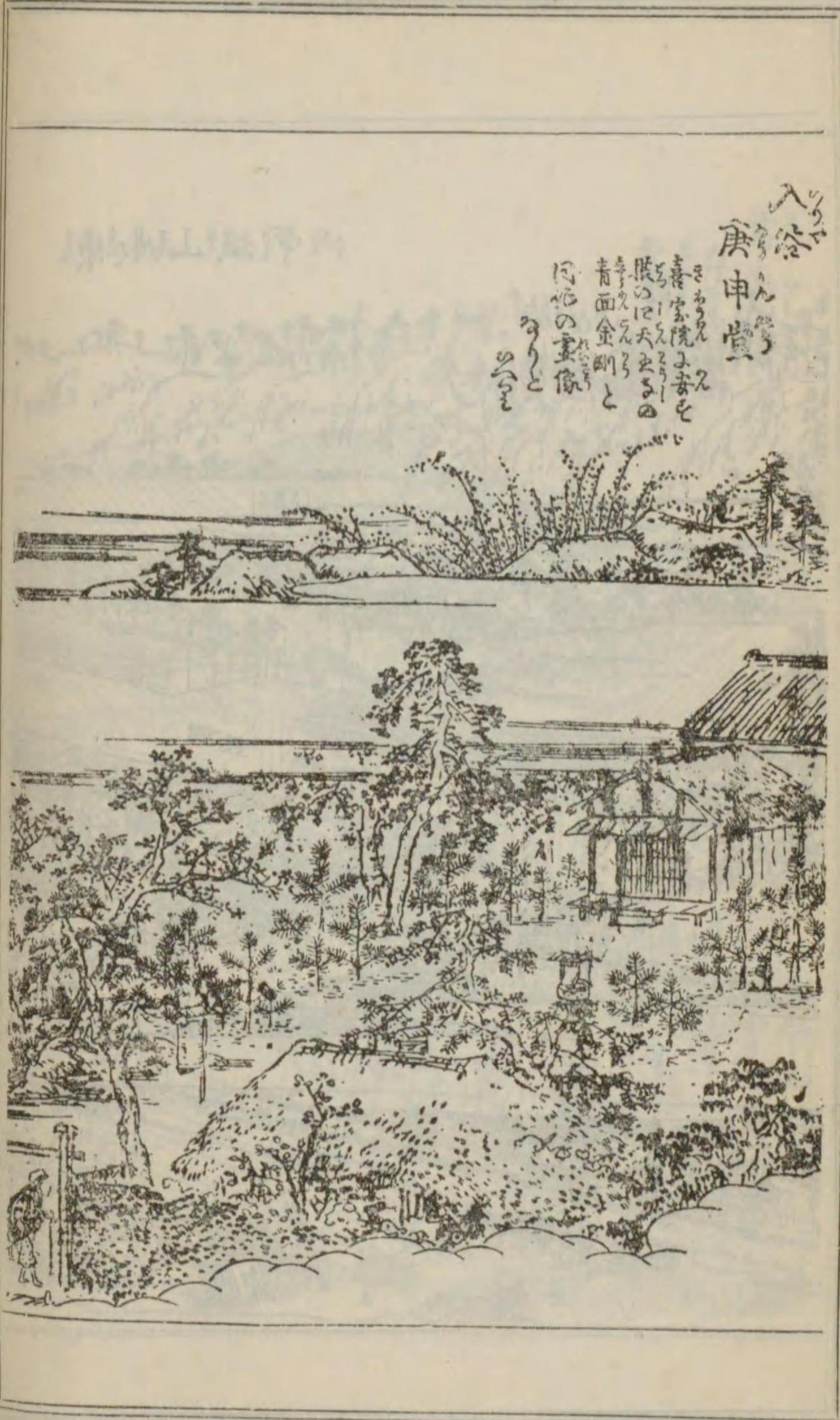


常樂院

六門内院上青月
寺ノ東ノ山ノ
向ノ中ノ山ノ



入浴
庚申堂
喜多院よきを
眼のたまふ
寺久えん
青面金剛と
同様のま像
なりと
ひらと



小野照崎の神社



本尊は寶冠の阿彌陀如來なり。洛陽一心院の末にして、捨世一派の淨域たり。晝夜不退念佛三昧にして、殊勝なり。

寶鏡山圓光寺 根岸の里にあり。濟家の禪林にして、釋迦如來を本尊とす。當寺、庭中に紫

藤ありて、花の頃は一奇觀たり。故に俗間これを藤寺と稱せり。また堂前に鏡の松と唱ふる

名樹あり。鎮守の辨財天は、弘法大師の作なりといへり。

時雨岡 同所庚申塚といへるより、三四丁良の方、小川に傍うてあり。一株の古松のもと

に、不動尊の草堂あり。土人此松を御行の松と號く。來由は姑くこゝに省畧す。一に時雨の松

回國雜記

忍ぶの岡といへる所にて松原のありけるかけにやすみて

霜の後あらはれにけり時雨をば忍びの岡の松もかひなし 道興准后

按ずるに、忍の岡といへるは、東叡山の舊名なり。此地も東叡山より連綿たれば、回國雜記に出づるところの和歌の意を取りて、後

世好事の人のなづけしならん歟。 東陽山正燈寺 龍泉寺町にあり。妙心寺派の禪刹にして、承應三年に、愚堂和尚草創す。 尚和

は大國寶鑑國師と證號す。天性明敏にして、大いに禪海の浩濤を鼓起す。寶鑑國師の語録につまびらかに。當寺の後園、楓樹多し。其先山城高雄山の楓樹の苗を栽うると云ふ。晩秋の頃は、詞人吟客こゝに群遊し、其紅艷を賞す。

眞覺山西光寺 箕輪新町にあり。淨土宗にして、長和元年の草創なり。本尊阿彌陀如來は惠

心僧都の作、開山は聖蓮社賢譽上人たり。

千束郷 龍泉寺町の邊、今僅の地をいへり。一に篠堤と字す。菊岡沾涼の説に、此地を佐々

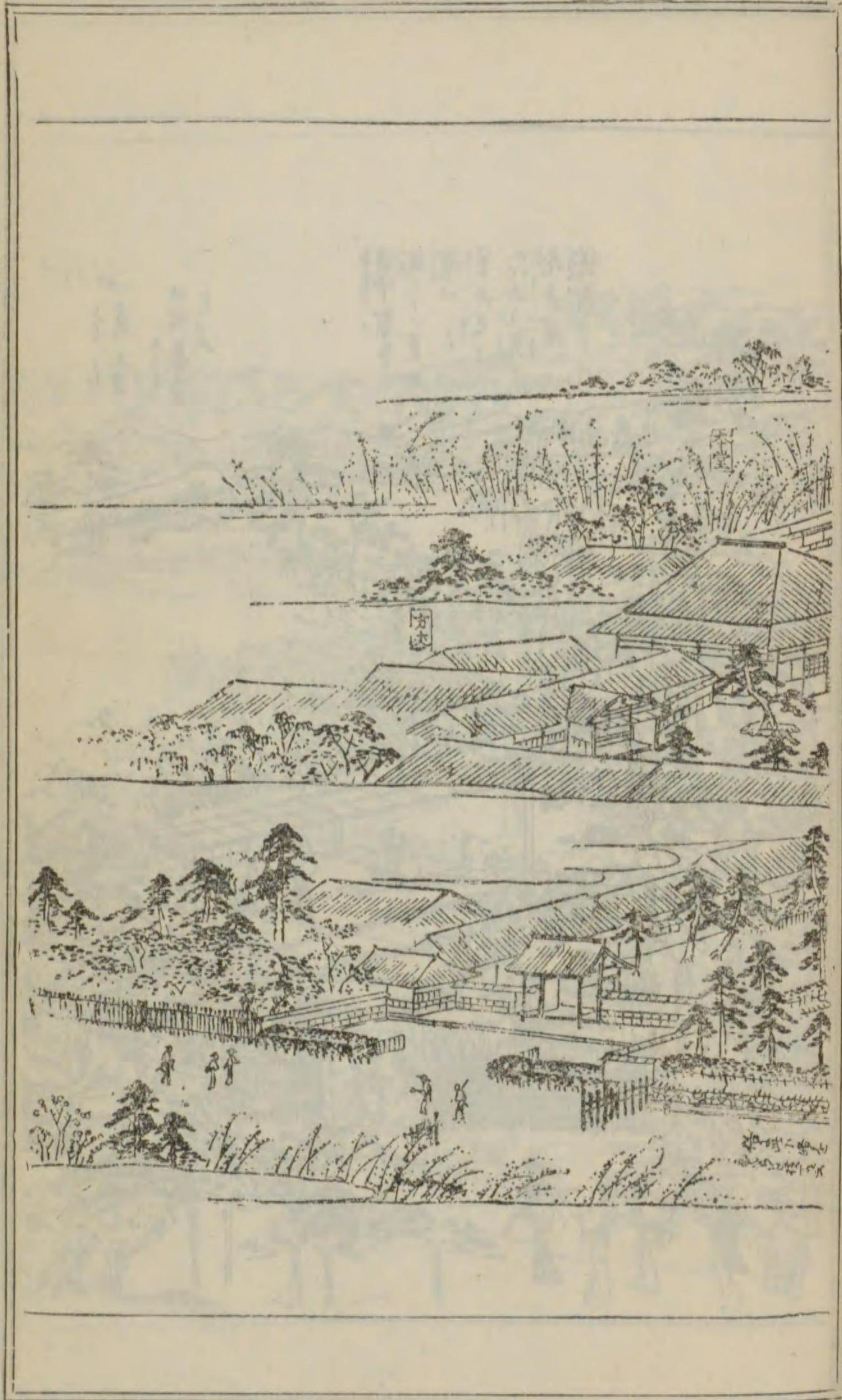
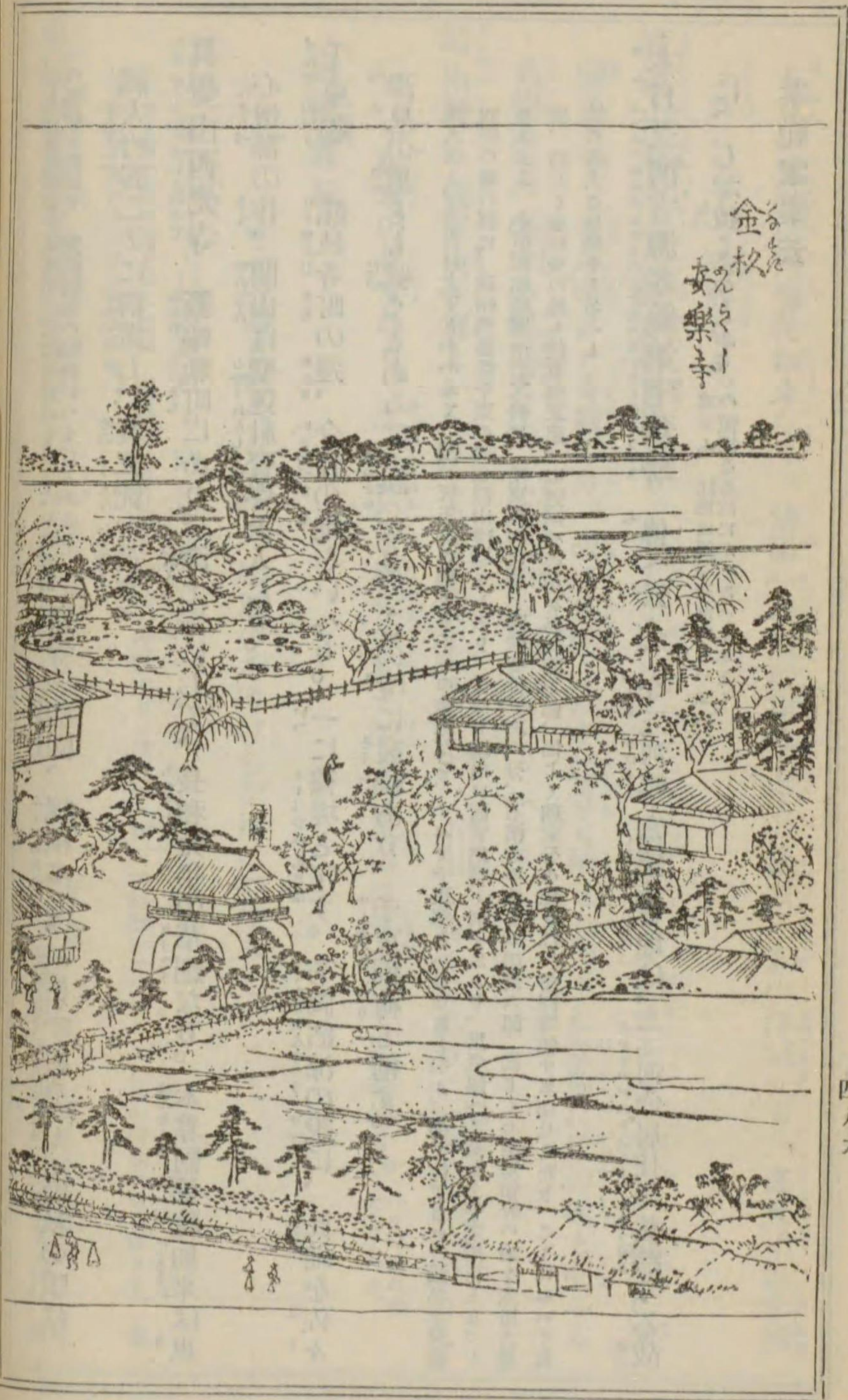
津見の里とも號くとあるは誤なり。この境に叢祠あり、千束稻荷と稱す。

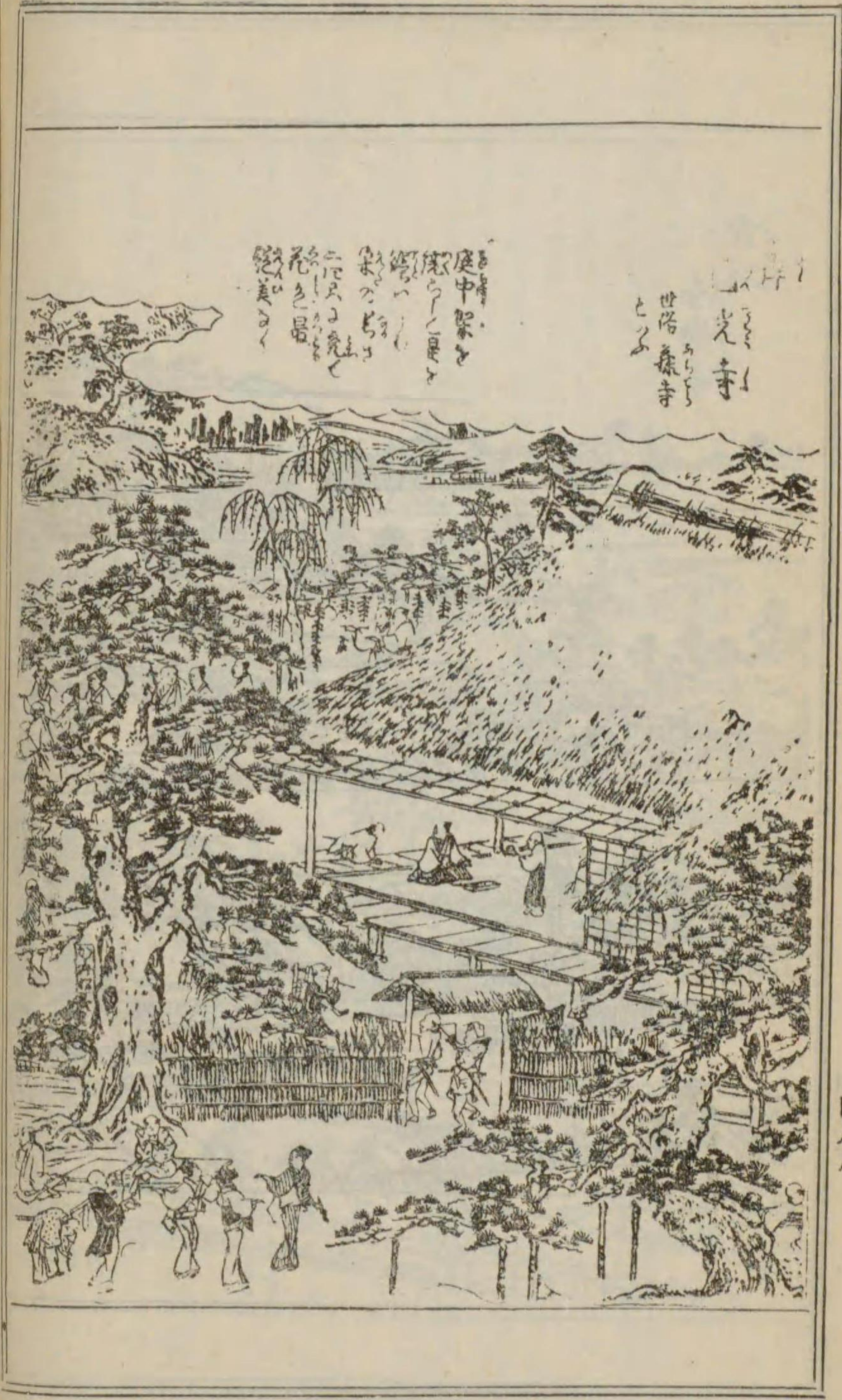
或人云ふ、往古は上下とわかれて、淺草天王町の邊より千住の橋際迄を、すべて千束郷といひけると云ふ。仍て按ずるに、淺草寺至徳四年の鐘の銘に、武州豐島郡千束の彌金龍山淺草寺とあり。又同じ境内に西宮稻荷と稱するあり、里老傳へて是を上千束稻荷となづくると云ふ。小田原北條家の古文書に、千束の内にて、阿佐谷分、三戸分、石濱等の地を太田新六郎、同じく石濱惣領分の地を太田大膳亮、同じく金杉分の地を飯倉彊正忠、同近藤分の地を島津彌七郎、同じく朝倉分の地を江戸番匠等領する事見えたり。こゝに於いて其地の廣大なる事をするべし。

木戸三河守源孝範第宅舊跡 傳へ云ふ、今三河嶋と稱する地は、三河守居住の舊跡なる故に、しか號くるとぞ。或云ふ、此地は細谷三河守といふ人の領地なる故にかくなづくるとも。

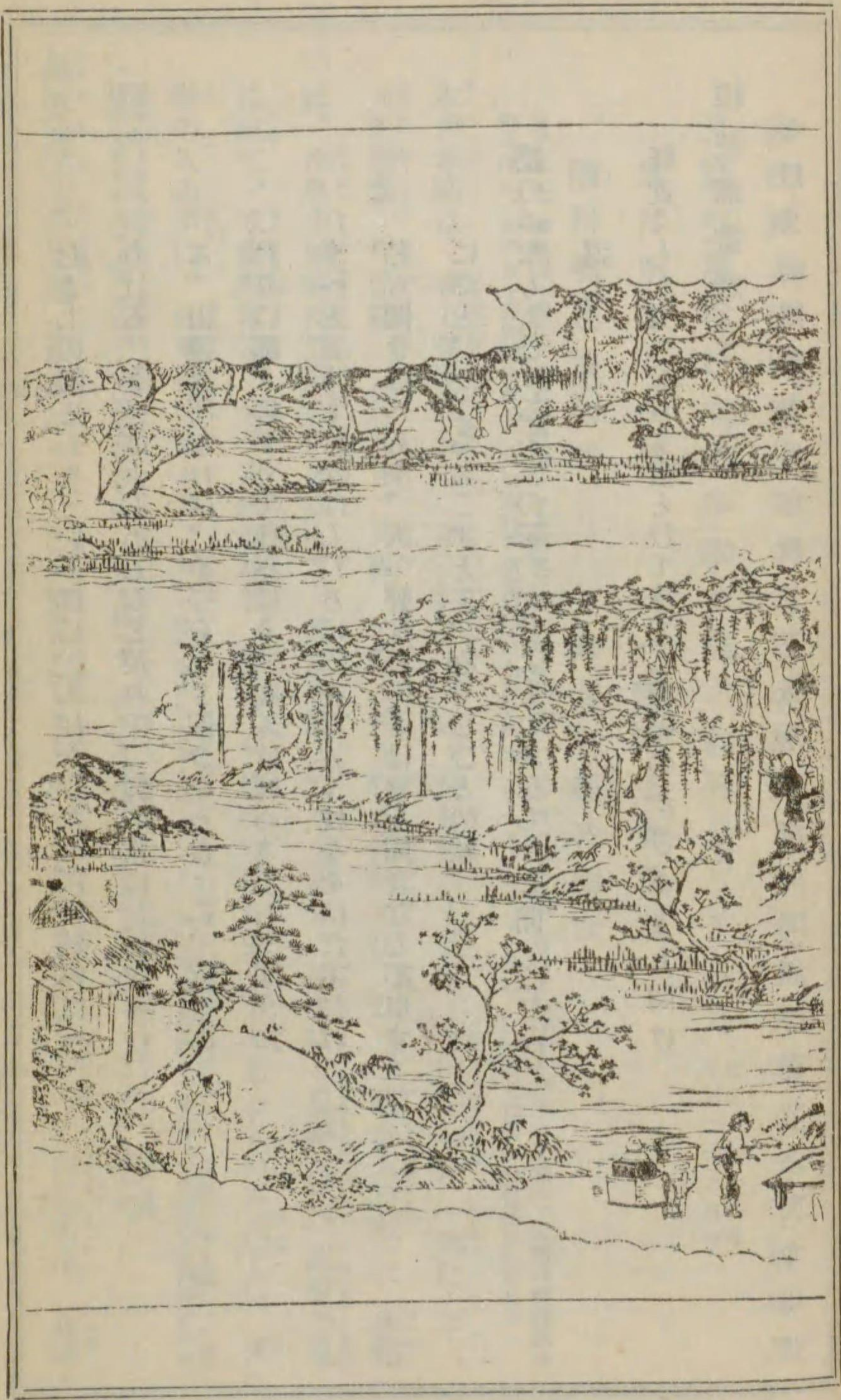
孝範家集云

金谷
安樂寺





光寺
 世階森寺
 とふ
 庭中繁々
 樹々
 二に尺の光と
 花の景
 悠美とく



むさしの國としまといふ郡に、入江かけたる所に住みはべりける。まへはよしあしなど茂りて、鹿の常にたよすみける。山遠き所なれば、めづらしく聞きをるまよに、近きあたりには都人の下りて住みけり。夜ふけばめさまして聞きたまへとまうしつかはしたるに、夜なく、枕をそばだてたれども聞きはべらず、人の聲などのとほきを聞きなして申すにやと、かこちおこすとて、みやこびとの歌、

曉のふなもよひするあまの子のかひよといふをしかと聞くらん返し

軒近くしか立ちならす宿とひて待ちし夜頃のかひよとも聞け

梅花無盡藏云

木戸公號罷釣翁保和歌之正脉余在洛而聞厥聲譽久之矣今也共

寓武野之佳境隅田之上流往還無虛月豈非天之至幸乎昨賜詠歌三篇可謂暗投也聊奉攀末篇之韵脚云二十六日文明十七年乙丑十月二十六日也

雪月寧非老年伴 一吟聊答數篇韵

隅田春色浪如花 烏若知都我細問

按ずるに、孝範家の集に、武藏國豐嶋といふ郡に、入江かけたる所に住みはべりける、前はよし若など茂りてと云々。又梅花無盡藏の詩の序に、木戸公を罷釣翁と號し、共に武野の佳境隅田の上流に寓すといへり。合せ考ふれば、三河嶋の地勢その舊跡に似たり。

木戸孝範は、從五位下に叙し、前三河守と云ふ。又罷釣翁と號す。今川了俊の一族にして、

太田道灌、東常縁、及び正徹、宗祇、心敬、萬里杯と同時世の人なり。鎌倉大草紙に、孝範

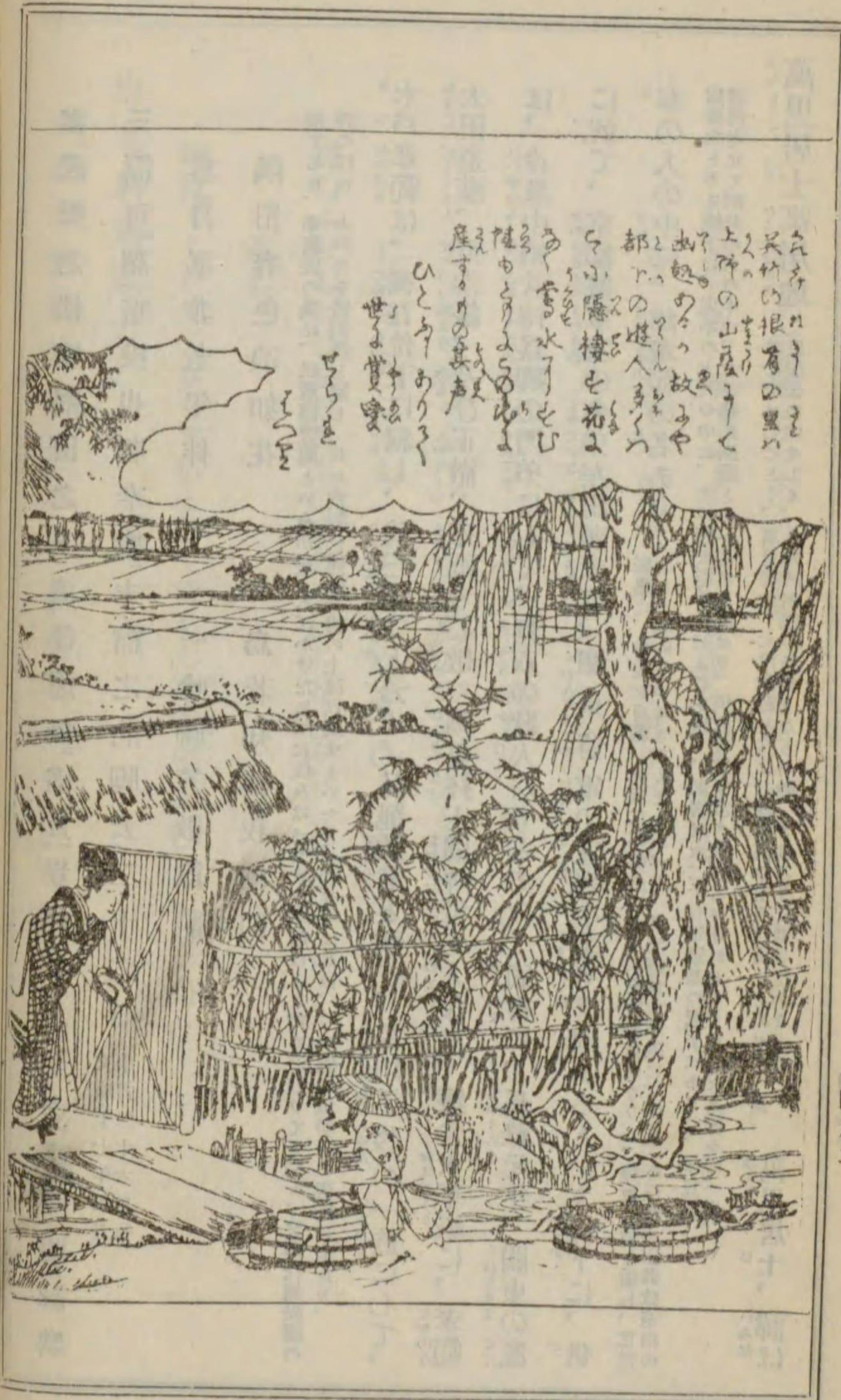
は、冷泉中納言持爲卿の門弟にして、無双の歌人なりとあり。同書に、長祿元年、關東の亂

に就て、京都將軍家の舍弟左馬頭政智、關東將軍の宣旨を蒙り下向あるといふ條下に、供

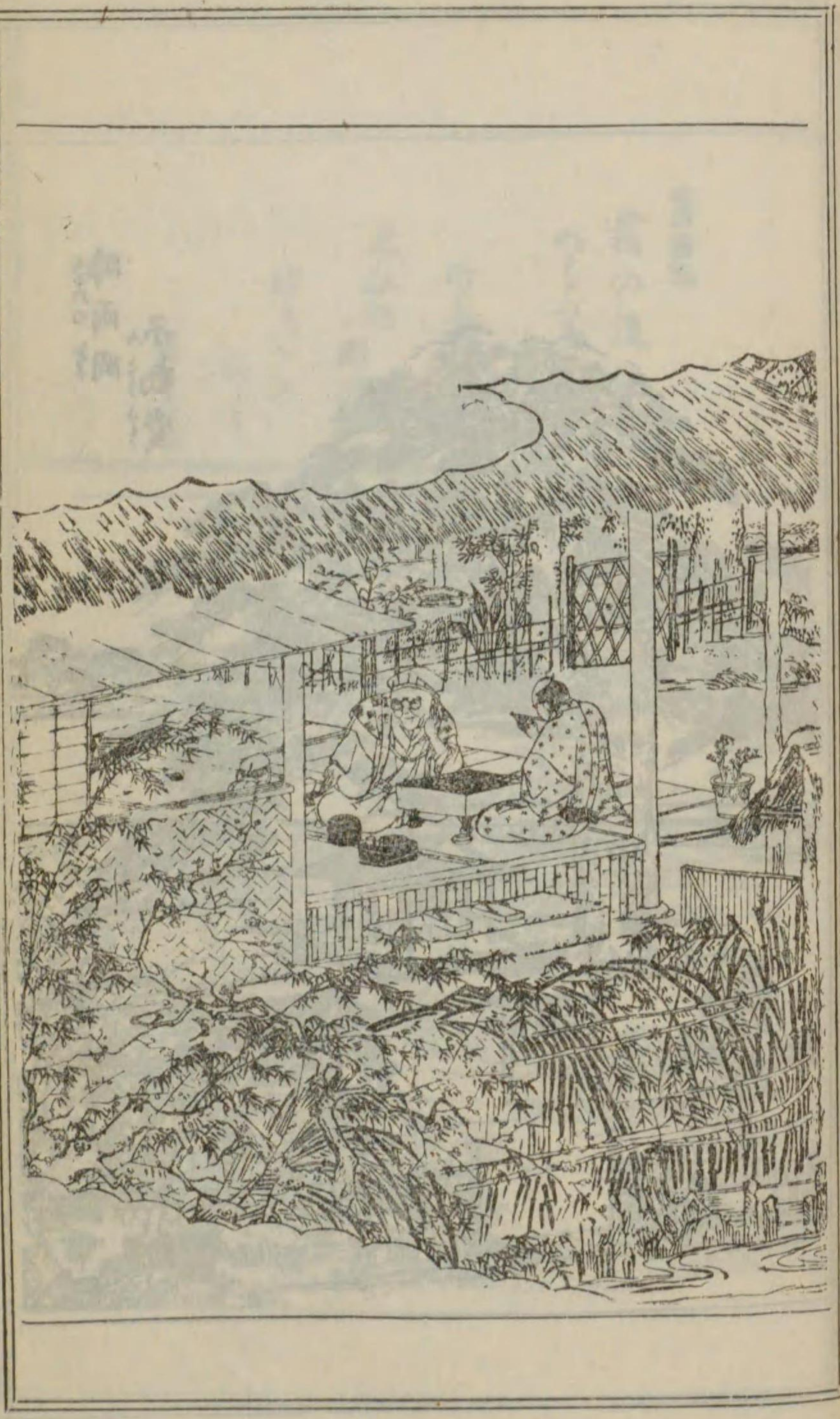
奉の人の中に、此孝範の名あり。家集に、曾祖父貞範、建武二年藏人にたり、左近將監になりて、陸奥の夷を鎮む、其賞

爲發向とある條下に、先手の大將の中に、木戸將監範季と云ふ名を擧ぐ、同書應永二十三年靈基の旗下にありて、伊豆國清寺にて討死の人の中に、木戸將監滿範といへる名を註せり。何れも其氏族の人なるべけれど、いまだ系圖を考へず。

萬里居士寓居地 前に記せしごとく、萬里居士、木戸孝範と共に、隅田河の上流に寓すとあれば、萬里居士、諱は



長竹の根元の里川
 上神の山屋より
 出起のり故中や
 都下の遊人多く
 ら小隠梅と花よ
 りさかす水一とび
 性もよりよのゆよ
 屋すの長声
 ひとやありき
 世に賞受
 せしむる



時雨の岡
不動堂



回國雜記

雨相の後

のり

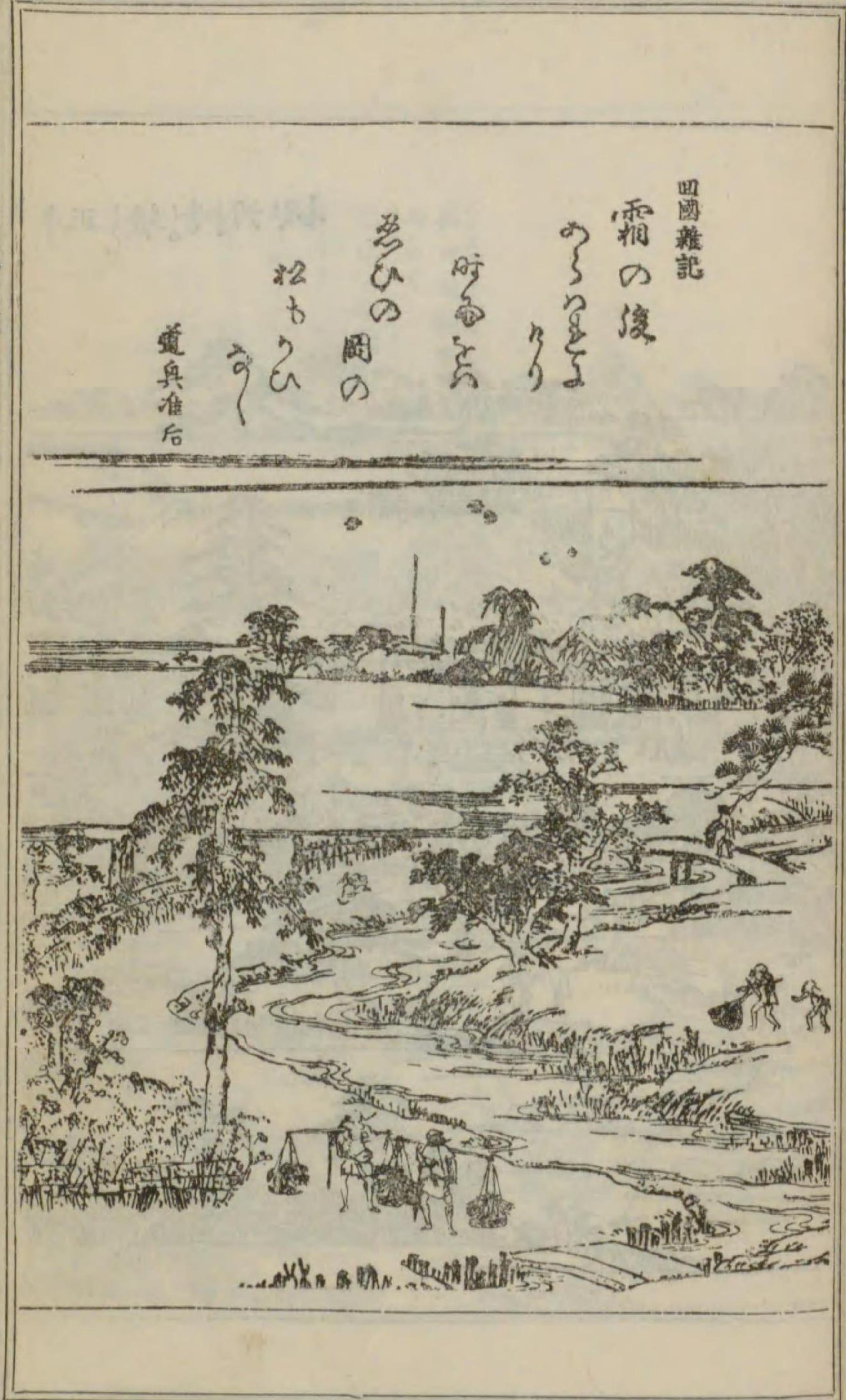
のり

のり

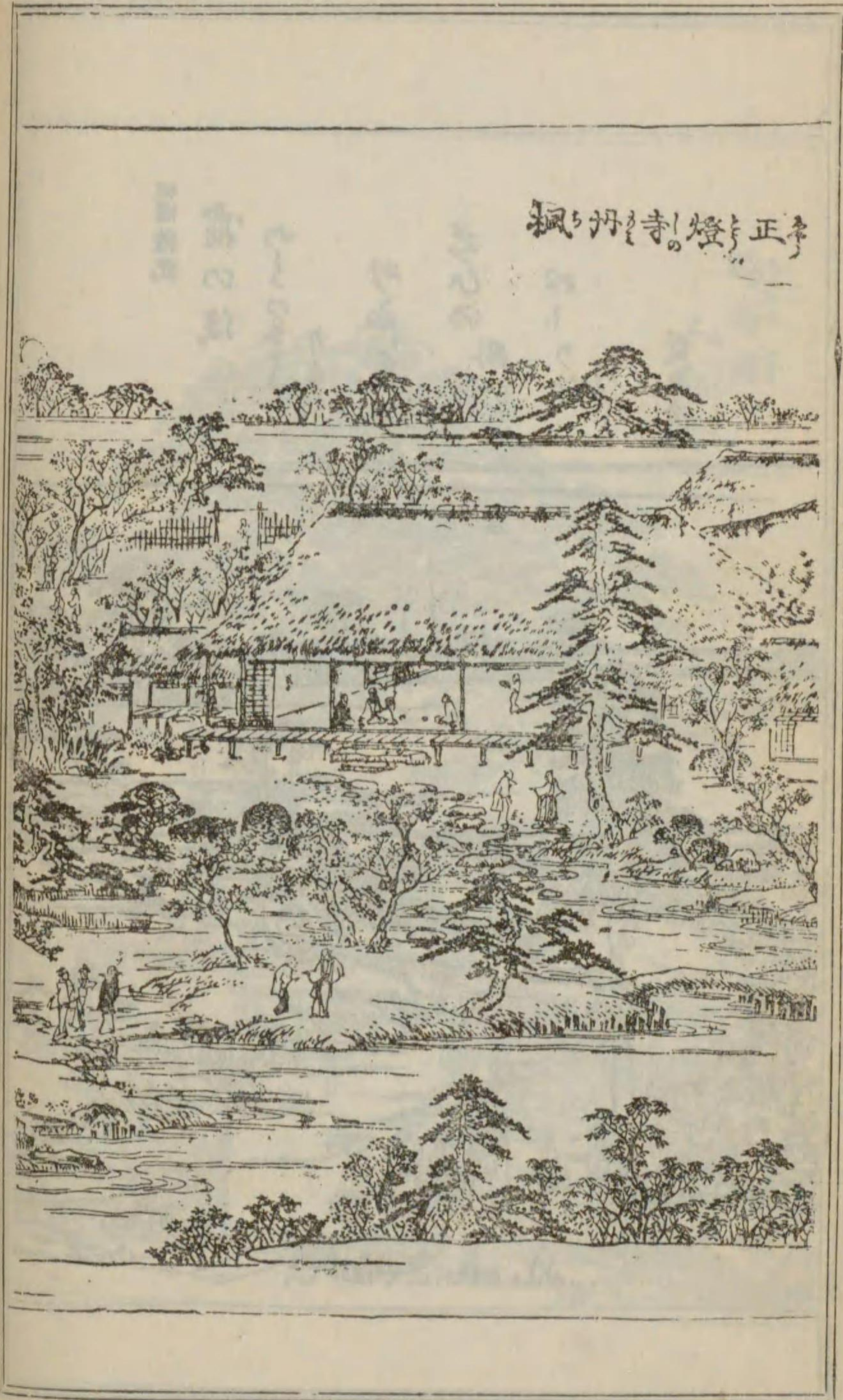
のり

のり

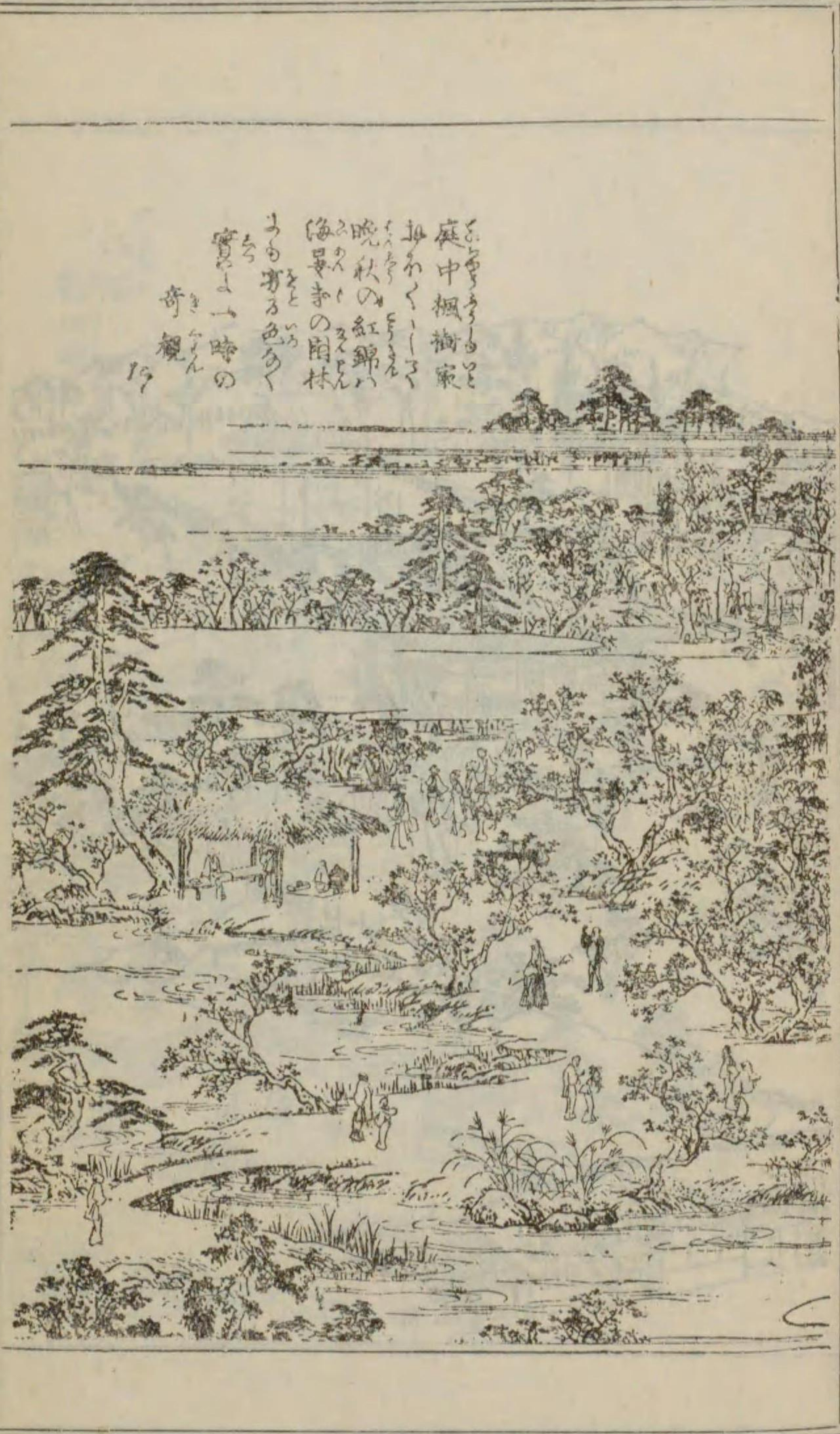
道兵准后

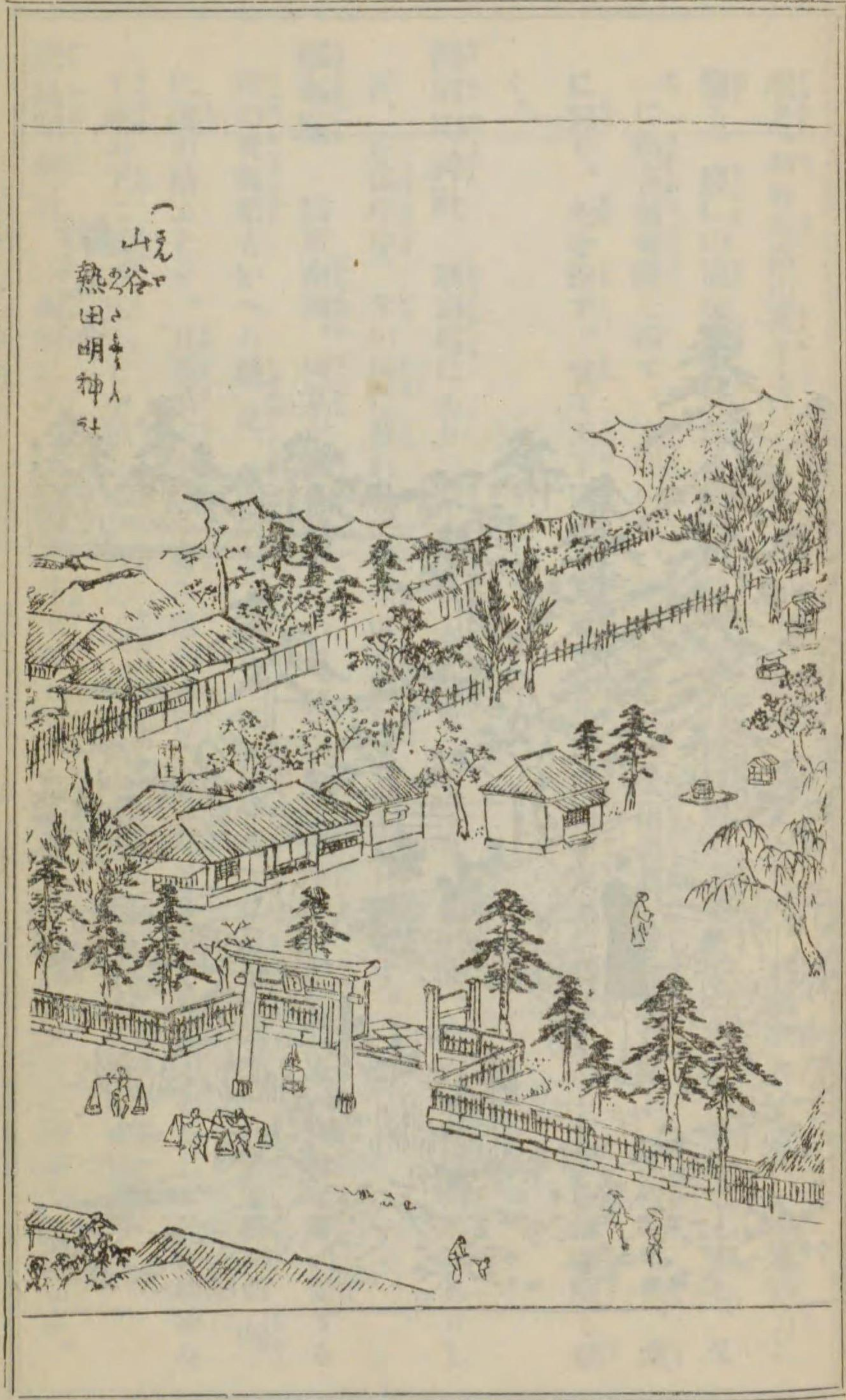


正寺燈台丹楓



庭中楓樹家
秋の紅錦ハ
海早木の附林
よも芳る色久
實と一時の
奇観





駿馬塚



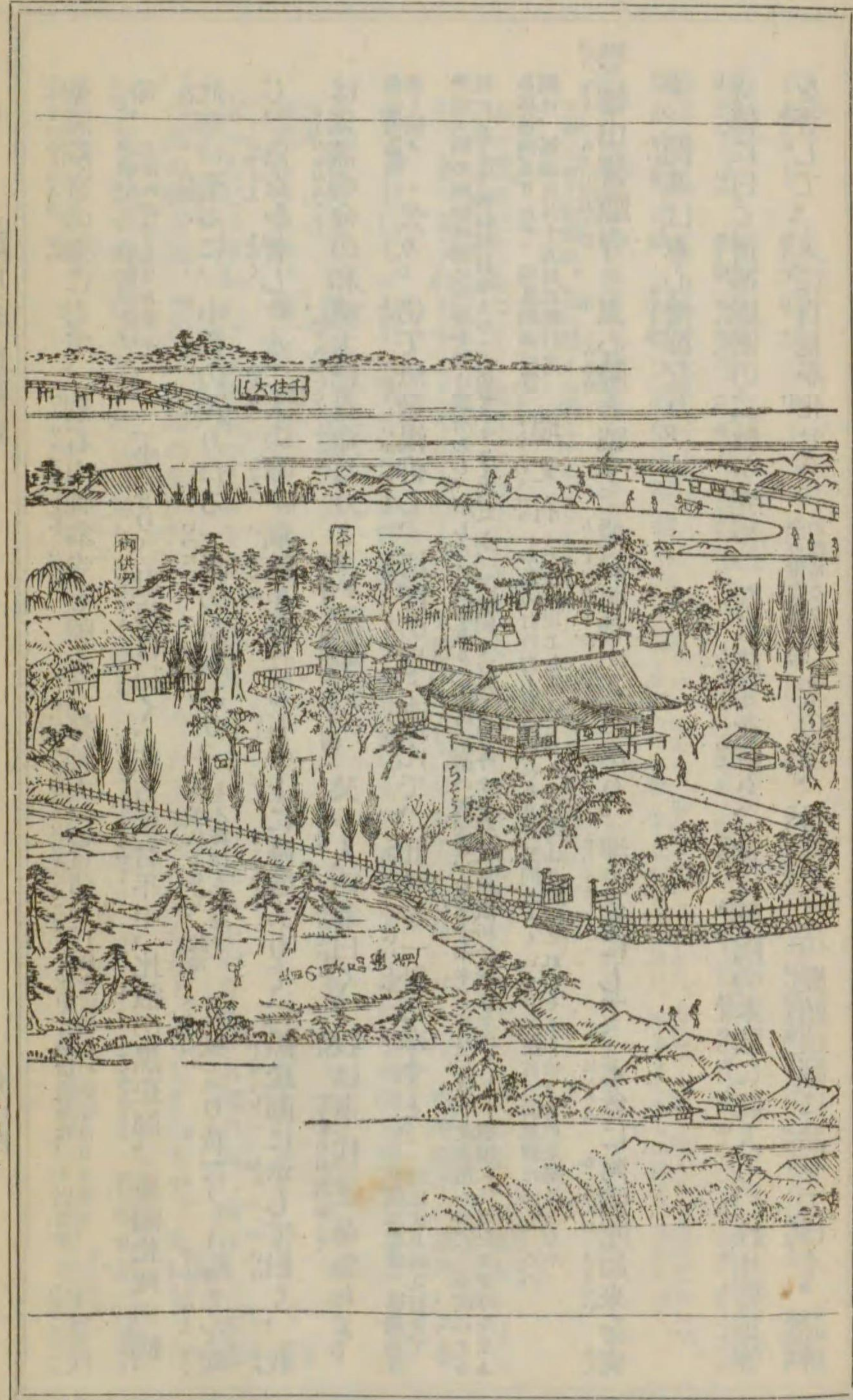
瑞九、初め花洛の萬年寺に入り、大圭和尚に従うて其法を受く。禪機文材ありて、名譽四方に揚る。應仁の亂を避て、江左濃尾の間に寓す。後浮屠の業を廢て、自ら漆桶居士と號し、又一に梅花無盡藏と稱す。文明の末、東武に遊ぶ。太田道灌、谷遇甚だ渥し。灌歿して後、濃に歸り、老を投ず。曾て天下白二十五卷を著す。文明中東遊の詩文集あり。梅花無盡藏と號く。

熱田明神社 新鳥越にあり。祭る所日本武尊一坐なり。當社は、往古元鳥越の地にありしが、正保年中、今の所に移れり。例祭は、隔年六月十五日執行す。

駿馬塚 同所南側、何某が別莊の中にあり。傳へ云ふ、康平中、源義家、東征の時、愛する所の青海原といへる駿足、偶病して、こゝに斃す。公大に是を傷みて、朽骨を驛路の傍に埋め給ふとぞ。其後里民小祠を營み建つといへり。又近頃、其地のあるじ、公の明德を千歳の下に顯さんことを欲して、塚の側に石碑を建て、祠は其塚の東の方に遷せり。

飛鳥明神社 小塚原にあり。此地の産土神とす。世人混じて箕輪の天王と稱せり。別當は、

のとり
飛鳥社
小塚原天王宮



聖護院宮の末にして、けいせきざんしんをうじ 荆石山神翁寺と號す。まつるかみおほなむちのみこ 祭神大已貴命、日本紀古語拾遺等に、大已貴命は素盞鳴命の御子なりとあり。 主事代

命、古事記に、事代主命は大國の命、主命の御子なりと云ふ。 二坐なり。社傳に曰く、往古延曆年中、比叡の黒珍師、東國化度の砌、

此地に至るに、かざさ 小篠の茂りたる一いったい 堆の小塚あり、此塚よりて、此地を小塚原と號せり。 其塚より夜なくずあくわう 瑞光を現

じ、びやくん 白衣を著したる二人の翁、いばらお 荆棘生ひたる石の上うへ に降臨ありて、こくちんし 黒珍師に示して曰く、我

はすさのをのみこ 素盞鳴命の和魂大已貴命なりと。當社牛頭天王と稱するは是なり。 又一人の翁曰く、我は事代主命なりと。

是を飛鳥明神と號す。云々。仍よつ 恐敬渴仰し、しやうじやうち 清淨の地を選んで、このかみ 此神を一社に奉ずと。牛頭天王は、毎歲六月三日より同九日まで、

住大橋の南詰に假に宮居を設け旅所とし、かしこに神幸あり。この祭禮の權輿は、天文十年辛丑六月三日、此荒川へ神輿一基流れ上る故に、是より後は此日をもつて祭日とするといへり。其神輿を取揚し地今なほ存す。又旅所の家根を尋くに、彼地に生じたる茅草を用ふる事舊例なりとぞ。飛鳥明神の祭禮は、毎歲九月十五日に執行す。 瑞光石 本社の右の方小塚の上 あり、又荆石ともいへり。 往古二神老翁に化し、この

豊徳山誓願寺 惠心院と號す。飛鳥明神の北きた にあり。淨土宗にして、本尊ほんぞん に阿彌陀如來を安

ず。開基かいき は惠心僧都なり。

寺傳じでん に曰く僧都顯密の二教にけう を究め、なほ 諸宗を渡り、つひ 遂に彌陀の本願ほんぐわん に歸入し、わうじやうしん 往生要集等

を著して、大おほい に自他じた を化せり。今の世念佛弘法の初めなり。 その頃ころ、僧都上足そうづじやくそく の慶祐法師けいいうほうし に語りて曰く、念佛

の教をし、いまだ東國とうこく に弘ひろ まらず、汝なんぢ 行きて弘法くわふ すべしとなり。仍よつ 慶祐法師けいいうほうし、命めい を受け、東國

に遊化いうけ し、此地このち に來り、當寺たうじ を建立こんりふ す。宇治の惠心院に比して、當寺をも惠心院と號す。 中古ちゆうこ 頽破たいは せしを、ちうじやうじふはつせれう 増上寺十八世了

蓮社れんしや 定譽上人ぢやうぎやうじん、隋波大和尚ずいはだわうしやう 中興ちゆうきやう せり。顯原といへる書に、惠心僧都の母公より、僧都のもとへ贈られし戒の文をいだ

惠心僧都けしんそうづ 依て參内し、稱讚淨土經しやうざんじやうどきやう を侍講しやうかう 申されければ、歡感くわんかん のあまり、本尊ほんぞん および御衣みんぎ を賜たまは はりしかば、古郷ふるきやう なる母公ぼこう の方へ御衣

を贈られし返事に、是を榮とし悦とする心なく、なか／＼に恨うらみ みられし其文に、

山やま へ登のぼ せてたてまつりて後のち は、あけてもゆかしさは心こころ をくだきけれども、たふとき道人だうじん となし

たてまつるうれしやとこそおもひしに、大裡おほうち のまじほりを し、官位くわんゐ にすくみ、青甲紫甲しやうかうふしかふころも に衣ころも のいろを

かへ、君きみ にむかひたてまつり、御經講讀おんきやうかうどく し、御布施おんふせ のものとりたまひ候程ほき の名聞利養みやうもんりやう のひじりとなり

そこれたまふ口惜くちをし さよ。只命ただいのち を限りに、樹下じゆか 石上のすまひ、草くさ とり木食もくじき に身をやつして、木き をこり

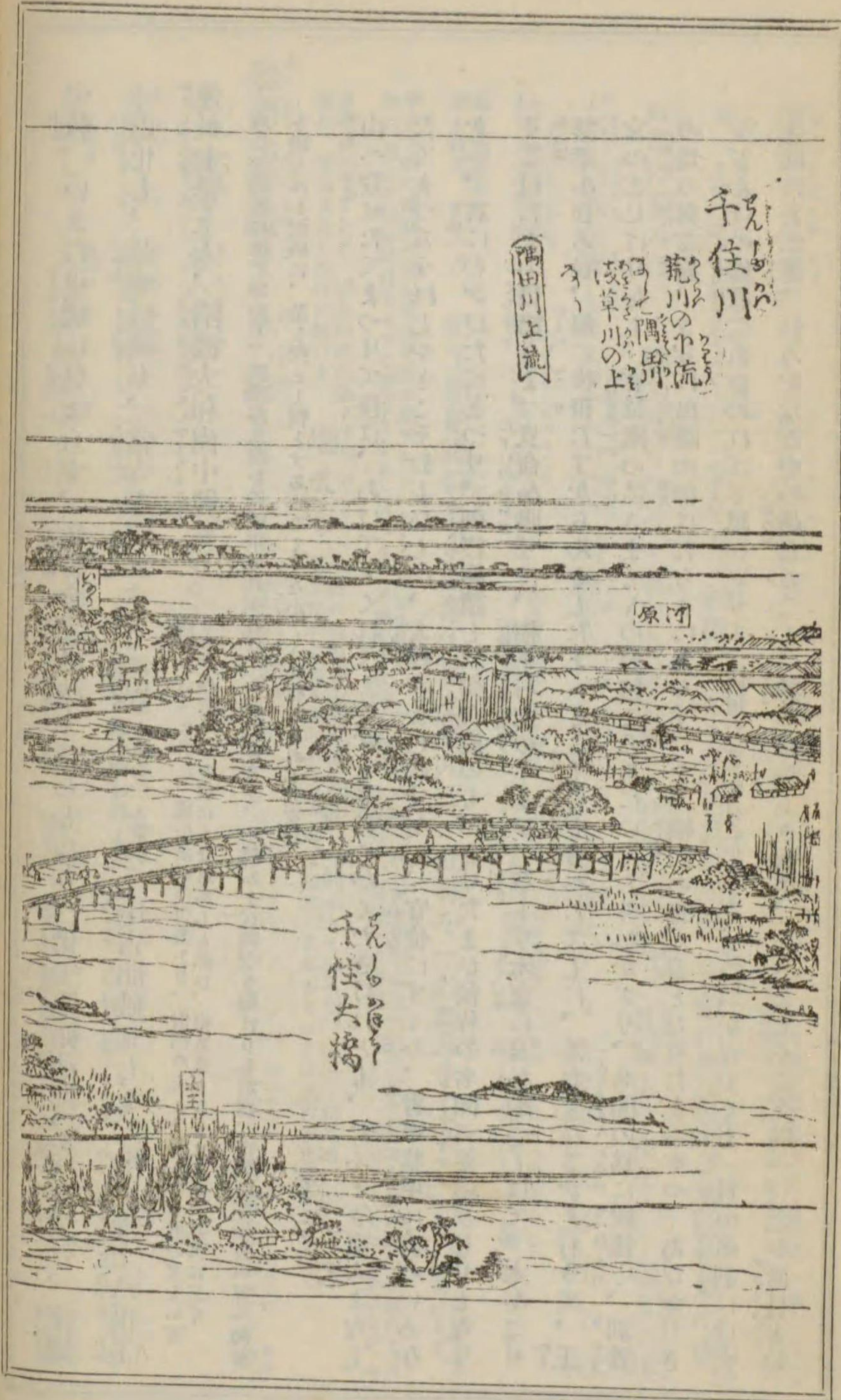
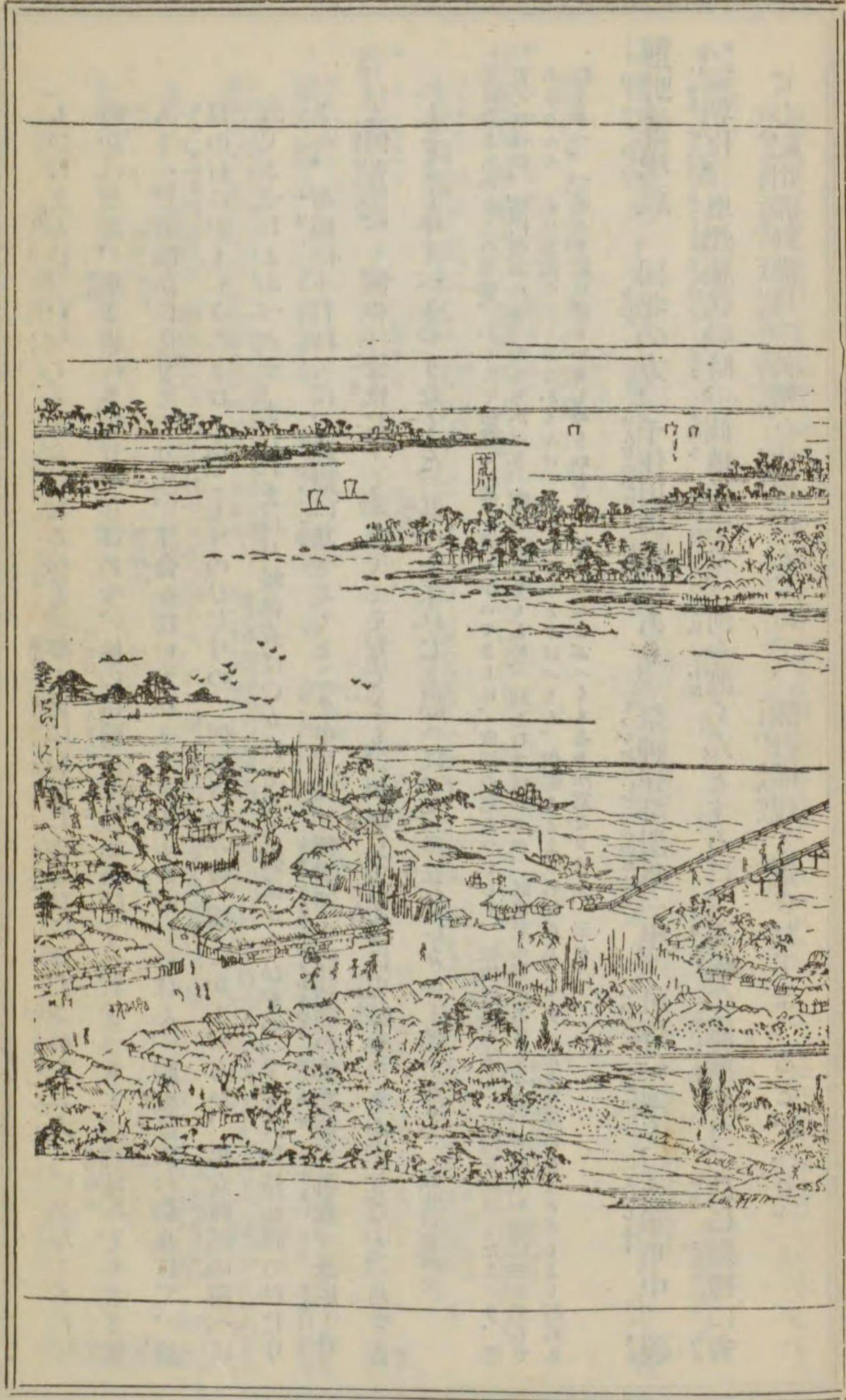
落葉おちば をひろひ、偏ひとへ に後世ごせ たすからんとしたまへとこそこしらへたてしに、ふたたびさかえ行きて、王わう

宮みやう のまじほりを し、官位階くわんゐかゐ の品しな さまざまの袈裟けさ ころもにいでたらをかざり、名聞みやうもん の爲ため に説法せつぽふ し、利養りやう

の爲ため の御布施おんふせ、さらに出離しゆり の御おん たらきにあらず、たゞ輪回りんゑ のおん身み となりたまふぞや。あひがたき

うどんげの佛教ぶつけう にあひぬればと思ひいりて、後世ごせ たすかりたまふべきに、かなしくも一旦いつたん の名利みやうり にほだ

されたまふ事こと、おろかなる中の愚おろか なること、殊こと に口くち をしき次第しだい、あさましくこそ候へ。之の 面目めんもく とお



千住川
 荒川の支流
 河内川
 草川の上
 陽田川上流

原河

千住大橋

もひたまふは、いやしきまふひなるべし。夢の世におなじまふひにほだされたる人々に名をしられて
 何かばせん、永き世にさとりをきはめて、佛の御前にて名をあげさせたまへかし。佛法をしらざる賢
 人さへ、首陽山にとりこもりて、王命をばいなびまうせしとかや。いはんや剃髮染衣の御身にて、捨
 身の行におもむきたまひし山ごりのひじりの、何條さのみ敕諭にかゝづらひ、男女雑居の所へは
 出でさせたまふべきぞ。またたまはり候御衣はいかにしたる御はからひぞや。すでに如法如説のひじり
 さへ、布施にうたれては、地獄に焦さるゝこそ申すに、稱讚淨土經講讀の御布施の御衣、此尼とり
 て何とすべく候や。後世たすくるまでこそなくとも、かへりて三途に引落したまふべきこと、あさま
 しきとも申すべきやうなくと、耳にもふれじと思へば、この法師にかへ候、云々。以上取意略文

嗚呼賢なるかなこの老婆。かくてぞ僧都も後世を厭ふ事いやましに、欣淨の念あつくして、往生要集を述し、自他を利益したまへり。季
 世の僧法師、權門勢家にみづからちかづき、諂ひて名をもとめ、利をむさぼるもの、此老尼の筆のあとをみば、いかでか面に汗せずして
 ありなんや。是に慙愧のこころなからんは、禽獸にもかとりはべらん。僧都もとより名利の人ならず、たゞ至孝のこころさしより贈れる
 物をさへ、つれなき迄に返し申しめられしは、後人のあまぶべくもなき所爲なりける、云々。

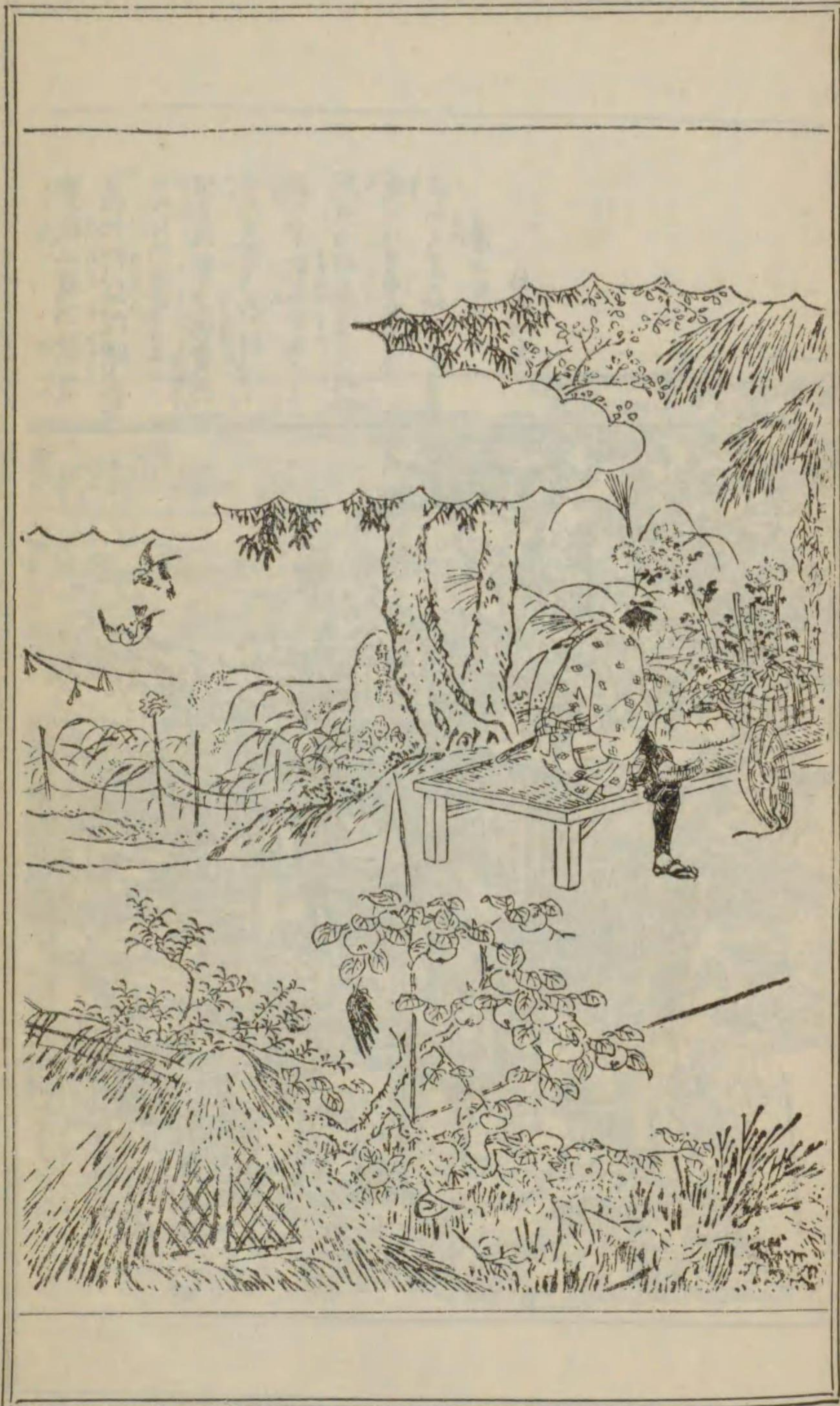
熊野權現社 同北の方、千住川の端にあり。祭神伊弉册尊一坐。社傳に云く、永承年中、義
 家朝臣、奥州征伐の時、此地に至り、河を渡らんとするに、奇異の靈端あり。故に鐙櫃に安
 ぜし紀州熊野權現の神幣を此地にとどめて、熊野權現と齋きたてまつるといへり。

按ずるに、熊野權現、飛鳥明神、何れも紀州に鎮坐あり、又此地に兩社あるも、いはれあるべきことなれども、今傳記とりんとしにして
 詳なることを得ず。余説を設けんとするといへども、しげきをいとひてこゝに略す。

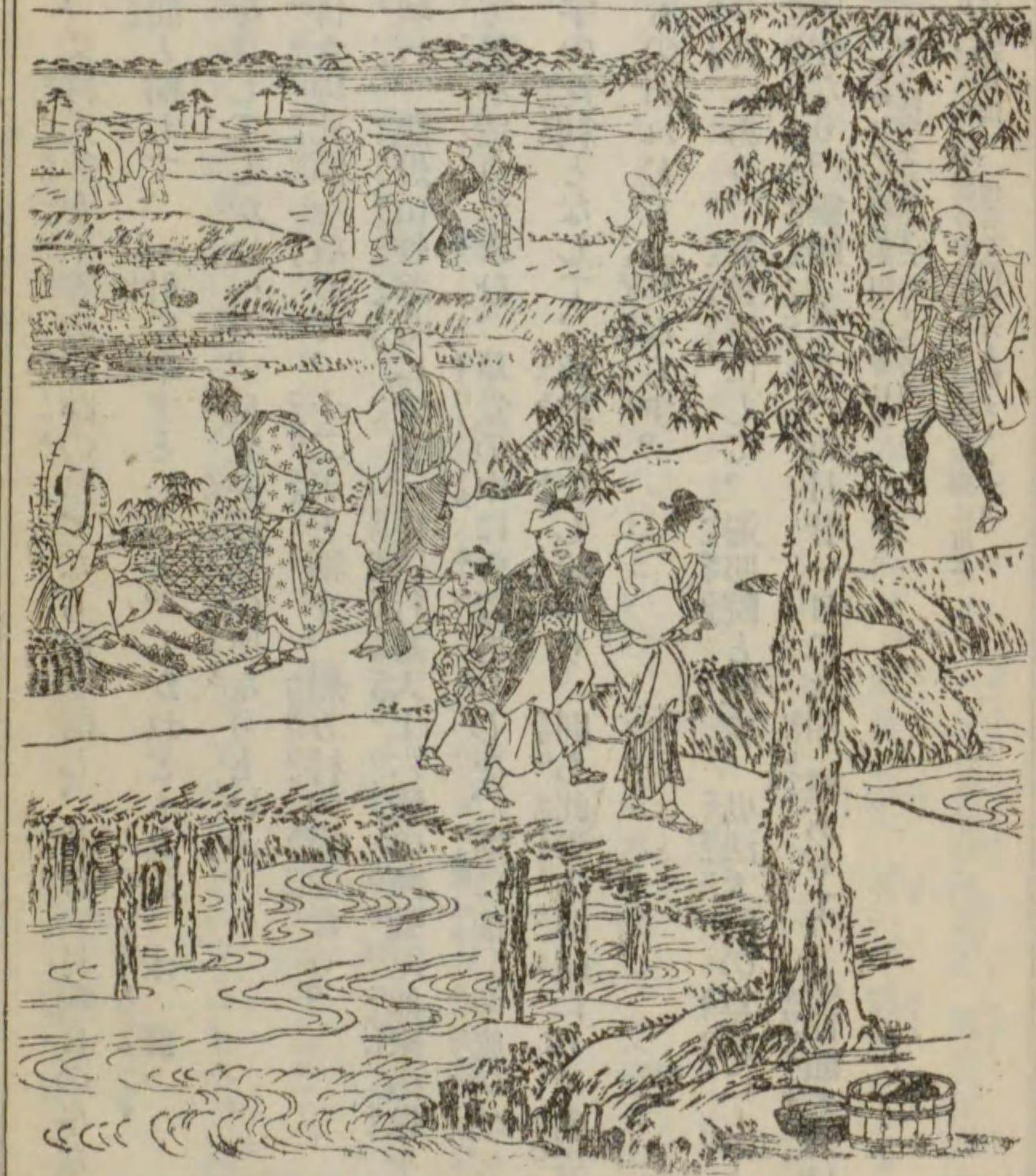
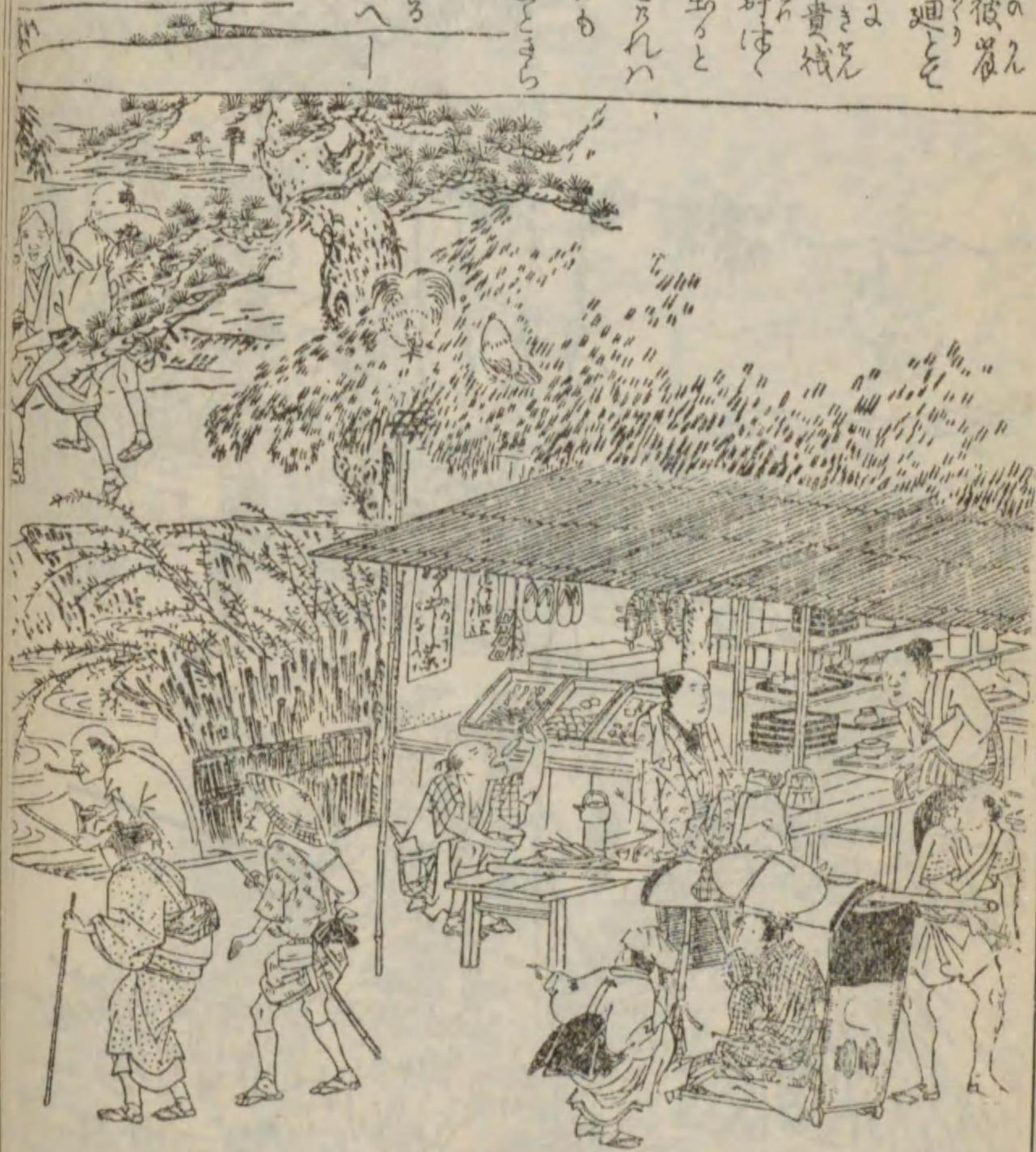
千住大橋 荒川の流に架す。奥州海道の咽喉なり。橋上の人馬は、絡繹として間斷なし。
 橋の北一二丁を経て驛舎あり。此橋は、其始め文祿三年甲午九月、伊奈備前守奉行として普
 請ありしより、今に連綿たり。

甘露山延命寺 應味院と號す。下沼田にあり、眞言宗の古刹にして、行基大士の草創なり。
 本尊阿彌陀如來は、同作にして、六阿彌陀第二番目とす。春秋二度の彼岸には參詣多し。
 富士淺間祠 同所川下の方、深林の中にあり。土民傳へ云ふ、昔此地に、足立莊司にて、宮
 城宰相といへる者あり。一女子をもてり。名附て足立姫といふ。六阿彌陀第一番第四番兩緣起には、豊島

左衛門清光の女とも、また二番目緣起
 には沼田莊司の女とも、三番目五番目および六番目
 緣起には、足立從二位宰相藤原正成の女ともあり。父母隣縣の豊島左衛門尉なりける者のもとへ嫁せしめん
 とす。六阿彌陀第一番緣起に、足立少輔のもとへ送ると、又四番目五番目六番目緣起には、沼
 田少輔のもとへ送るとあり。三番目緣起、餘木キアマリの彌陀等の緣起上にもなじ。されども彼女子常に佛神
 を敬するの外他なし。故に是に隨はず。父母強て婚姻を整ふといへども、猶此事をふかく患
 へとし、竟に荒川に入りて死す。又沼田川とも云ふ。千住川の侍女も又ともに身を投げて死せり。仍



春秋二度の彼ら
五六阿弥陀と
日ウケの麗あるよ
催され都々の貴様
老たる若き打群は
朝とく宅居とあると
いとも行程をたれハ
遠くたる妻の目も
長少くさ秋のこころ
暮サセ
ねりつる



て莊司悲歎に絶えず、又村人彼女子等の行跡のたどならぬを稱し、其日六月朔日の事なればとて、其靈を富士淺間と稱して、一社に奉ずといふと。しかれども其説未詳。

淺間淵 同所の河淵をさしてしかいへり。足立姫溺死の所なりといふ。

十二天森 足立姫の侍女の死骸を收めて、十二天と稱す。船方村の鎮守なり。

餘木阿彌陀如來 宮城村、龍燈山性翁寺に安ず。往古行基大士六體の阿彌陀如來の像を彫刻

ありしその餘材を以て是を造りたまひ、草堂の中に安置ありしを、遙に後、明應の頃、正譽

龍吞和尚、改めて一字の梵刹となして、此地に住し給へり。則ち此寺の開祖たり。當寺に足

立姫の墳墓と稱するものあれども詳ならず。

五智山總持寺 西新井村にあり、眞言宗にして、遍照院と號す。弘法大師の草創にして、本

尊弘法大師の靈像も同作なり。靈驗著く、毎月廿一日には開帳ありて、參詣頗るおほし。

或人云ふ、當寺弘法大師の靈像は、そのかみ北總眞間山弘法寺に安置ありしが、日蓮宗に轉じたりし頃、此像をば當寺に遷すと云ふ。

阿伽井 本堂の左の傍にあり。則ち弘法大師の加持水なり。洗目服藥に用ふるに、其應驗あり。此井に依て、地名を西新井と稱すといへり。

八幡宮 六月村にあり。別當を炎天寺と號す。傳へ云ふ、八幡太郎義家朝臣、奥州征伐の時、

此國の野武士ども、道を遮る。其時六月炎天なりければ、味方の勢、勞れて戦はんとする氣

色もなかりしにより、義家朝臣、心中に鎌倉八幡宮を祈念ありしかば、不思議に太陽繞るが

如く光を背に受けければ、敵の野武士等、日にむかふ故に、眼くらみ、大に敗北しぬ。依て

此地に八幡宮を勸請ありしとぞ。此故に村を六月といひ、寺を炎天と稱し、又幡正山と號

すと云ふ。

白旗塚 伊興村、田の中にあり。傳へ云ふ、往古八幡太郎義家朝臣、奥州征伐の時、此地に

白旗を建て凱歌を唱へしより、此名ありとぞ。近頃迄、此塚上に小祠あり。其傍へ立寄

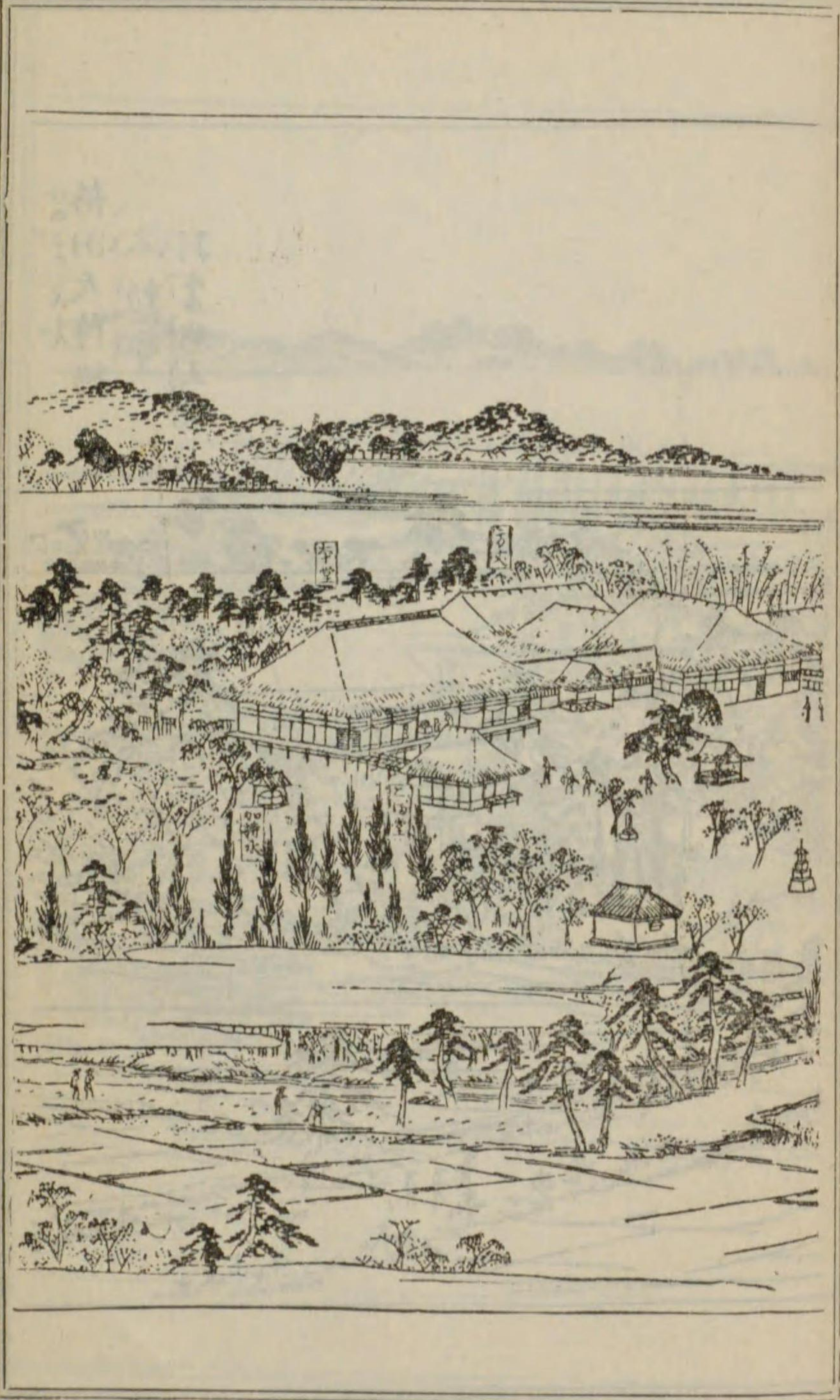
るものあれば、祟ありし故、社荒廢におよびけれども、其儘に再建もせざりしとて、今塚

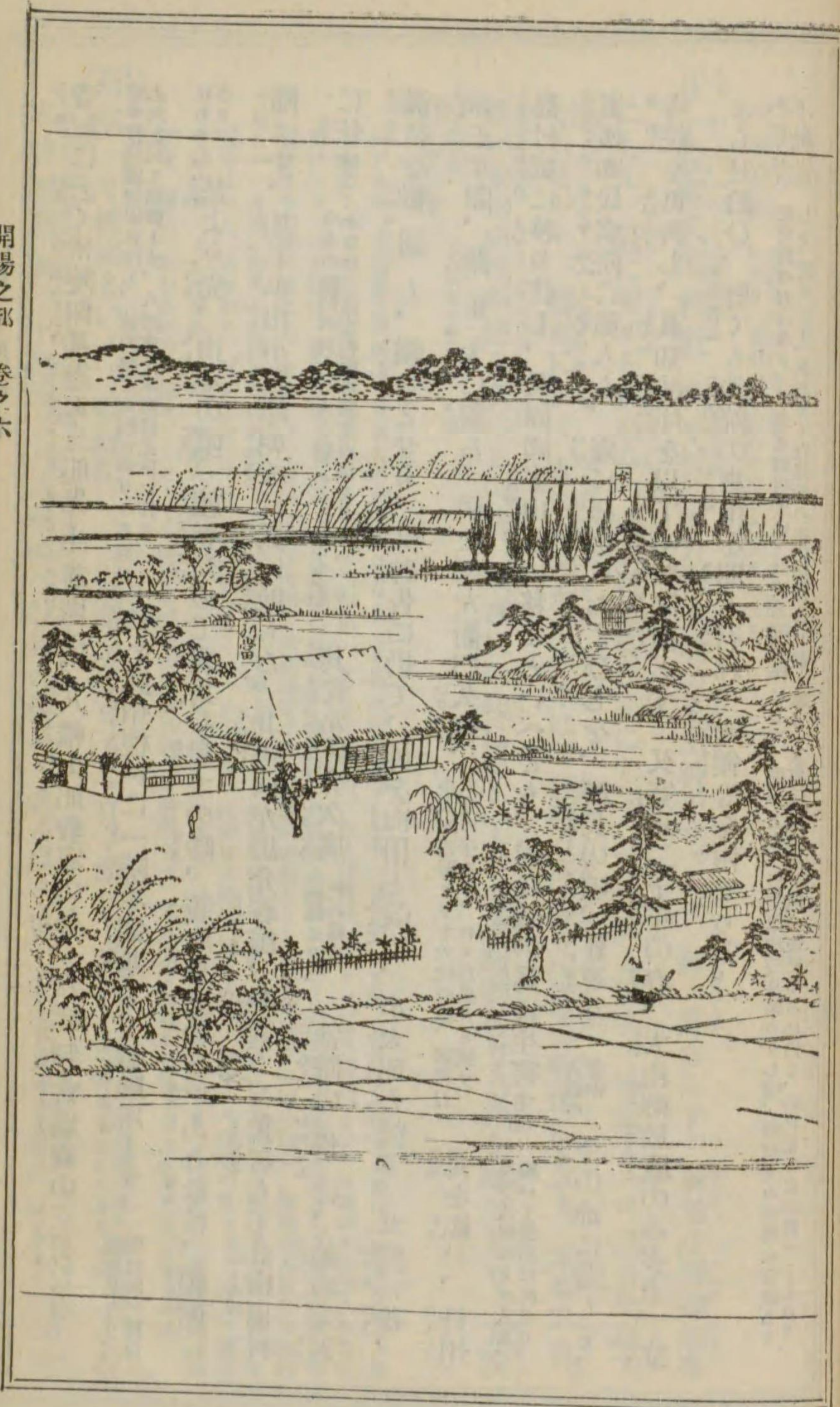
ばかりを存せり。今も此塚の上に、此邊の田面を、白旗耕地といふ。又兜塚と稱するもの、五箇所

あり。兜首實檢ありし後、其首を埋めたる所とぞ。

萬徳山明王院 梅林寺と號す。梅田村にあり、新義の眞言宗にして、本尊に地藏菩薩を安ず。

函新井
大師堂
毎月廿一日
祭奉り





梅田天神祠
不動堂
別當明王院



寺記に云く常院開基志太三郎先生義廣は、八幡太郎義家の孫、六條判官爲義の三男なり。始め常陸國伊田に住し、後同國志太村にありける故に、初め武州榎戸に一院を創基し、祈願所とす。當院是なり。志太を以て家號とす。八坂本平家物語志太に作る。是より先、治承の頃、頼朝初めて義兵を起すの時、義廣自立の志ある故に、頼朝に隨はず、却て小山小四郎朝政が爲に敗らる。其後同左馬介義純、義廣三代の孫なり。蟄居して此梅田村に住す。今寺の惣門の右の方を廳(グルワ)とあざな。其裔常陸介久廣、義純より三代の孫也。當院の傍に、始めて天満宮を勸請し、鎮守とせり。又神告に仍て、姓を梅田と改め、小太郎と號す。又遙に後、永正年間、關東大に亂る。同太郎左衛門久義、小太郎久廣より十六代の孫、同帶刀。是を厭ひ、丹州島村城に移り住し、又同國峯山城に移るといへども、遂に敵の爲に生害す。長子久頼もよび久友、其後國民當院に亂入し、遂に破壊におよびしを、慶長の頃、賴專坊、舍弟、久義の。今の地に遷して、寺院を再興し、眞知法印を以て中興開山とす。又寛永二十年の春、大樹御放鷹のみぎり、立よらせ給ひ、辱くも當院の來由を聞き召れ、寺領等を附せらる。不動堂本堂右の方にあり。本尊不動明王は、弘法大師の作にして、覺摩上人、根來傳法院草創ありし頃、護摩堂の本尊に安置ありしを、天正三年、故ありて花洛歌の中山清閑寺に移し奉り、又寛保元年不思議の靈感あるに仍て、終に當寺に安置せしとなり。

天満宮祠 不動堂の後の方、小しき丘の上なる古松の下

正一位鷲大明神社 花亦村にあり。此地の産土神とす。祭神 詳ならず。本地は釋迦如來にして、鷲に乗ずる體相なり。別當は眞言宗にして、正覺院と號す。毎歲十一月酉日を以て

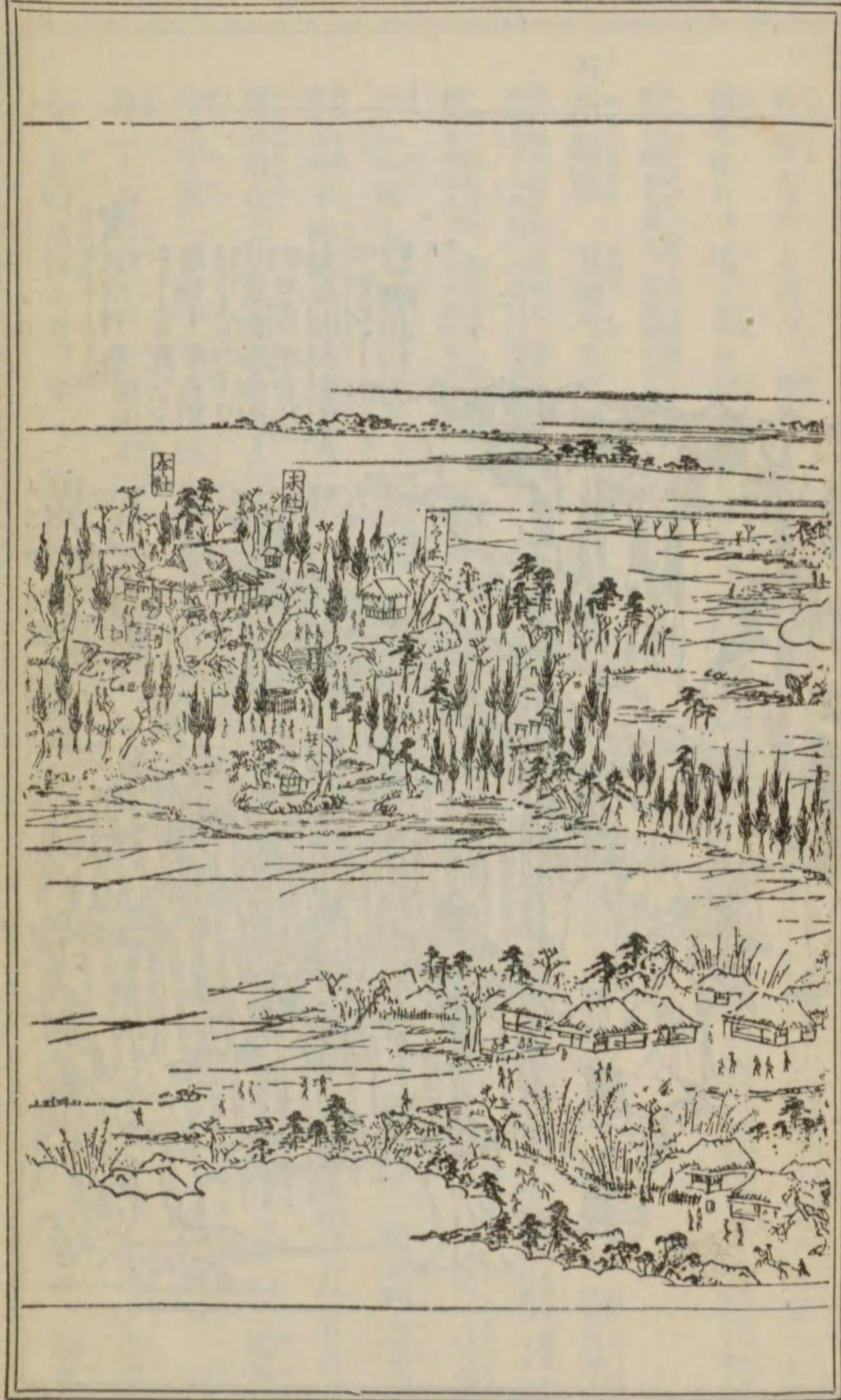
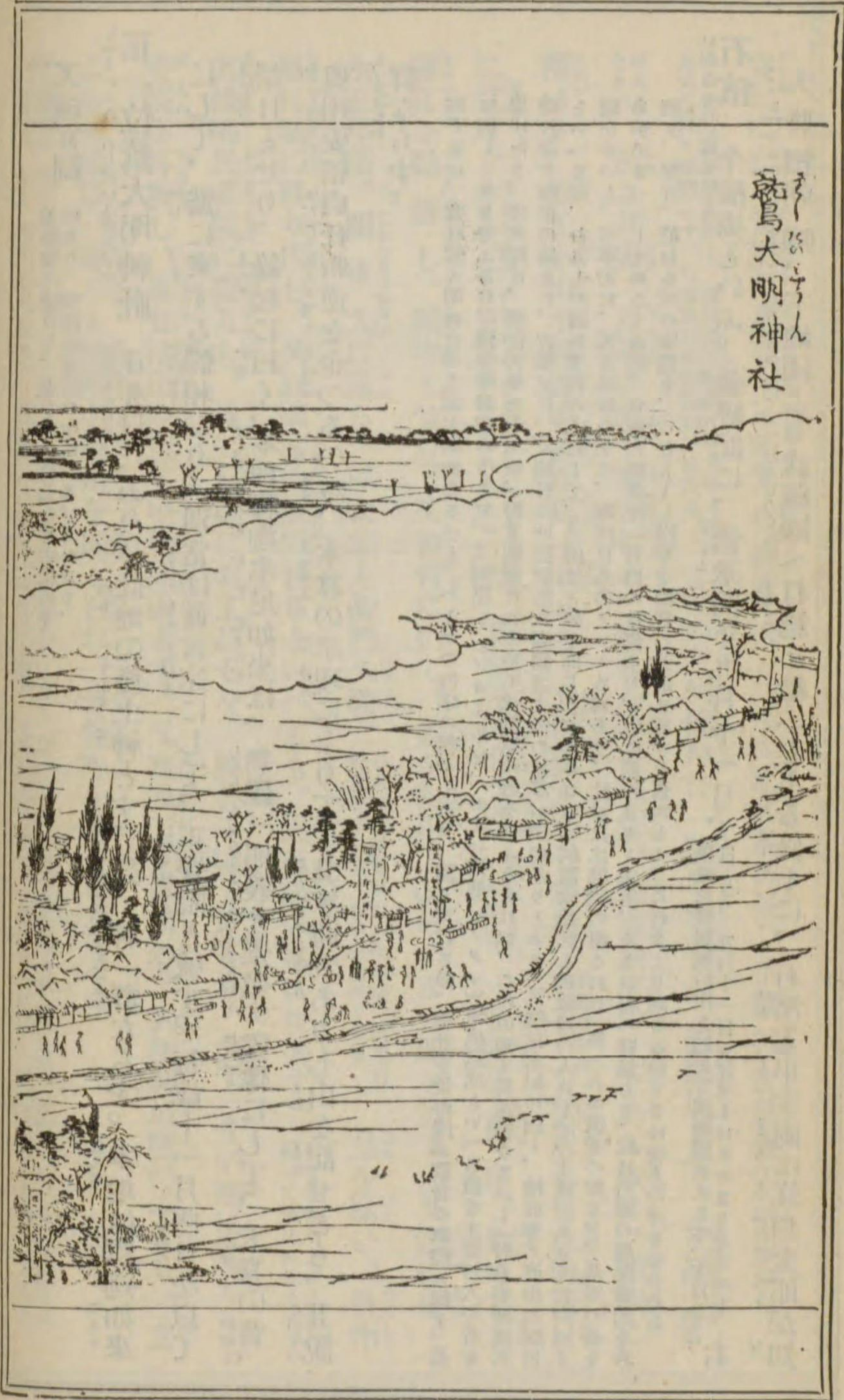
祭日とせり。縁起に曰く、本地釋迦牟尼如來は、新羅三郎義光崇敬の靈像にして、天喜の昔、奥州安倍貞任叛逆を企つるの時、本尊の示現によりて、其軍勝利ありし由を記せども、其説

詳ならず。

按ずるに、當社鷲大明神は、土師大明神なるべし。ハトリの假字の轉せしより、謬り來れる歟。當社を世俗淺草觀音の奥院と稱す。是に因てこれを考ふるに、淺草寺縁起のうち、土師臣、ハシノオミ中知、ちよび檜前ヒノクマ、濱成武成といへる漁者主従三人の名を擧げたり。日本紀に、垂仁天皇三十二年、野見宿禰はじめて土師臣の姓を賜ふとあれば、この中知も其遠裔なるべし。野見宿禰は天穗日命十四世の孫なり。古事記に、天穗日命は出雲臣武藏國造土師の連等が遠祖なりとあり。又續日本紀に曰く、檜前舍人直由加麻呂といへるは、むさしの國加美郡の人にして、土師姓と祖を同じうすとあれば、此濱成武成も武藏國の人にして、主従三人ともに姓は土師なるべし。古事記に、天喜比命の子に、建比良島命といへる神あり。此神は土師姓の祖なれば、彼三人の漁者の輩など、是等の神をあがめまつりしものならん歟。當社に毎年十一月酉の日祭あり、世に酉のまちと云ふ。まちは祭の略語なり。此日近郷の農民家鶏を奉納す。翌日、納むる所の家鶏を、ことごとく、淺草寺觀音の堂前に放つを舊例とす。これ又より處ある歟。なほ後人の考を待つのみ。

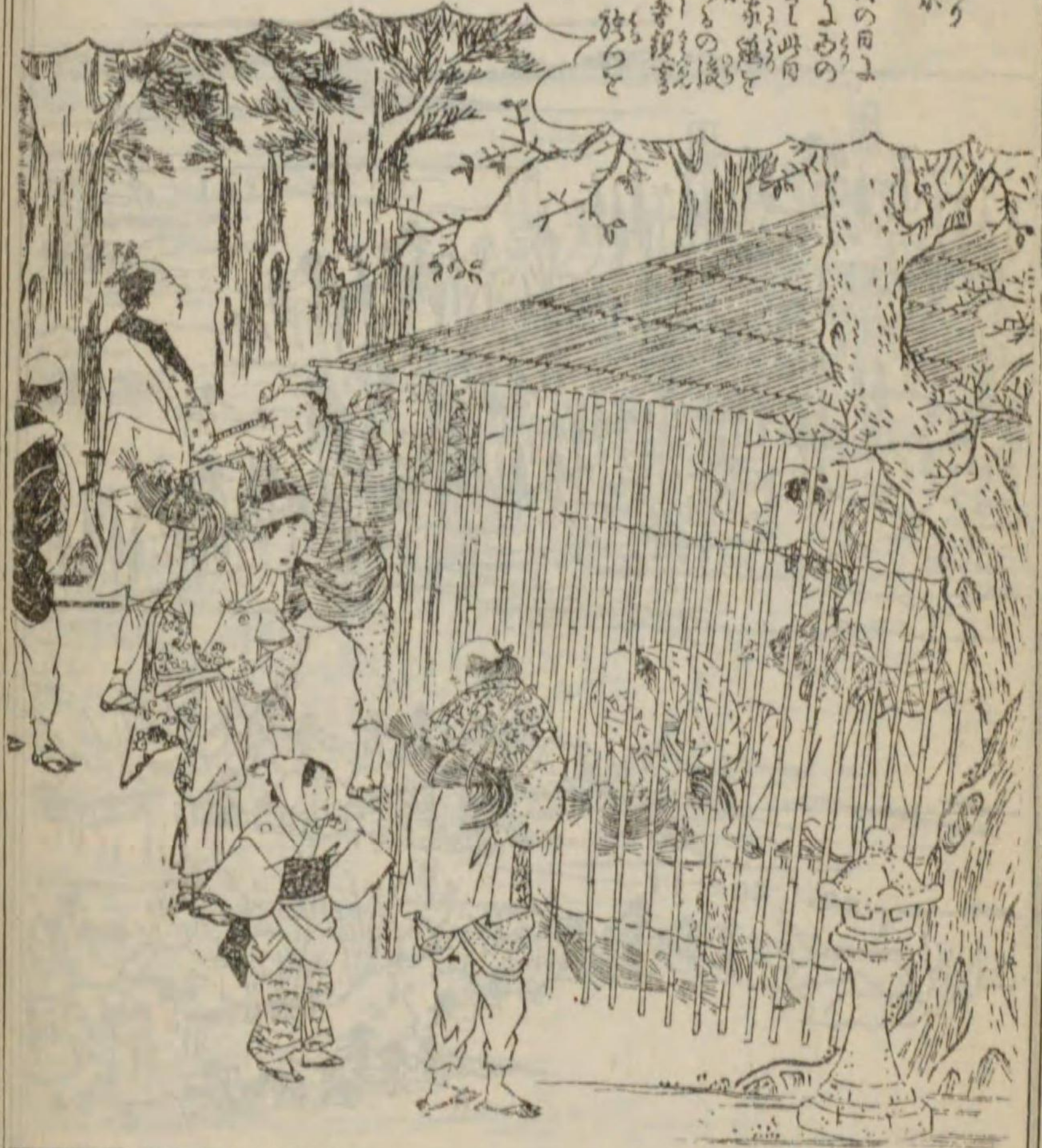
石濱 今橋場といふ。義經記に、治承四年九月十一日、東鑑に頼朝隅田川を越えて武藏國に入るを、十月二日とす。九月十一日と記せしはあやまりなるべし。右大將頼朝卿、下總國より武藏國へ打越え給ふとある條下に、石濱と申す處は江戸太郎が知

鷺島大明神社



勢島大明神祭

毎年土月雨の日に
勢島大明神祭
此の祭は、此の地の
道々の農民が、神を
祭る。昔は、此の地
の農民が、神を祭る
の堂を建て、祭る
の儀をなす。



行所なりと云々。按ずるに、同書に、江戸太郎重長は八箇國の大福長者とあり。則ち重長は畠山庄司。其のちち、
領となり、代々是を知行せしなり。永祿二年小田原北條家の古文書に、太田新六郎、同大膳亮所領の中に、千葉石濱の名
此地を領せし事は、石濱城址の許につまびらかにあり。

石濱城址 其地今さだかならず。事跡合考に、神明宮の北の方なりとあり。按ずるに、龜戸普門院
淵の事を擧げたる文中に、普門院古へは隅田河三股の城中にありと云々。普門院は則ち千葉自胤創立の梵刹にして、三股の地も又千葉家の
所領たりし事は、小田原北條家の古文書に詳なり。三股と唱ふる地は、荒川綾瀬川の下流、隅田川に落ち合ふ川股の所故にかく名づくとい
へり。然る時は、事跡合考に記せし如く、鎌倉大草紙に云く、千葉介胤直、上杉憲忠に談はれ、父子兄弟
神明宮の北の方その城址なるべき歟。

共に一味して成氏に背く。成氏は將軍。左馬頭なり。ことよにまた故千葉大助胤満が二男、陸奥守入道常輝父子、
其子を孝しもふきのくにまはりし。胤と云ふ。下總國馬加の城より打て出で、成氏の味方となりて合戦す。竟に亨徳四年三月廿日、
胤直敗北し、其子胤宣および千葉入道常瑞、舍弟中務入道了心等、悉く切腹す。よつて陸奥
守は千葉へ移り、千葉の跡を継ぎける。然るに上杉よりは、中務入道了心の子息、實胤、自
胤二人を取立て、下總國市川の城に楯籠る。ことよにおいて、千葉家一流となり、總州大に亂
る。其頃京都より、東下野守常縁、陸奥守退治として、馬加の城へ馳向ひ、攻戦ふ。陸奥

守かなはずして千葉へ引退く。常縁は千葉介常胤の六男、東六郎大夫胤頼十世の孫なり。時に美濃國郡上の城主たり。京都將軍の命を受けて下總に下向す。康正二年の正月、成氏、市川の城を圍む。同く十九日、落城して、實胤は武州石濱へ落行き、自胤は同赤塚へ移りける。其後上杉家より、胤直の一跡として、實胤を千葉介に任せしむ。されど成氏、陸奥守の子孝胤を最良ありて、千葉に居置かれける間、孝胤は其父陸奥守入道常縁と共に、故胤直兄弟を亡し、成氏へ奉公の人にして、故成氏より千葉の跡を賜りしなり。實胤は城へ入る事かなはずして、武州石濱、葛西邊を知行し、時を待ちて居たりしが、世の中を述懐し、濃州に閑居す。依て上杉家より、實胤の跡を兄の自胤に賜り、千葉介に任ず。是を武州の千葉と號す。以上鎌倉大草紙の意を採る。

南朝紀傳に云く、丙子康正二年三月、千葉の家も、成氏と上杉と相論するによつて二にわかれ、惟胤と園城寺の某武州に赴く。云々。

梅花無盡藏。文明丙午隅田河詩註云。

隅田在武藏下總兩國之間路傍小塚有柳道灌公爲攻下總之千葉構長橋三條云々。

同書便面題詩註云。

八景或雪讚獻千葉蓋上總下總千葉所管也。今寓武州者與上下總之千葉矛盾一門分爲二。灌公救在武者。

雪月碧湖煙雨後 漁歌鐘色送飛鴻

片帆千里賣花市 上下總坂君握中

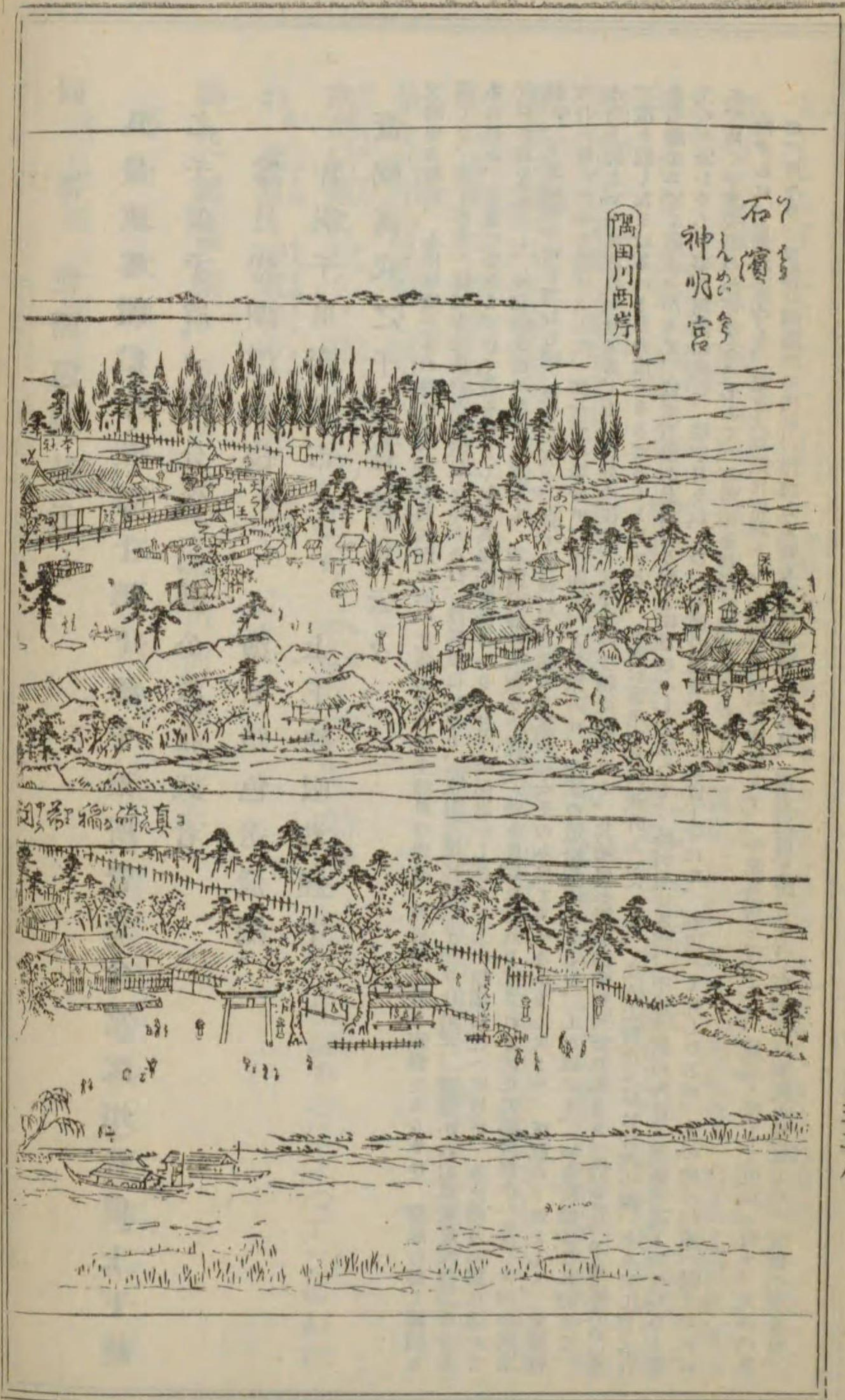
蓋祝寓武之千葉惟種也云々

又關東古戦録、小田原實記等の書に、千葉大助満胤の庶子北總馬加の城主陸奥守康胤、異母弟惟胤と家督をあらそひ、康胤打勝て總領を保てり。依て宿老の圓城寺左馬次郎惟胤をいざなひ、江戸城にいたり、太田道灌に庇蔭を頼みければ、道灌かれが高家にて微力なるをあらはれみ、石濱の砦をさづけて是を守らしむ。其後惟胤身まかり、其子次郎胤利しばらく上杉朝興に仕へけるが、また南方の爲に追れて江戸の城を退去し、後北條氏康の旗下に屬して、石濱近邊の所領を築き、跡を胤宗に譲れり。されど天正元年癸酉十一月、古河の御所義氏、下總兩宿の城を攻むる頃、胤宗討死す。依て其後は、石濱の千葉家に女子のみにて男子なかりしに、氏政の下知として、北條常陸介氏繁の三男を養子として、彼女子に妻合せ、次郎胤利と名乗らせ、千葉の遺跡相續なましむ。しかれども、いまだ幼少なればとて、木内上野といへる者に預けらる。上野討死の後は、其子宮内少輔支配ありて、其頃は石濱領四千貫文なりしなり。然るに、千葉成人の後、石濱を返したまはるべきむね度々まうさるゝといへども、木内が家老字月内藏介といへる者、主人上野ならびに宮内少輔、ともにしばしば高名勳功あげて敷ふべからず、依て石濱改易は有り難き事なるべしと云ひて、延引しける間、千葉次郎の内、須藤何某とかやいひし者主の所望むなしき事を無念に思ひ、彼字月をねらひ、石濱の總泉寺といふ會下寺にて、刺違へて死しけるが、この由小田原へ聞えければ、さだめて千葉次郎のわざなるべしとて、石濱領をば終に返されずとあり。

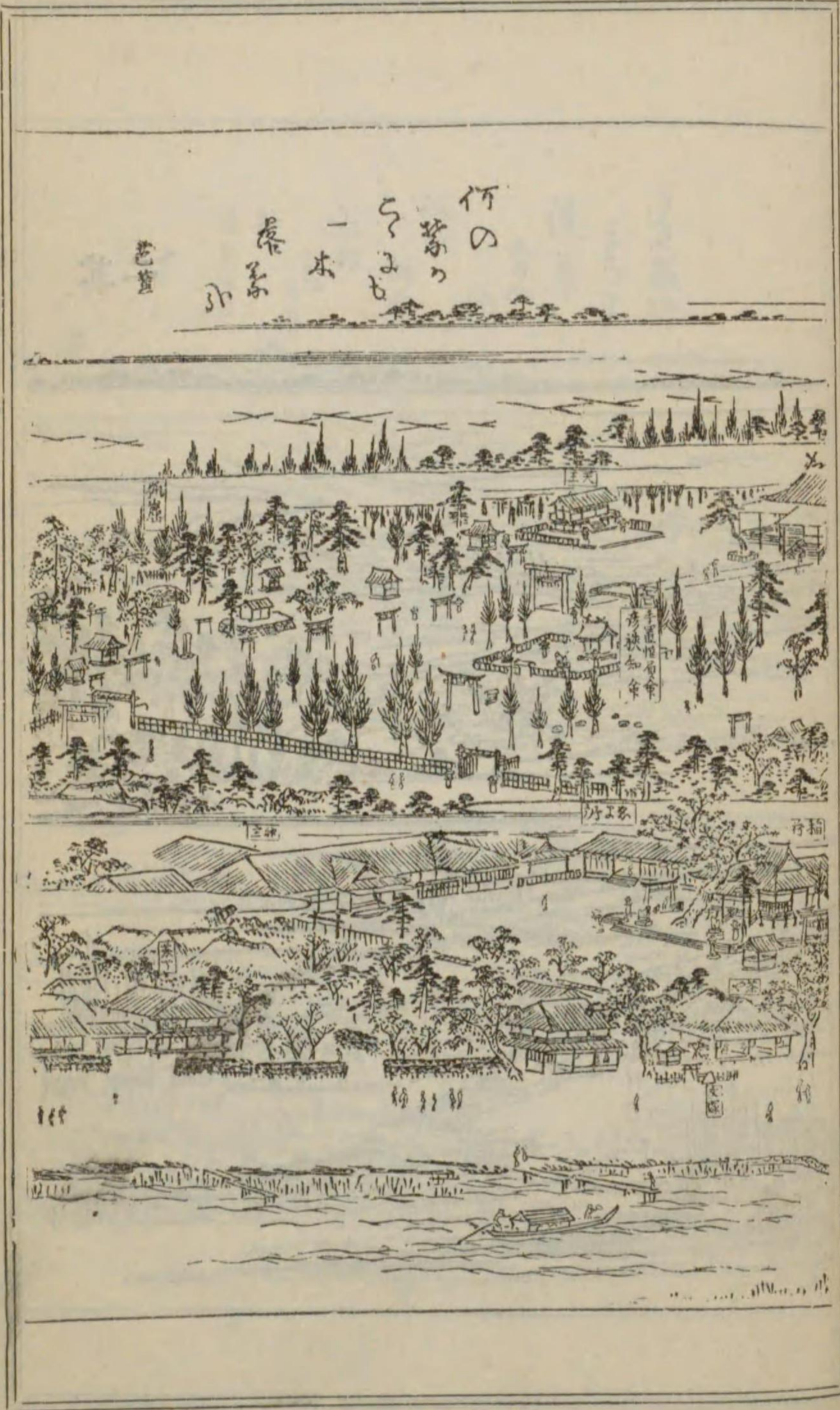
按ずるに、馬加陸奥守を、鎌倉大草紙に常縁とし、關東古戦録に康胤とす。千葉系譜を考ふるに、康胤入道して常縁と號す。大介惟胤の二男なり。又梅花無盡藏の注に、惟種とあるも、胤を書き誤れり。南方紀傳を證とすべし。惟胤は實胤の孫にして、守胤の子なり。

石濱
神明宮

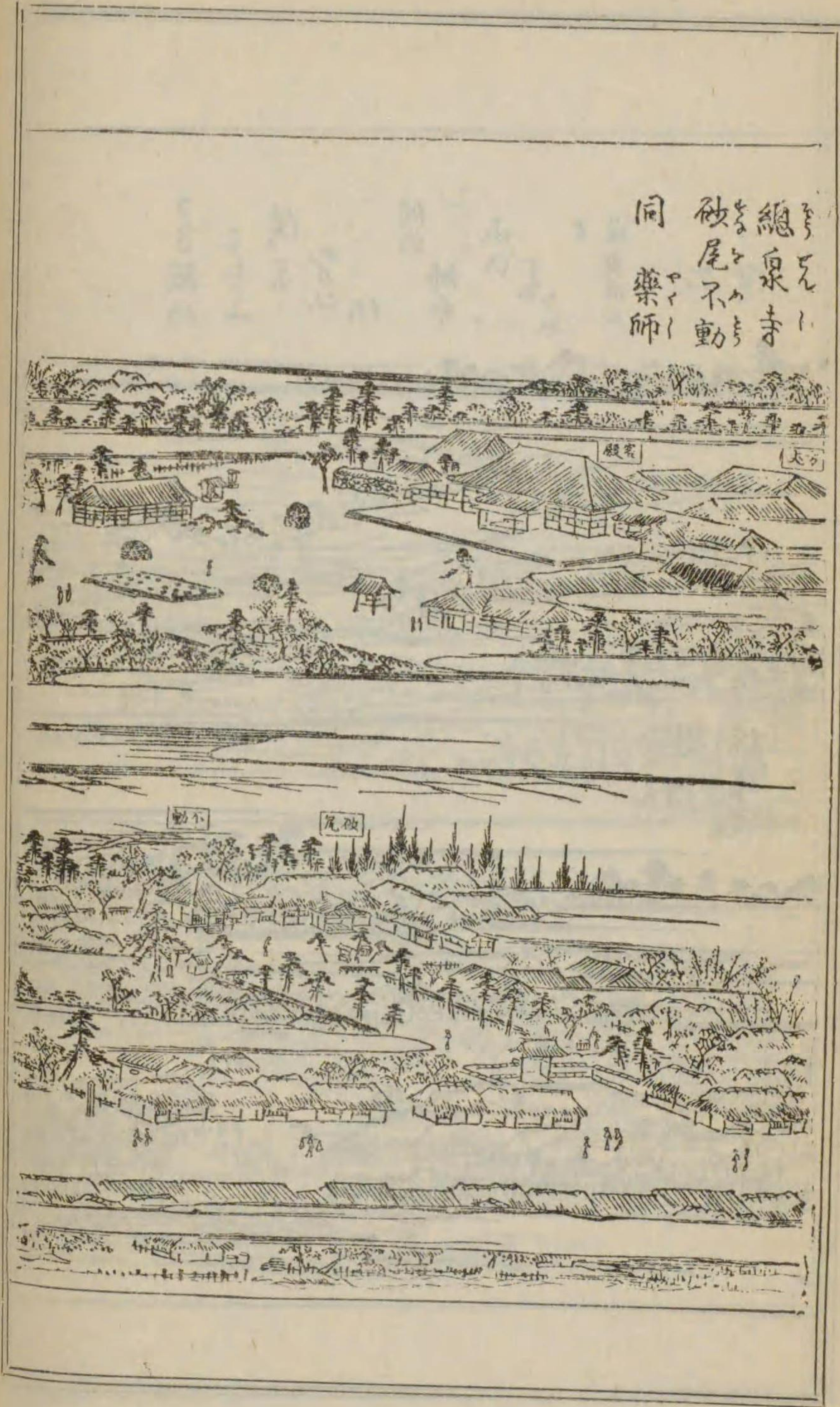
隅田川西岸



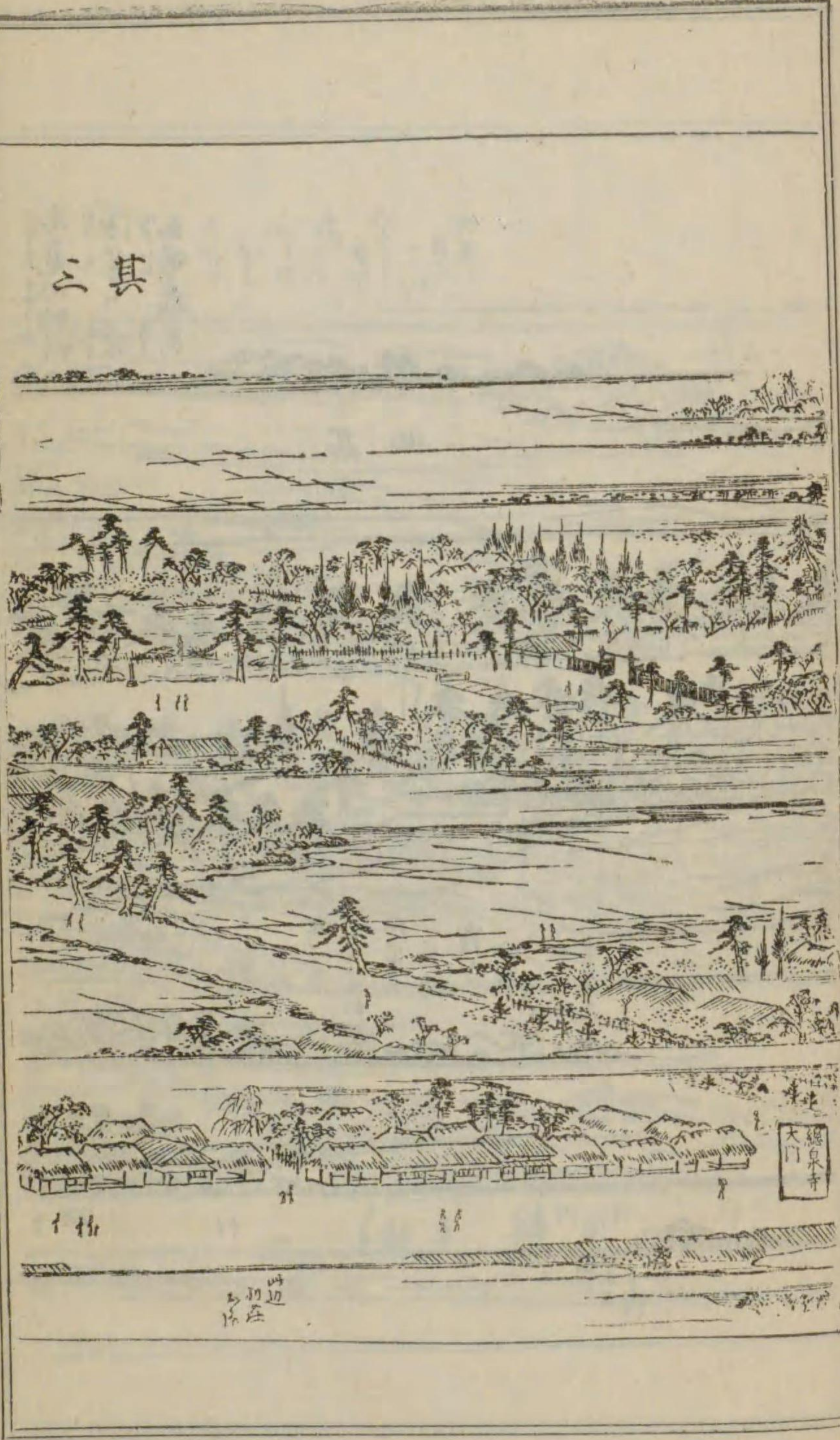
竹の
紫の
らよも
一本
春系
芭蕉

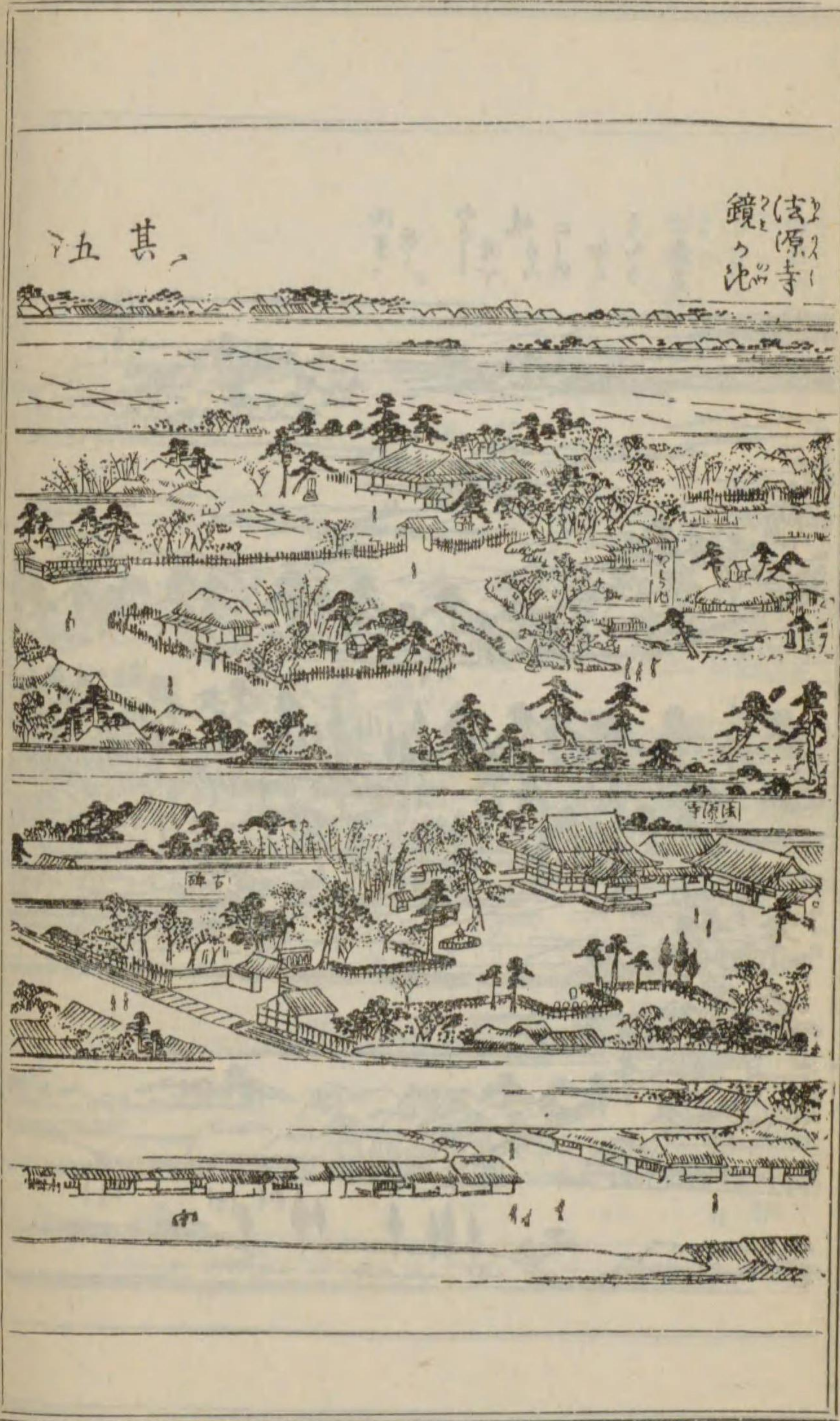


總泉寺
破尾不動
同藥師



其二





すべて實胤より惟胤まで 相つゞいて此城に居住し、文明に至りて、再び戦争におよびしならん。永祿二年小田原北條家の古文書に、江戸赤坂六箇村、おなじく新倉小机の上九子、葛西の上平井、下足立の淵江、伊興寺、信内野郷、大多窪、沼田、保木曾、三俣、大窪、以上千葉殿所領と云々。又按ずるに、此石濱の城は、天正に至り、千葉の一跡絶えたりしより後、廢せしなるべし。

橋場

今神明宮の邊より南の方今戸を限り、橋場と稱す。

舊名は石濱なり。

事跡合考にいはく、石濱の地今は汐入と唱ふると

云義經記に、治承四年庚子九月十一日、

東海に、同年十月二日朝太井隅田の兩河を渡らるる

頼朝公、隅田

河を越えて、下總國より武藏國へ赴き給ふ時、二三日の雨に、洪水岸を浸し、軍勢を渡し兼

たりければ、武衛江戶太郎重長に仰せて、浮橋を係しめんとす。重長あへて諾はず。依て千

葉介、胤葛西兵衛重兩人、江戶太郎を助けんとて、知行所今井、栗川、かめなし、うしまど

といふより、栗川、かめなし、うし 海人の釣舟を數多登せ、江戶太郎が知行所なりける石濱に、折

節西國船の著きたるを、數千艘集め、三日の中に浮橋を組み立てければ、左殿神妙なるよし仰

せられ、太井、隅田を打越えて、板橋に著き給ふとあり。隅田河、古へ海につくぎ、海村なりし

夫木抄

隅田河むかしはきかず今こそは身を浮橋のある世なりけれ 光俊

其言葉がきいたはく、此歌は康元元年鹿島の社にまうてけるに、角田川の渡をみれば、彼のわたり、今は浮橋をわたしたりければ、とあり。又、

梅花無盡藏詩注云

隅田在武藏下總兩國之間。路傍小塚有柳。道灌公爲攻下總千葉。構長橋三條云々。

按ずるに、源平盛衰記、および光俊鹿嶋紀行等の書に載するものは、假初にまうくる所の橋なるべし。源平盛衰記、および太平記等、其餘の書にも、橋場の名みえず。橋場の名もそらくは道灌下總の千葉家を攻むる頃より發るならん。南河原亭云々、隅田川の渡場より一丁ばかり川上に、むかしの橋の古木水底にのこりて、舟筏のゆきくじさはり侍るよし、されど其橋いづれの頃のものと云々。依て考ふれば、今のわたし場より一丁ばかり川上、神明宮の大門の通り、其舊跡なるべき歟。また里老傳へいふ、此地法源寺大門の通り、および今のわたし場より南の方、豊船所(フナパンシヨ)のあたり、共にむかしの橋場の舊跡なりといへり。然る時は、三所共に橋をかくるに似たり。これによつて考ふれば、梅花無盡藏に所謂長橋三條を構ふとある意に協へるならん。

朝日神明宮 橋場にあり。石濱神明とも、或人の説に、此地に神明宮ある故 或は俗に橋場神明とも號

く。祭神伊勢に同じく、内外兩皇太神宮を齋きまつる。社傳に云ふ、人皇四十五代聖武天皇の

御宇、神龜元年甲子九月十一日鎮座と、云々。

牛頭天王社 本社左の方にあり、橋場の鎮守にして、祭禮は毎歲六月十五日なり。世に汐入の押合祭とて、神與今戸橋をわたらせ

此故に押合祭といふよし、事蹟合考に見えたり。當社に古き神與一基あり、屋根の裡に、天正十五年丁亥四月山城住人高須美作拵之、又同棟札に、同年鈴木三郎冠者家平とあり。是は則ち當社神主の名にして、代々鈴木氏なり

天満宮 本社右の方にあり。神像は菅神の眞作にして、明和四年丁亥六月五日、高辻前大納言家長御勸請あ 當社は、建久、

正治の頃、繁昌の地なりしとぞ。其頃は太社にて、關東の諸民、伊勢に參宮せん事なりがた

き輩は、當社に詣で、祓を受けたるといへり。殊に千葉、宇都宮等の輩、尊信し、神田等を

寄附す。此地昔は奥州街道にして、文治の頃は、鎌倉右大將家も當社に參詣ありしとなり。

境内樹木多く、鬱蒼として上久たり。每歲六月晦日、名越祓を修行す。祭禮は九月十六日な

り。此日、社地において生薑を齋ぐ。故に俗問是を生姜祭と唱へたり。

眞先稻荷明神社 同所隅田河の流に臨む。祭神倉稻魂一座なり。社傳に云ふ、久代千葉介兼胤

の家に靈珠を傳ふ。此靈珠の加護にや、數度の戰場に先登の譽あり。同守胤の代に至り、此石

濱の城主たりしかば、城内の鎮守として、彼寶珠をもて稻荷に勸請し、眞先稻荷明神と號す

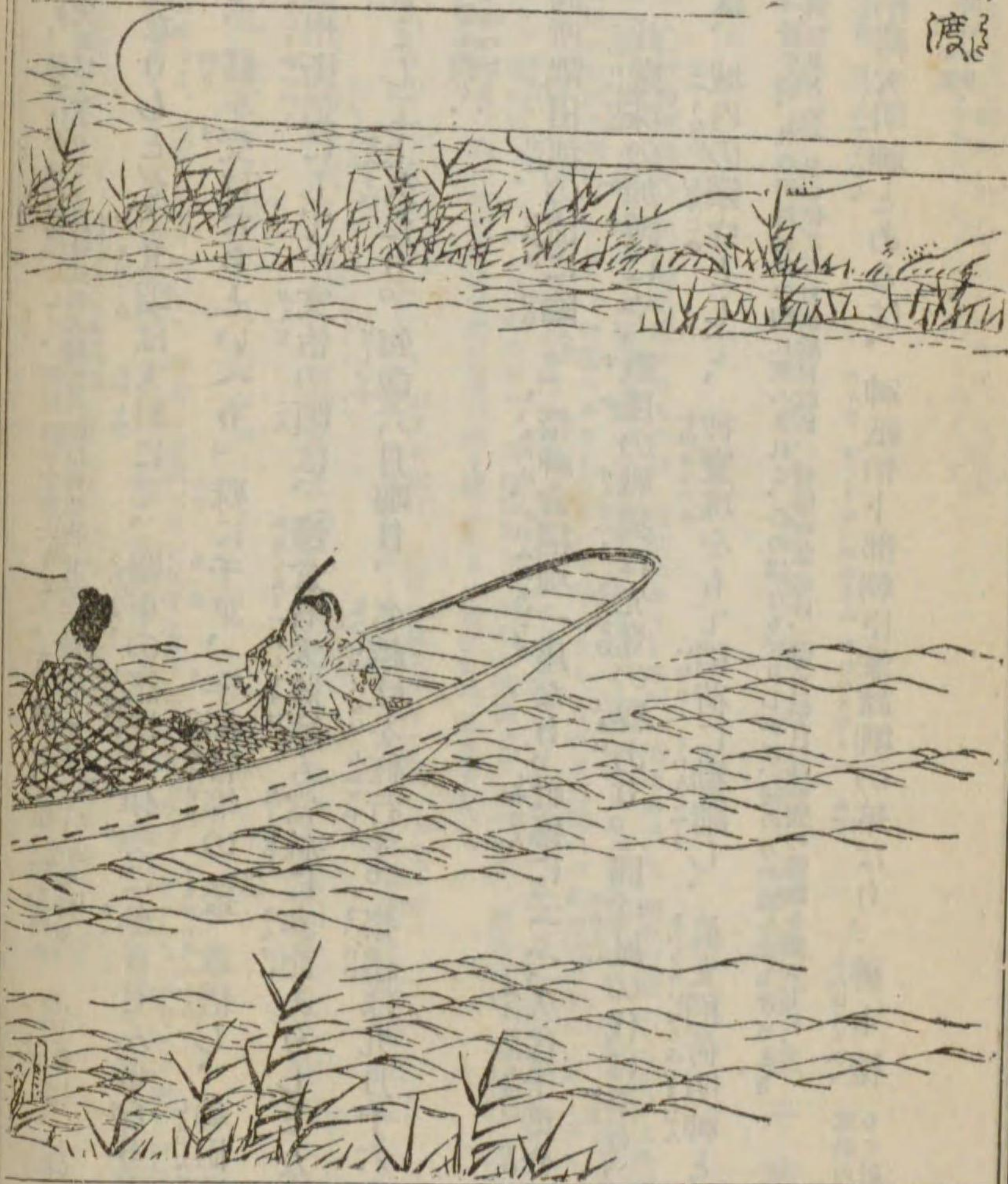
と、云々。往し年本社菅の頃、社の軒端神木の榎に交へられて、心の儘ならざりしかば、後の方の地を穿ちけるとき

本社の額に、眞崎稻荷大明神とあるは、神祇伯卜部朝臣兼雄卿の筆なり。神木榎 本社の前にあ

中間の處より、靈泉涌出す。病あるもの服飲してしるしを得るといへり。

角田河渡

名子
あや
とこ
穴ん
都鳥

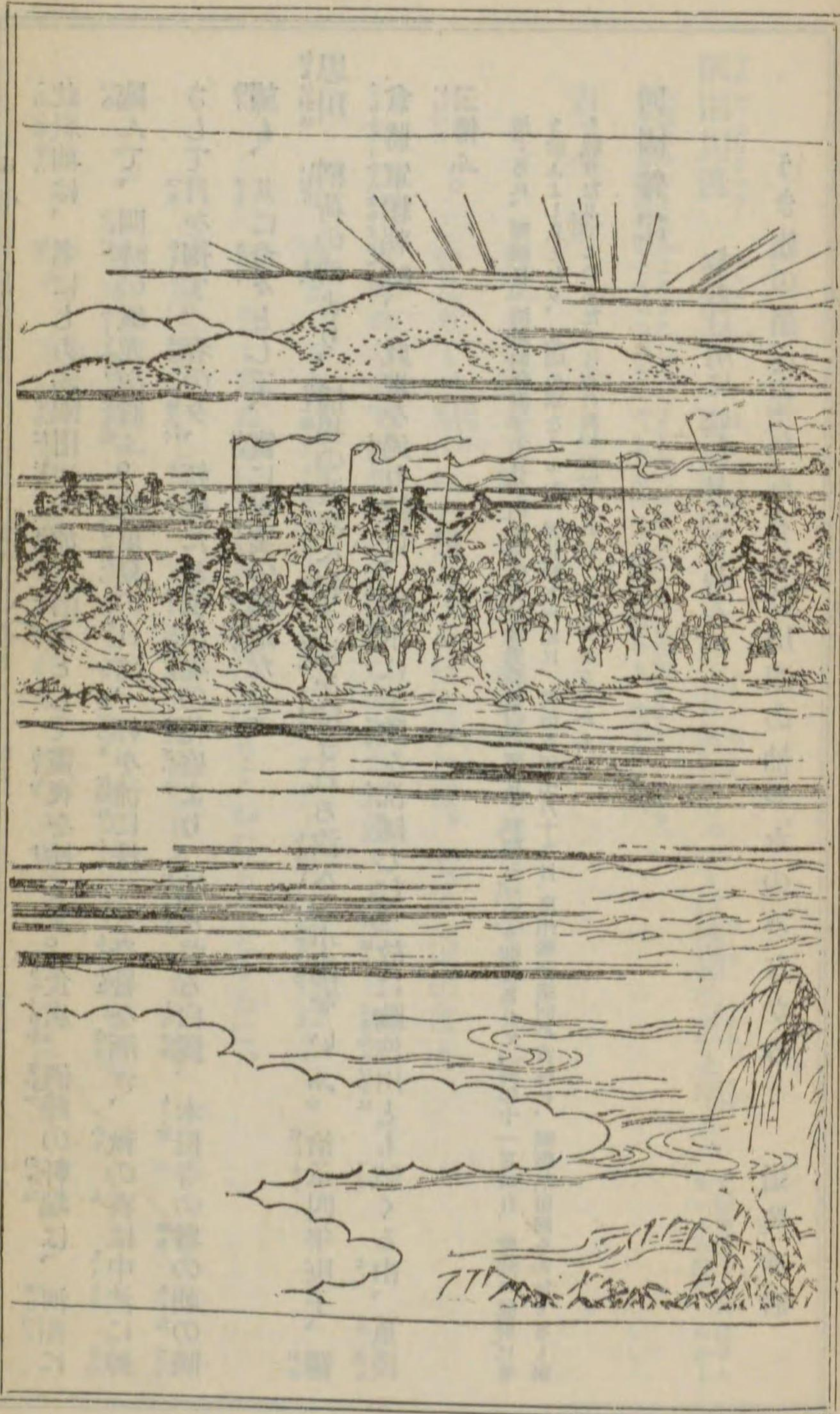


森
あや
とこ
穴ん
都鳥

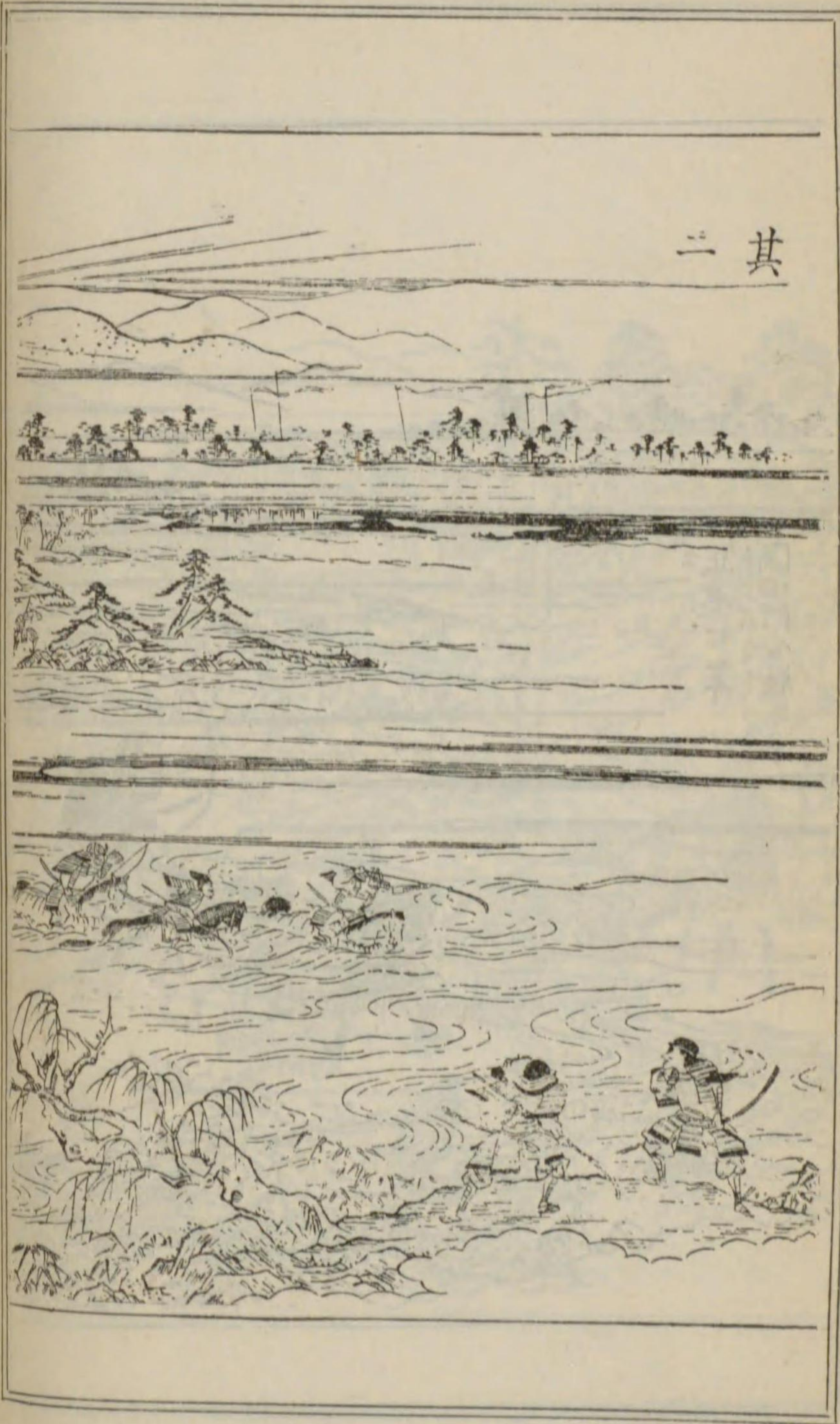
任原菜平







其二



此社前は、名にしあふ隅田河の流、溶々として晝夜を捨てず。食店、酒肆の軒端は、河面に臨んで、四時の風光を貯ふ。殊更夏の日、杯を流に洗つて炎暑を洒ぎ、秋の夜は中流に掉さして月を掬す。春の夕、妖艶たる須田堤の花盛より、皚々たる白髭、木母寺の雪の朝の眺望も、共に奇々として、實に遊宴の勝地なり。

思川 稻荷の前より、橋場の渡場へ行く道を横ぎれる汐入の小溝をいふ。治承四年庚子、鎌倉將軍頼朝卿、此地を過り給ひ、河水にて駒を洗はしむ。故に駒洗川とも號くる由、里民云傳ふ。

按ずるに、東鑑に、治承四年庚子十月廿七日、佐竹冠者秀義追討の爲に、頼朝ミヅから進發ありて、同年十一月四日、常陸の國府に著き給ふよし見えたり。其頃の事ならんか。又北條九代記に、文治五年七月十九日、奥州泰衡追討の首途に、頼朝隅田河をわたらるゝ事を載せたり。このあたり往古の奥州海道なれば、さもあらんかし。

回國雜記

おもひ川にいたりてよめる

うき旅の道にながるる思ひ川涙の袖や水のみなかみ

道興准后

かくて隅田川のほとりにいたると、云々。

隅田川渡

橋場より、須田堤のもとへの古き渡なり。今は橋場の渡と唱ふ。元祿開板の江戸鹿子といへる草紙に、むかし

の渡は今のところよりすこし川上なりと、所のふるき人は物語するなりとあり。むかしは須田の渡ともいひけるにや。夫木抄に、經兼の詠あり。次にしるす。

古今集

むさしの國と下總の國とのなかにあるすみだ川のほとりにいたりて、京のいと戀しうおほえければ、しばし川のほとりにおりて、思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなと、おもひわびてながめをるに、わたし守、はや舟のれ、日も暮ぬといひければ、舟にのりてわたらむとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なくしもあらず。さるをりに、白き鳥の、はしと足とあかき、川のほとりにあそびけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見しらず、わた

し守に、是は何鳥ぞと問ひければ、是なむ都鳥といひける
をきよてよめる。

名にしおはばいざ事とはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと

吾妻の道の記

角田河ちかしときよて見にゆく。今も船にのれといふは、

このわたし守のくせにやあらん。

これぞこのあづまち遠く思ひこしすみだ河原の渡なりける

とはでただそれとたのまむすみだ川むれるる鳥はあらぬ名もこそ

かへりくる道に、あさくさの観音とて、國ゆすりてもてな

す佛おはす、云々。

夫木抄

夕霧に須田のわたりは見えねども舟人よばふ聲聞ゆなり

經 兼

石濱古戰場

橋場の地、すべて石濱といへるに似たり。新安手簡に、白石先生石濱の考あり。ここに略す。太平記に云ふ、正

平七年壬辰閏二月、北朝の觀應三年にして、文和と改元の年なり。故新田義貞の次男左兵衛佐義興、三男少將義宗、從父兄

弟左衛門義治、義兵を起し、其勢十萬余騎にて、武藏國へ打越えたり。これに依て、將軍尊

氏も鎌倉を進發し、敵を道に待ちて、戦を決せんと、同十六日、僅に五百餘騎にて、武藏國

へ發向あり。追々に馳集る勢、すべて八萬餘騎なりしかば、同廿日、武藏野の小手指原へ打

て出で、新田、足利の兩勢二十萬騎、入亂れて大に戦ひけるに、足利方の先陣、急に敗れて

引退きければ、後陣進む事能はず、大に敗走す。義宗自ら諸軍を率ゐて、大に呼つて云く、

天下の爲には朝敵なり、我が爲には父の讐なり、此戦にあたつて尊氏の首を見ずんば、何

の時をか期すべきとて、只二引兩の大旗の引に付きて、小手指原より石濱迄、坂東道既に

四十六里を、片時が間に追付きたり。此時將軍は石濱を打渡り、虎口を遁る。田川とあり。猶將

軍の兵士残り止つて、先途を支へたる間に、日も既に酉の下りになりて、河の淵瀬も見えわ

かざれば、義宗は續てわたすにもあらず、又後よりつどく味方もなければ、やすからぬもの

かなと牙をかんで、本陣へ引歸さるよとあり。以上太平記の意を採る。

砂尾不動院 橋場寺と號す。渡場の少し南の方、道より右にあり。天台宗にして、淺草寺に

屬せり。往古は法相宗なりしが、住持教圓師の代、長寛癸未歲より、宗風を轉ずといふ。寶龜四年癸丑、良辨僧都の上足寂昇上人、當寺を開

基し、本尊に不動明王の像を安ず。

縁起に曰く、本尊不動明王は、良辨僧都、相州大山寺にありし頃、彫刻ありし三體の一にし

て、彼寺の本尊と同木同作なり。僧都一時、上足寂昇師に告げて云く、三體のうち、一體

は此山にとどめ、一體はみづから持念す、残る所の一體は汝に附屬すべし、何方にても有縁

の地に安ずべしとなり。依て僧都化寂の後、寶龜四年歲八十、寂昇上人、上總の方へ赴く道の次

適此地に至り、靈告を得て、有縁の地たる事をしり、こゝに安じ、則ち村老野人にかたら

ひて、草堂を營み、砂尾不動尊と號す、云々。砂尾藥師如來、寺内にあり。本尊は、惠心僧

都の作なり。南亭茶話に云く、或説に、此處に往古砂尾修理大夫といふ人ありて、太田道灌と合戦す。これを石瀆の職といふ。則ち砂尾氏建立せし寺あり。天台宗にて、砂尾山不動院と云ふと云々。されど當寺傳記に、修理大夫の事を載せず、また道灌と戦ふこと諸書に見あたらず。なほ考ふべし。

妙龜山總泉寺 曹洞派の禪林にして、江戸三箇寺の一員たり。開山は靈叟宗俊和尚と號す。

當寺は千葉家の香花院なり。永祿二年小田原北條家の分限帳に、武州石瀆の會下寺とあるは、當寺の事を云ふなるべし。

千葉氏墓 境内卯塔のうちにあり。長さ三尺ばかりの青石に、梵字のみを鐫めて、年號法名等を注せず。當寺に大檀那千葉介守胤の靈牌と稱するものあり。總泉寺殿長山昌燾大居士とあり。寺僧云く、守胤は弘治三年丁巳十一月八日卒去すと。されど守胤卒去の時世すこぶるたがひあるに似たり。又江戸惣應子に、千葉介常胤の墓碑には、春淨院殿貞心居士、同千葉介貞胤の墓碑には、良心自風流とあるよし記せども、今所在をしらず、なほ他日考ふべきのみ。

宇津宮彌三郎入道墓 同卯塔のうちにあり。青石の碑二枚、其一は正安元年十一月廿一日、其一は徳治二年丁未二月七日とあり。

按ずるに、當寺にいひつたふる所の宇津宮彌三郎は、賴綱入道實信坊が事なるべし。又の名を蓮生と唱ふ。源空上人の法を聽いて後、善惠上人に就いて出家す。正元元年己未十一月京師に寂し、遺言により、墳を師の石塔の傍に設くるよし、西山上人の傳に見えたり。其地は則ち京師西山三鉢寺の東の坂なり。依て考ふるに、當寺にある所のものは、むかし其支族など此邊にありて、寫し建つる所の墓碑ならん歟。されど正安、徳治、いづれも正元以後る事四十有餘年なり、最不審少なからず。

抑當寺は、正法眼藏の妙理をしめし、實相無相の心印をひらく、向上の一路には、著相實

有の草を拂ひ 言下の一喝には、異學執解の塵を飛す、公案の床の前には、一千七百の則を

重ねて、以心傳心を傳へ、坐禪の衾のもとには、朝三暮四の助を得て、文字言句の話頭を

離れたり。

淺茅原 總泉寺大門のあたりをいふ。

回國雜記

淺茅がはらといへる所にて

人めさへかれて淋しき夕まぐれ淺茅がはらの霜をわけつよ

道興准后

妙龜塚

同所にあり、梅若丸の母公妙龜尼の墳墓なりといひつた。小高きところに草堂を建てて、妙龜大明神と稱せり。

古墳一基

妙龜堂の下にあり、青き一片の石にして、長二尺あまり、碑面蓮花の上圓相の中に、法阿と云ふ名をちりばめ、下に弘安十一年正月廿二日と彫付けてあり。(此年四月正應と改元あり)圓光大師行狀贊卷第四十二に云く、嘉祿三年六月廿二日

(此年十二月安貞と改元あり)山門の衆徒奏聞を経て、大谷源空の墳墓を破却せんとす、其夜法蓮坊、覺阿坊、潛に上人の櫃を掘出し、運出家の身なりしといへども、法衣に兵杖を帶し、是を供奉し、廣隆寺の來迎坊圓空が許にうつすよしを記せり。按ずるに、この法阿は、千葉六郎太夫胤頼が事なるべし。胤頼は常胤の子にして、國府六郎胤通の弟なり、この古墳恐らくはこの法阿の墓碑ならんか。

鏡ヶ池

同所西南の方にあり。傳へ云ふ、妙龜尼、梅若丸の跡をしたひ、京よりさまよひ來りしが、梅若丸身まかりし事を聞きて、此池に身を投げてむなしくなりぬとぞ。元祿開板の江戸鹿子といへる草紙に、むかしは此池を泪の池(ナカダノイケ)と名づけしとあり。傍に鏡池庵と號くる小庵あり。辨財天を安ず。是も妙龜尼をまつる所なりといへり。

袈裟懸松

池の傍にあり、一名を衣かけ松ともいへり。妙龜尼この松の枝に衣をかき置きてむなしくなりしといへり。舊樹枯れて今は若木を栽えたり。

采女塚

同所にあり、寛文の頃吉原町にうねめといへる遊女はべりしが、故ありて夜にまぎれてこゝに來り、池中に身をなげむなしくなりぬ。夜明けのち、あたりの人こゝに來りけるに、かたはらの松に小袖をかけて、一首の歌をそへたり。

名をそれとしらずともしれ猿澤のあとをかどみか池にしづめば

かくありしにより、采女なる事をしりければ、人あはれみて塚をきづきけるといへり。

東野先生之墓

同所橋場の通り、福壽院といへる禪林にあり。先生は下野の人、諱は煥圖、東壁字は仁右衛門と稱す。安藤は養家の姓にして、本姓は奈須氏なり。徂徠先生に就いて大に古文を誦し、共に復古の學を唱ふ。墓碑の銘は、南郭服夫子述ぶる所なり。其

文ここに略す。

歸命山法源寺

無量壽院と號す。淨業の古刹にして、總泉寺の南に隣る。寶龜元年庚戌の春、

智海法印、

始めて此地に大日堂を建立す。其後延曆三年甲子の秋、村里の人民、力を合せて一

字の梵刹とし、

砂尾石濱の道場と號く。開山大僧都、智海法印は、大同元年丙戌三月十四日化寂、二世權大僧都了海

十五日歸寂す。

各墳墓あり。

隆性院從二位藤原朝臣四辻有理卿墓碑

當寺境内にあり。再校江戸砂子に、延曆八乙巳天六月二十七日としるせり。また南向亭云く、青石の碑あり。漸くみるに四辻家の姓名、三人の官名實名あれども、たしかにれれず、其來由もまたしれが

たとと云々。寺傳もともにつまびらかにならず。

按ずるに、知譜拙記に、西園寺太政大臣公經卿の四男、四辻權大納言正二位實藤卿より十五世の孫、權大納言正二位公理、延寶五年丁

巳六月二十七日薨ず、六十八とあり。實藤卿は安貞より永仁の間の人にして、四辻家の祖なり。延暦とは時世大にたがへり。恐らくは從二位は正二位、有理は公理、延暦は延寶、八年は五年、乙巳は丁巳の誤なるべき歟。薨去の月日附合せり。されど文字剝缺して讀むべからず。なほ後の考をまつのみ。

齋藤別當實盛墓 同所にあり。石塔は僧形念珠を持したる像を雕み、裏に藤原院前左金吾從五位德山覺道眞阿大居士壽永二癸卯助信利是を建立するよしを記せり。法譽上人は實盛の氏族なるよし、南向亭茶話にみえたり。法名は其頃新に命じたるにぞ。實盛は壽永二年五月加州藤原に戦死す。

鎌倉權大夫景道石塔 同所にあり。碑面向阿彌陀佛涅槃延久二庚戌年十月二十二日とありて、五輪の石塔婆なり。法名および良兼四代の孫、左衛門尉致經の二男、村岡小五郎忠通の子なり。其餘當寺歴代住僧の石塔、また仁壽、昌泰、正曆、壽永、康元、文永、弘安、正安、嘉元、正和、文應、正慶、文正等の年號を刻せし古塔、いづれも那塔の内に存せり。されどいかなる故にか、近年散失して多からず。

當寺は、天台宗の古跡にして、保元年間、中興して保元寺と號けしが、遙の後、大に荒廢せり。明蓮社聰譽上人西仰和尚の時より、台宗を改めて、淨家に轉ず。其時より、文字も法源にあらため、寺院再興ありしと云ふ。當寺に、中古用ひたりとて、古き木印を藏す、今猶傳へてあり、その文字保元寺りばめ、裏に康平二年武州保元寺とある古墳あり、證とすべし。

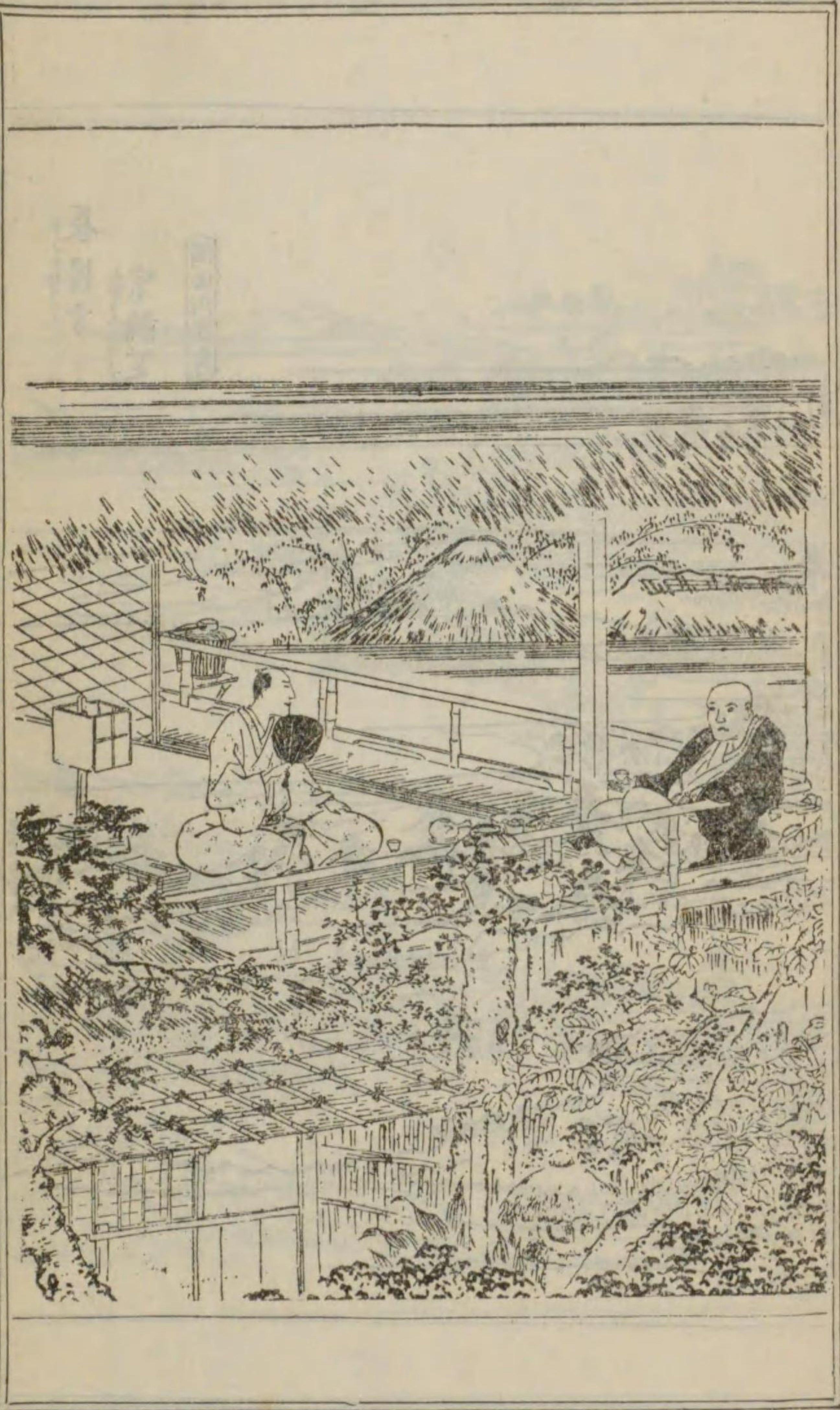
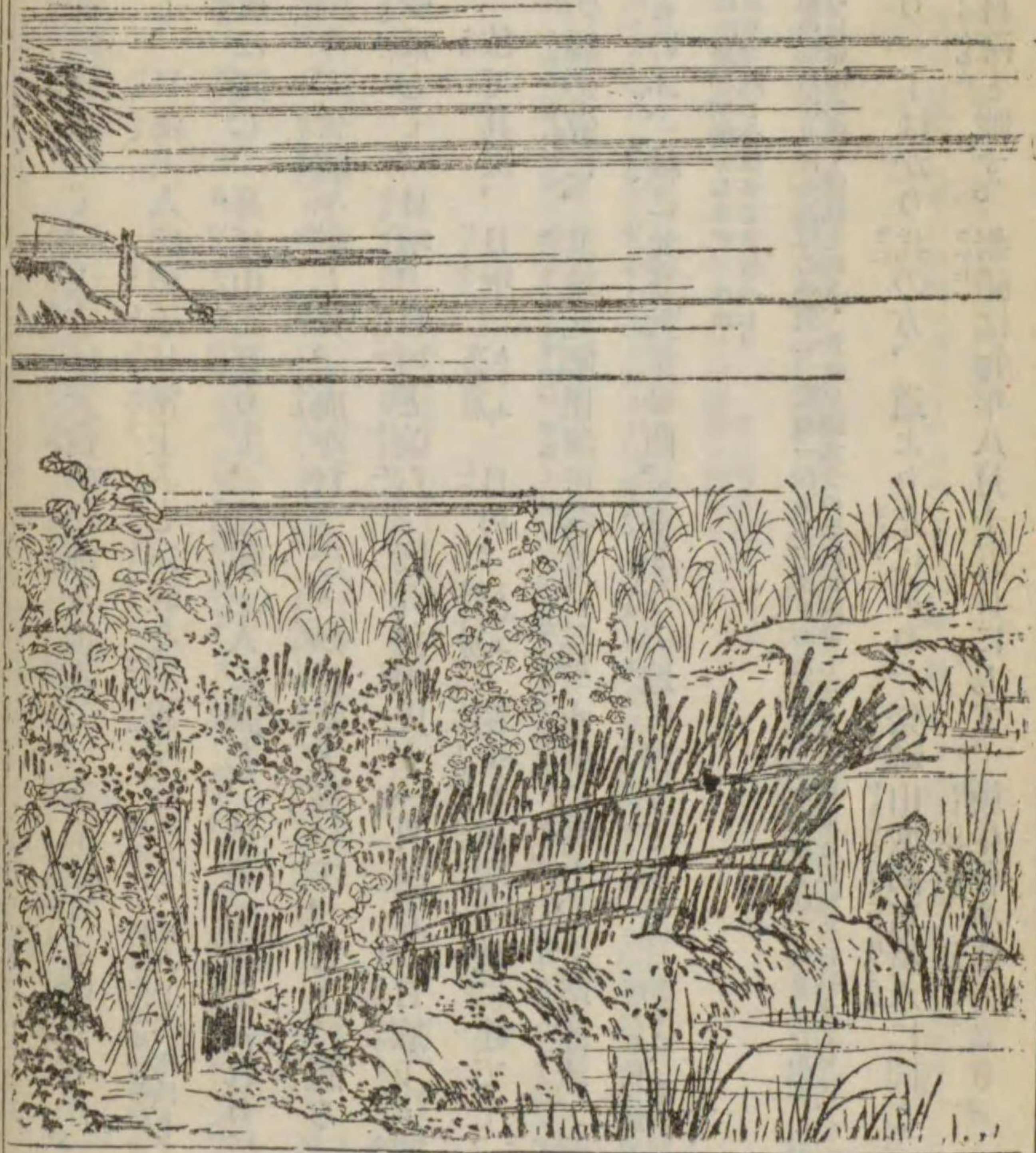
深榮山長昌寺 法源寺の南に隣る。當寺は御府内日蓮宗の古跡にして、延山に屬せり。開山

日寂上人は、始め淺草寺の住職にて、上古は天台の法流を汲んで、寂海法印と號せしが、弘安二年己卯、此所に於て、日蓮上人の弟子日常上人と宗義を討論す。日常は下總國中山妙法華經寺の開弘安五年壬午なりとぞ。終に日蓮の宗風に歸し、身延山に登りて、宗祖上人に謁し、弟子の禮を執れり。名を日寂と改め後淺草に歸り、金龍を辭して、庵をむすび、妙昌寺と號けて、ことに隱る。從ふ所の兩僧も又ともに受戒して、日増、日可と改む。同九年丙戌十一月一日、日寂上人歸寂す。日寂上人の墳墓境内にあり、依て其後、日増、本覺房、日可、河内房、精舎を橋場の地に建てて、長昌寺と號く。當寺新鑄の鐘の銘に、其地元隅田河に接す、偶水難に罹り、堂塔漂流、鐘亦沈没す、其所を鐘ヶ淵といふ、終に元亨元年辛酉、寺を今の地に移すとあり。按ずるに、鐘ヶ淵の院の鐘の銘にもしかありて、いづれか是なる事をしらず。なほ七卷目鐘ヶ淵の條下につまびらかにあり、照し合はせて見るべし。

宗論芝 本堂のまへにあり、扇の形に作りたる芝生の中央に、松樹一株あり。またかたはらに一の標石を建てたり。むかし宗論芝 寂海法印富木(トキ)の日常庵に就て宗教を叩き、竟に日蓮大士の弘法に歸せし證を永世に示さんために残すといふ。

今戸八幡宮 今戸橋より一丁ばかり北の方、道より左にあり。祭神山城國石清水に同じ。別當は天台宗にして、松林院と號す。祭禮は毎年八月十五日にして、放生會を修行せり。

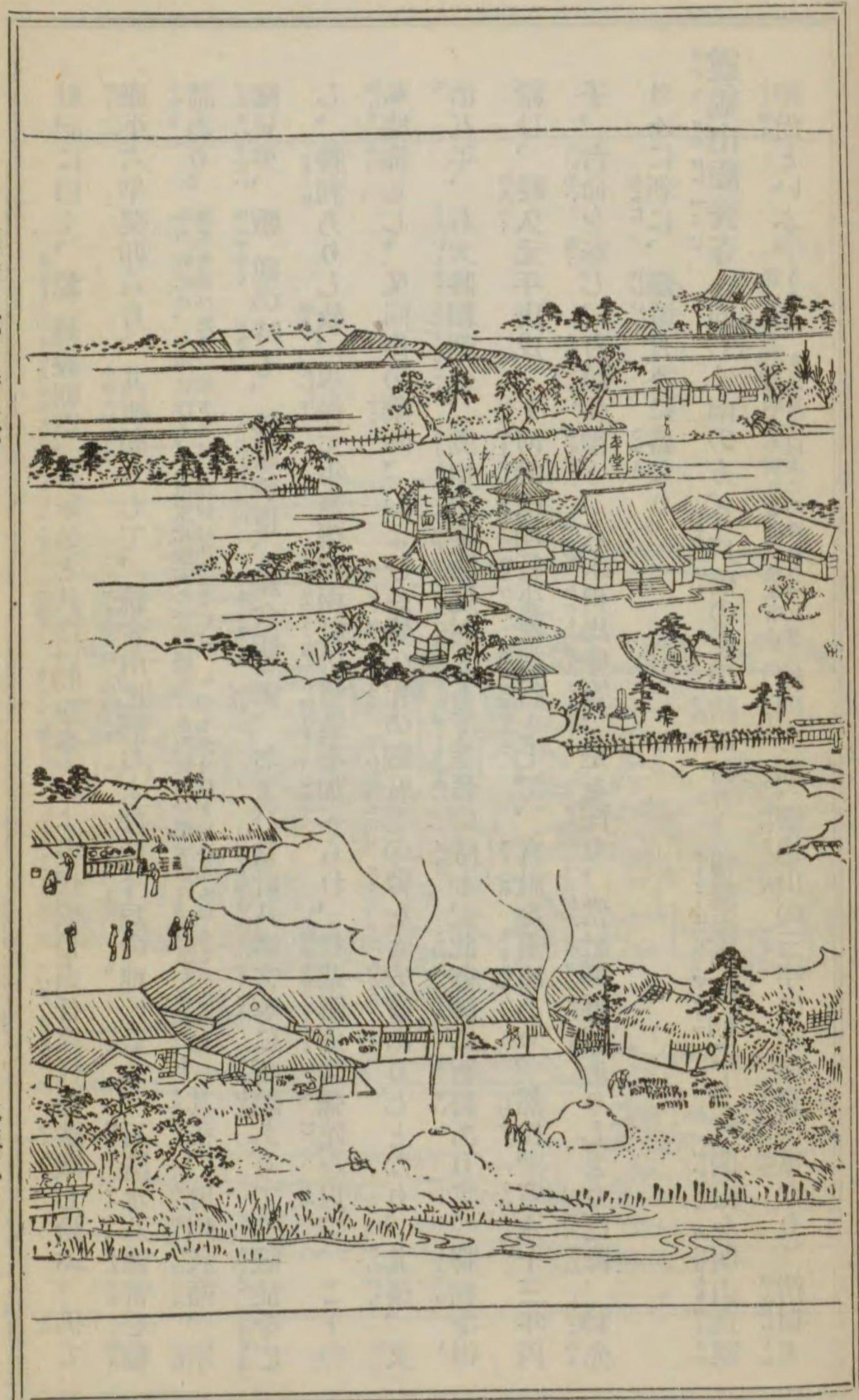
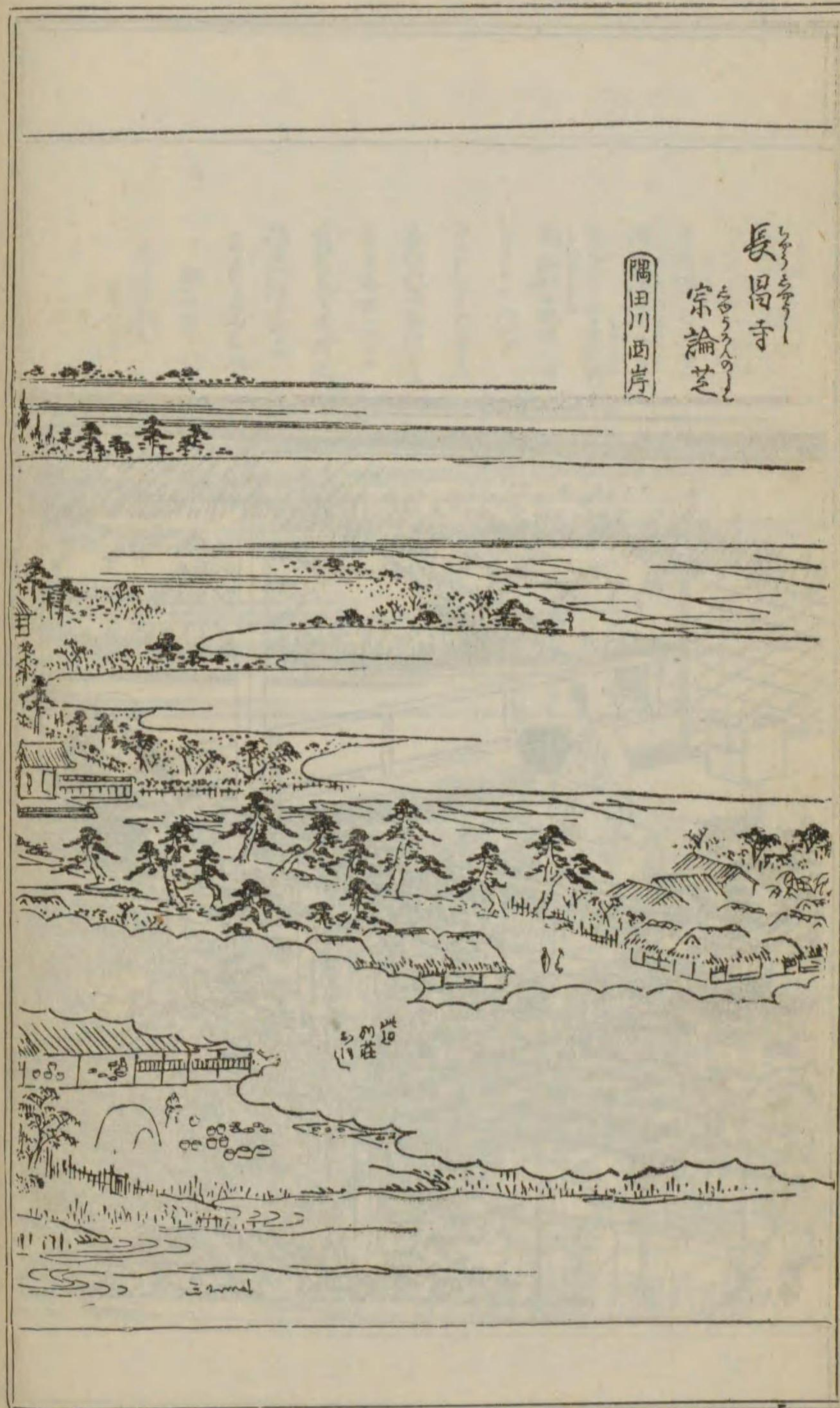
水鷄ハ橋場いひまの
 のくつくつ乃なひ佃地ひえんち
 を佳境みやまとせり
 源氏物語げんじものがたりも
 のしのし「いづれまはれの
 花紅野はなべにのさうり
 ありよりた
 とてんとてんとてん
 ありれるあしとも
 りまもあしとも
 さいのころたつた
 だのたつた
 さいくさいくとあつた
 せんせんの
 まつた
 まつた



長昌寺

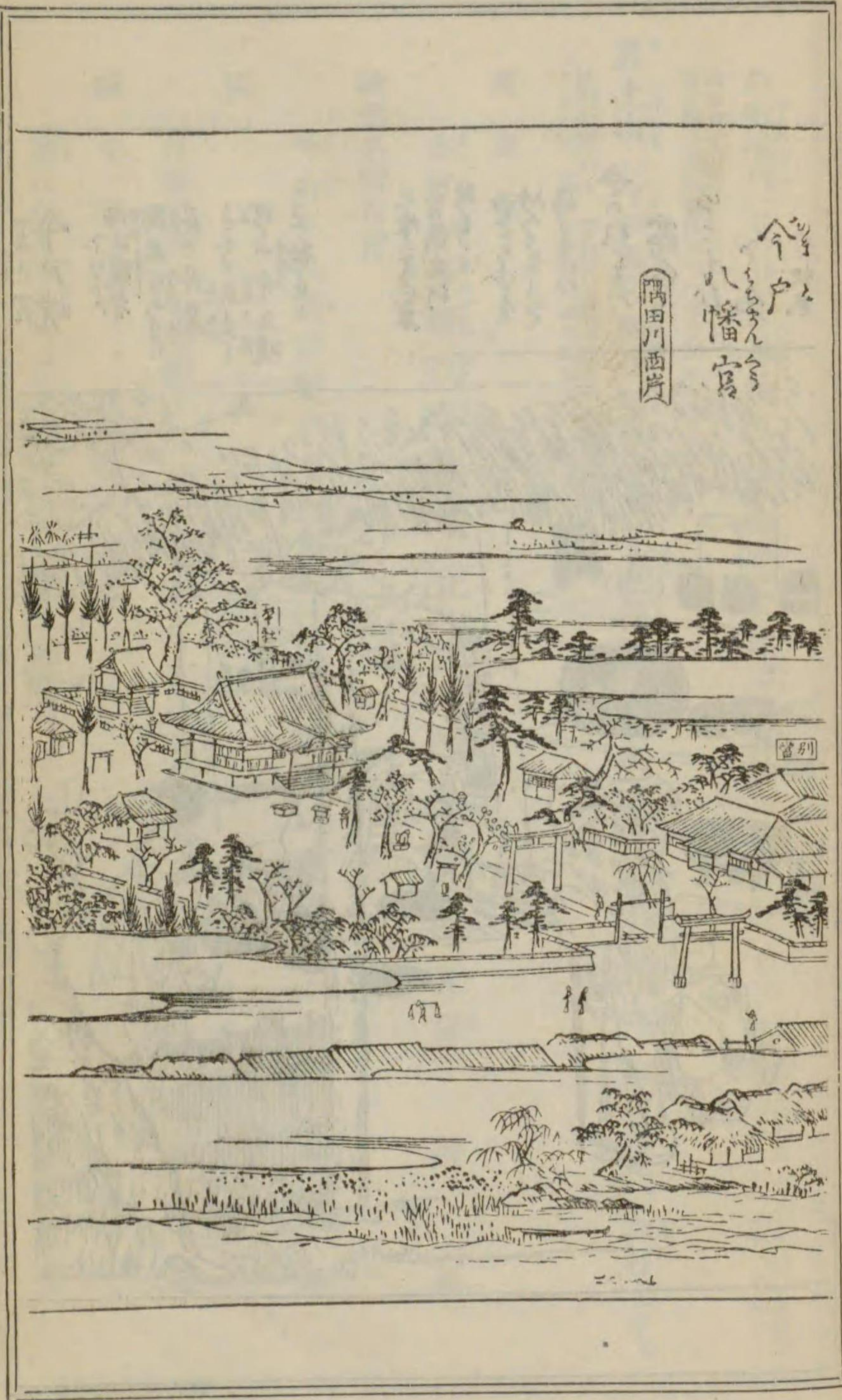
宗論芝

隅田川西岸



社記に曰く、源頼義朝臣、義家公と共に、勅を奉じて、奥州安倍貞任宗任を誅戮し給ふ。仍て
 康平六年癸卯八月、其祈願として、鎌倉由比郷および此今戸の地に至り、石清水八幡宮を勸
 請あり。今戸社記に、今津に作る。小田原北條家の分限帳に、木内宮内少輔所領に、石濱今津と云ふ。其後、奥州武衡、宗
 衡兄弟、叛逆の時も、義家朝臣、鎌倉鶴ヶ岡、および當社八幡宮等に祈願ありて、賊徒を亡
 し、勝利ありし故、永保元年辛酉、兩社の修造を加へられ、行基彫造の彌陀を以て、ことの
 本地佛とし、又同作の薬師、および慈覺の作の觀音等の像をも安置ありしとなり。其後、文
 治五年、右大將頼朝公、奥州の泰衡追討として進發の時も、此御神に祈誓ありて、勝利を得
 給ひ、建久元年庚戌、下河邊庄司行平を奉行として、宮社を重建あり。然に、寛永十三年丙
 子、台命を奉じ、舟越伊豫守、八木但馬守等、是を司り、當社御再興ありしより已降、神光
 日々に新に、靈威月々に盛なり。

靈龜山慶養寺 同じく南の方、今戸橋の北の詰にあり。曹洞派の禪刹にして、開山を明山良察
 和尚といふ。昔は元鳥越西福寺の隣にあり、後本所に 總門の額、靈龜山の三字は、願齋の筆なり。辨財天





の社境内にあり。本尊は、弘法大師唐より携來の靈像なりといへり。

當寺元鳥越の地にありし時、伊丹左京、舟川采女といへる兩人の壯士、

故ありて討果したることあり。すなはち當寺什物の藻屑物語といへる草紙に詳なり。

眞土山

今戸橋の南の詰にあり。また待乳に作り、或は信土に作る。萬葉集に、亦打とす。

沙門契沖いふ、亦打山と書きてまつち山とよむは、多宇の反なればなりと云ふ。

萬葉集

亦打山暮越行而廬前乃角太河原爾獨可毛將宿 辨基

建保名所百首

今宵また誰が宿からん庵崎の隅田河原の秋の月かけ 順徳院

同

月影のさすや庵崎すみだ河越えてまつちや山のかひより 家隆

新千載

誰にかもやどりはとはむまつち山夕越え行けばあふ人もなし 定實

えんがほ
山谷 咄

俗に云ふところなり
と云ふ

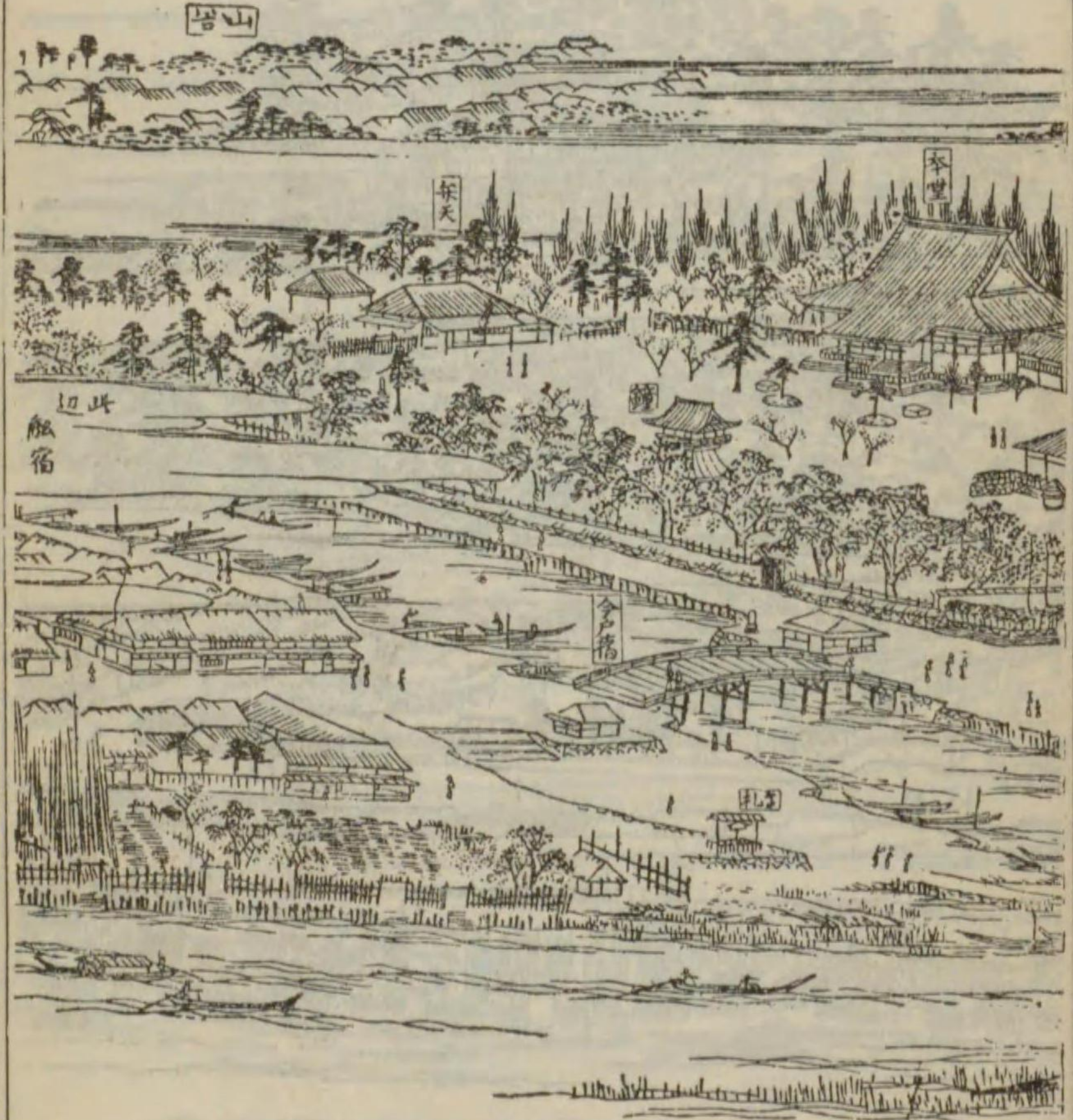
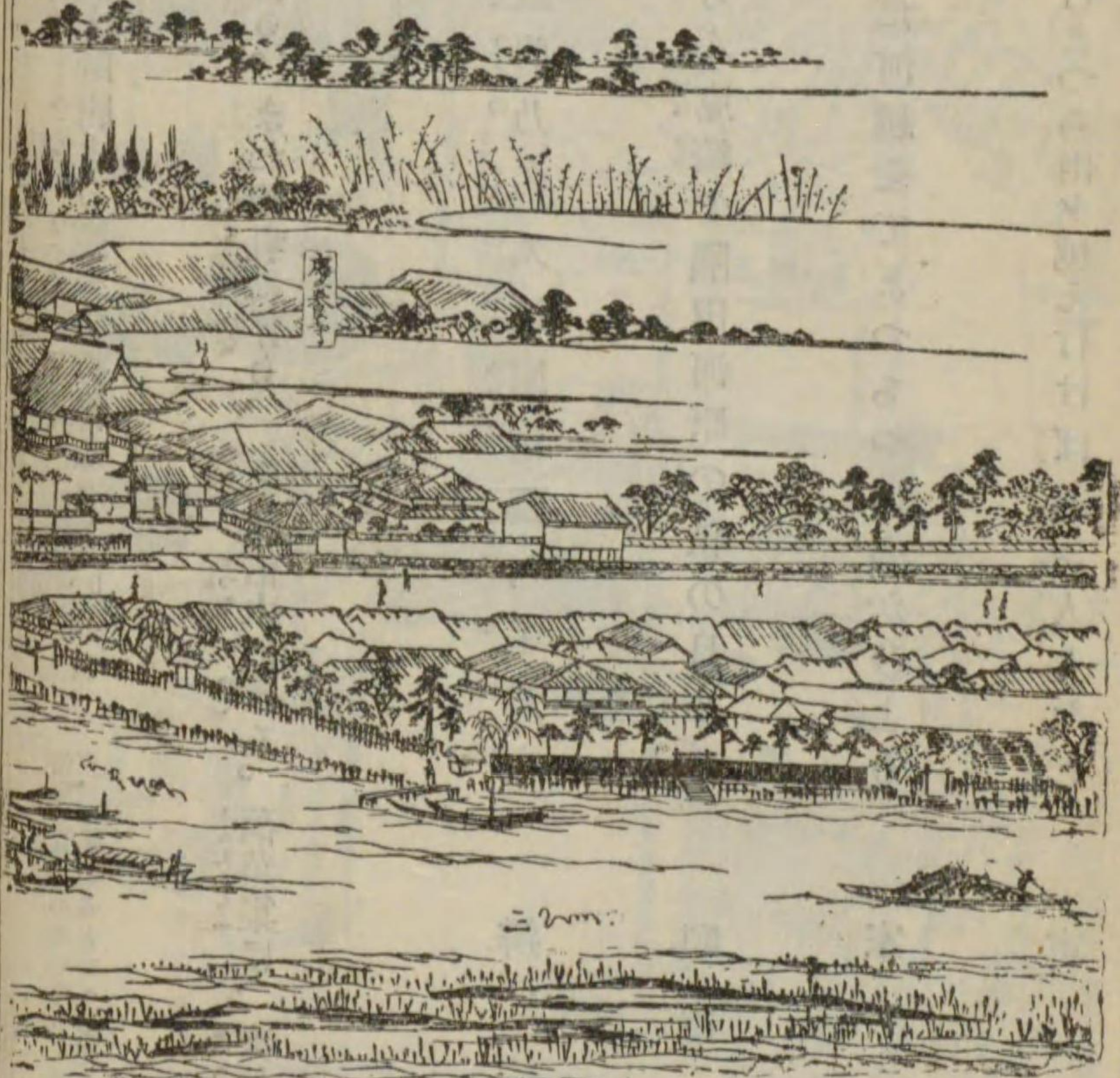
今戸橋

慶養寺

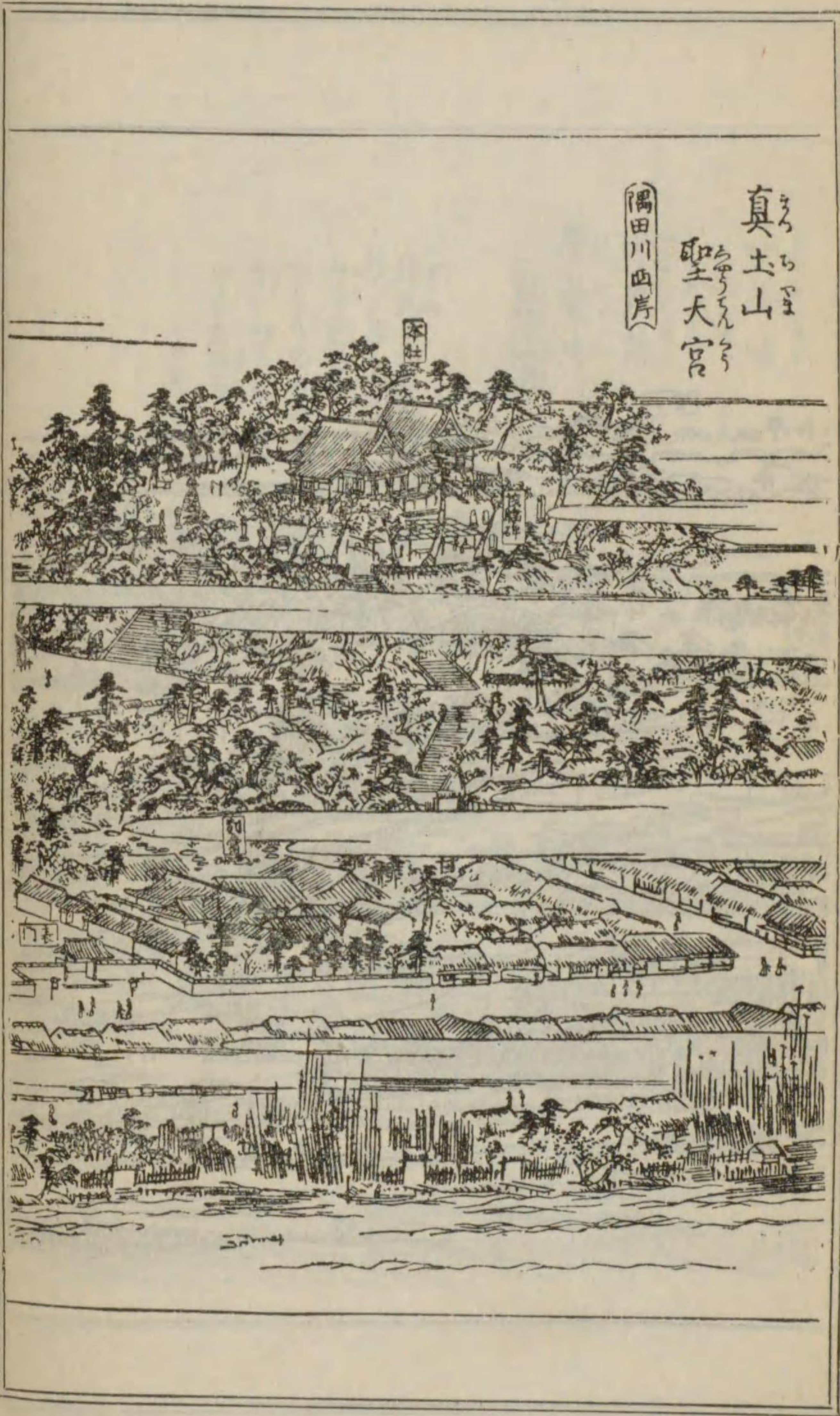
隅川西岸

待乳あつんと。指
のりらむ今戸橋
おのの相傘片
あつとの夕時雨
君とりのあつた
しりの細布

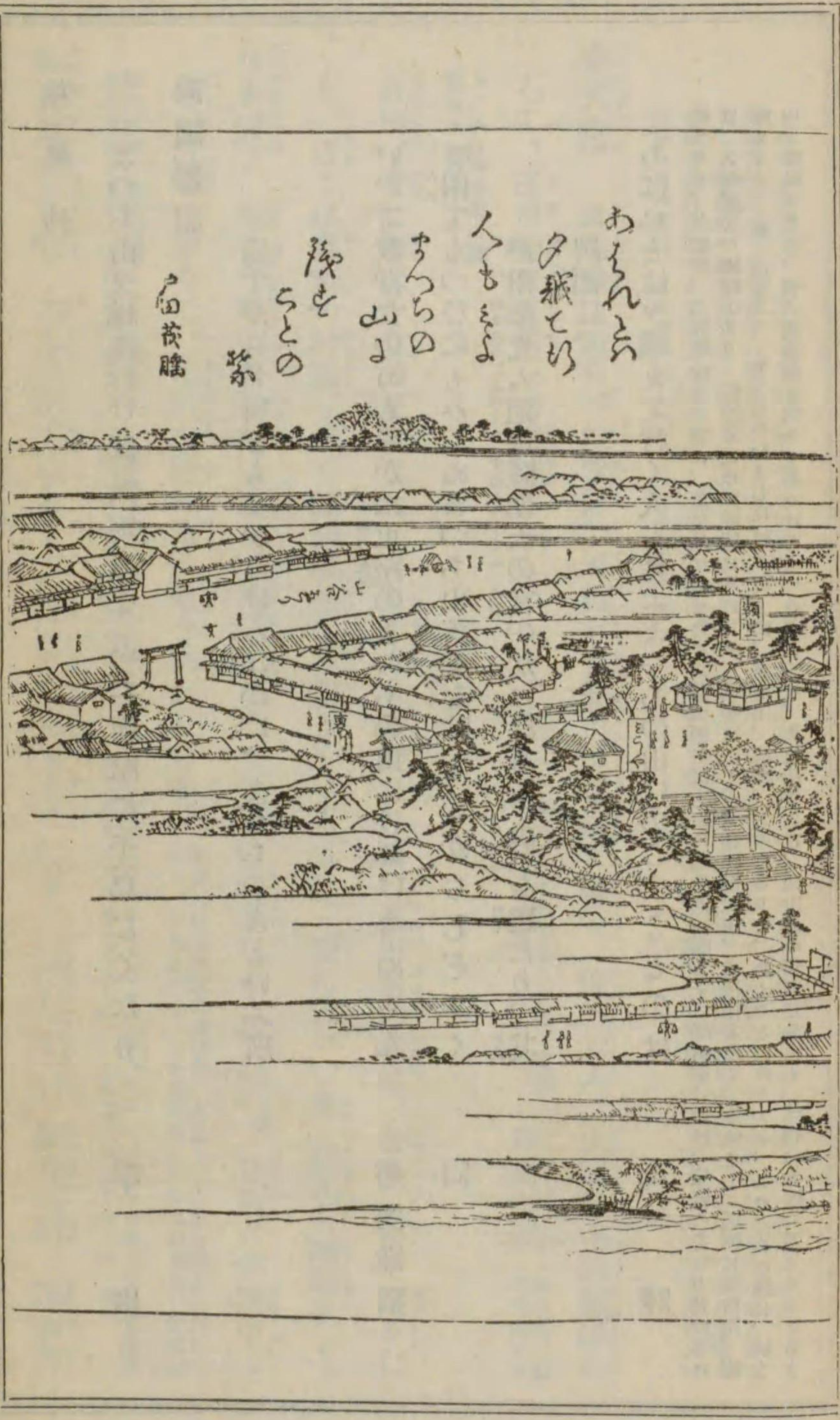
石英壇蔵作



真土山
聖大宮
隅田川西岸



あまれば
夕暮てめ
人もまよ
まらちの
山
海を
らとの
茶
戸田松臨



秋風抄

まつち山夕越え行けば風寒みすみだ河原に千鳥なくなり 季 廣

回國雜記

道すがら名所ども多かりけるなかに、まつちやまといふ所にて、

いかで我がたのめもおかぬ東路のまつちの山にけふはきぬらん 道與准后
時雨てもつひにもみぢぬまつち山落葉を時とこがらしぞふく 同

戸田恭光入道茂睡聖天の宮のかたはらに碑を建たり、其碑面に、

あはれとは夕越えて行く人も見よまつちの山にのこすことのは 茂 睡

按ずるに、井蛙抄、八雲御抄等の書に、萬葉集に載せたる辨基法師が眞土山の詠を駿河國とす。備馬樂註秘抄、宗祇の名所方角抄等には、大和紀伊の國境とあり。藻汐草には武藏國に入れたり。或書に云く、大和に信土山、角田川ありて、庵崎なし、駿河に隅田川、庵崎ありて、眞土山なし、たゞこのむさしには、眞土山、角田川、庵崎、ともにありて、全くそなはれりとす、されどこの地に、眞土山、庵崎あるは、後人萬葉集に因みて名づけしものなりと云々。また按ずるに、西山公の釋萬葉集にも、此書は勅撰の體にあらざるよし論ぜられたり。しかるときは、辨基法師の和歌も、まぎれて駿河國へ入りしならん歟。なほつまびらかに隅田川の餘下に注す。菊岡沾涼云く、往古本所の邊海面なりし頃は、當山を沖より入津の船の目當にしけるとぞ。按ずるに、今もこのあたりを山の宿とあざなし、新鳥起の地を山谷といふも、皆山に因ある名なり(山谷今は三谷に作る)陵谷の變は、既に古人も論ずる所にして、山川の形勢も千載を経れば同じからぬよしへり。また或人の説に、今の日本堤を築立つる頃、この眞土山のあたりの土を穿ち取りて築立けるといひ傳へはれば、この岡いにしへはなほ高かりしなるべし。

聖天宮 眞土山にあり。別當は、天台宗金龍山本龍院と號く。傳へ云ふ、大同年中の勸請にして、江戸聖天宮第一の靈跡なりといへり。和漢三才圖會、江戸鹿子等の書に、齋藤別當實盛深く尊信の靈像なりといへり。辨財天祠 山の麓、池像なりといへり。

此所、今は形ばかりの丘陵なれど、東の方を眺望すれば、墨田河の流は、長堤に傍て溶々たり、近くは葛飾の村落、遠くは國府臺の翠巒まで、ともに一望に入り、風色尤も幽趣あり。

日本堤 聖天町より簀輪に至る、其間凡そ拾三丁程の長堤なり。俗に八丁細、元和六年庚申の歲、台命に依りて、荒川水除の爲に是を築かせらる。里謠に日本領國の大諸侯、台命を奉じ是を築きし故にし

年の印本、桐房語園といへる草紙に、日數六十余日にして成就しければ、日本堤となぐるとあり。或人いふ、小塚原の裏より橋場總泉寺のあたりまで、水除の堤一條あり、此堤をあはせて二條なり、俗に一本二本などいへるところにて、二本堤と號しけるとぞ。新吉原遊女町 日本堤の下にあり。俗に五丁町と唱へたり。其衢五町あるゆ 慶長の頃、江府日

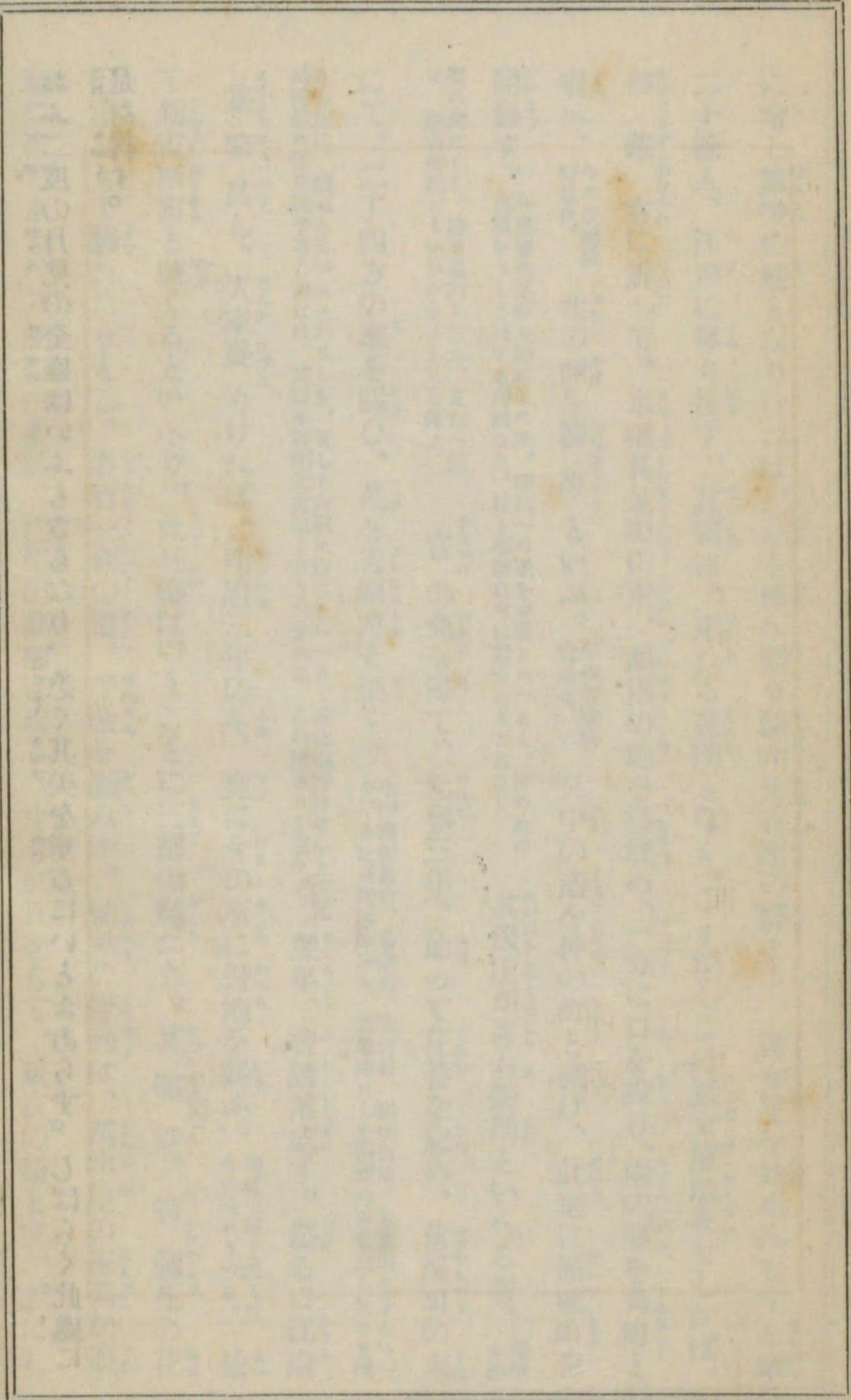


新吉原
仲之町
八潮



に増し繁榮の地となりければ、是を傳へ聞き駿州元吉原の驛より、遊女屋を始めんとする輩二十餘人、江戸に移り住す。其頃は、定れる花街もなく、こよかしこに遊女屋散在せしかば、彼輩官に訴へて、京橋具足町の東、泥沼の地を築埋め、一方に口を設け、南の側を角町と唱へ、今の京橋炭北の側を柳町といふ。今の京橋柳又中の通を仲の町と號け、此地に傾城町を開發す。今京橋具足町と柳町との間、南北への通を中通といへるも、仲の町の舊稱をうしなはざる證據なり。以上事跡合考に載するところなり。其後庄司甚右衛門といへる者、相州小田原の産にして、始め其内と云ふ。また一説に、勘右衛門ともいひけるよしひ傳ふ。官の免を得て、元和三年、始めて花巷を定め、菅屋町の末にて、二丁四方の地を賜ひ、是を吉原町と號く。今所謂和泉町、高砂町、住吉町、難波町等、其舊地なりといへきし故に、葭原ともいふべかりしを、實して吉原に作るといへり。或は事跡合考も上ひ元祿開板の江戸鹿子等の書には、其始め駿州元吉原よりうつす故に、この號ありと云々。翌年、普請落成す。然るに江戸益繁昌し、人家蔓りければ、明曆二年の冬、竟に今の所に替地を賜ふ。明曆二年丁酉八月依て新吉原町と號くるといへり。此花柳は、まことに三都の魁たり。其賑は、特彌生の花の頃をもて勝れたりとし、春宵一刻の價、千金を顧みず。初秋の燈籠は、萬字屋の玉菊が追福にはじまり、八朔の白重は、巴屋の高橋に起る。今も此日をもて、更衣の節とす。名にし

おふ二度の月見の全盛はいふもさらなり、悉く其美を舉るにいとまあらず。しばらく此處に是を畧す。



昭和二年七月十三日
昭和二年七月十三日
發行

有朋堂文庫
江戸名所圖會三
(非賣品)

編輯者

塚本哲三

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地

印刷者兼

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷所

有朋堂印刷所

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

(本製山岡)

本館印

民國二十一年十一月二十二日

計

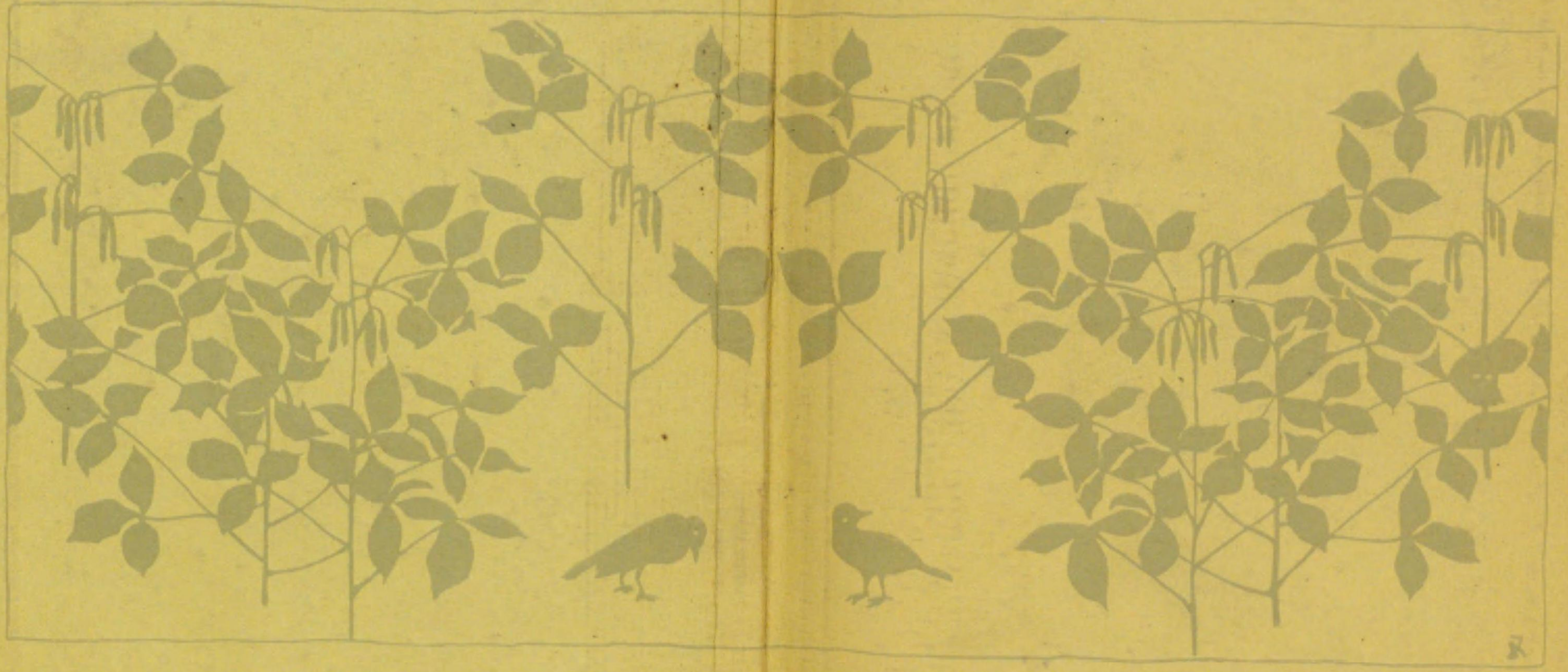
五頁本館印 (此書也)

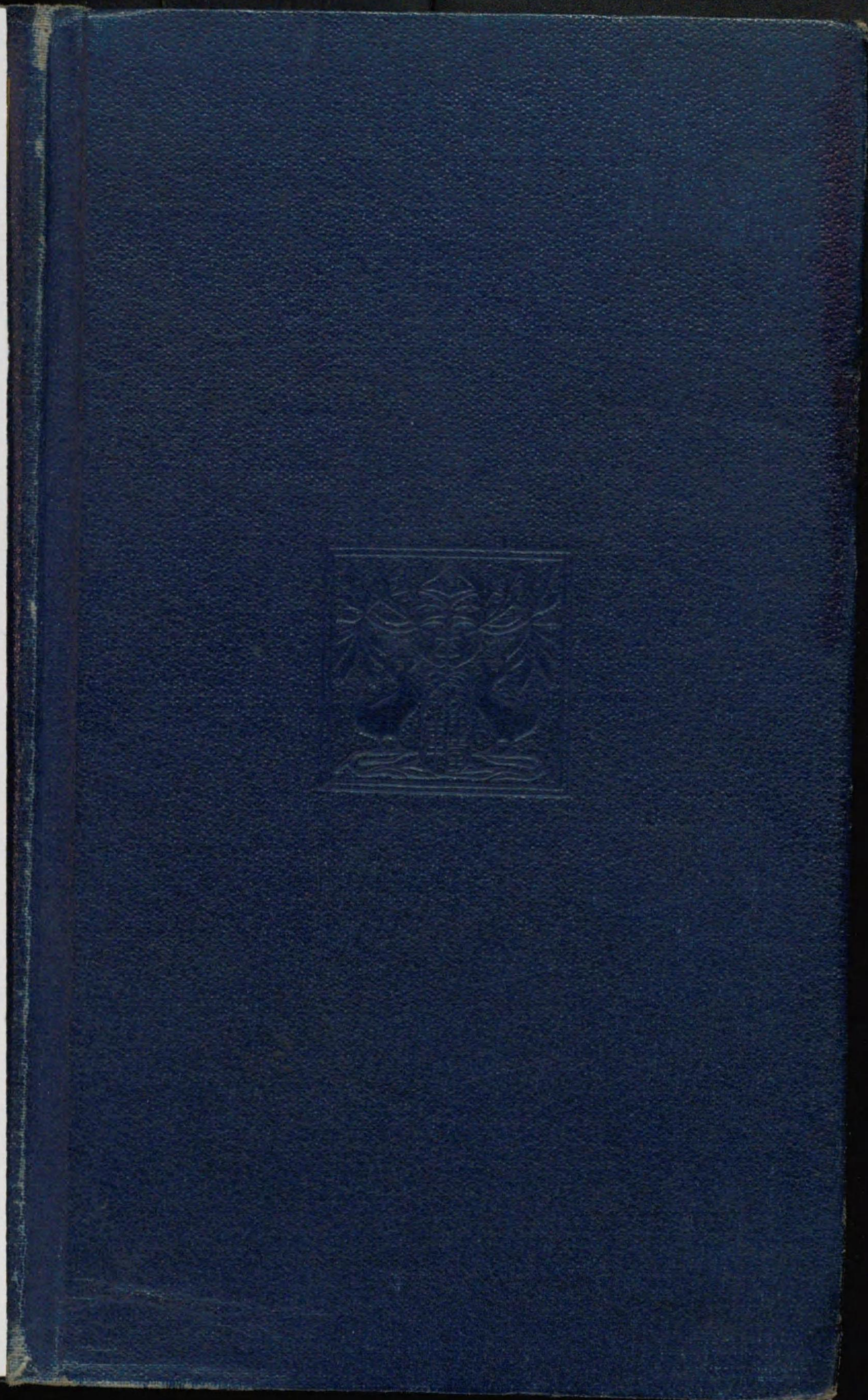
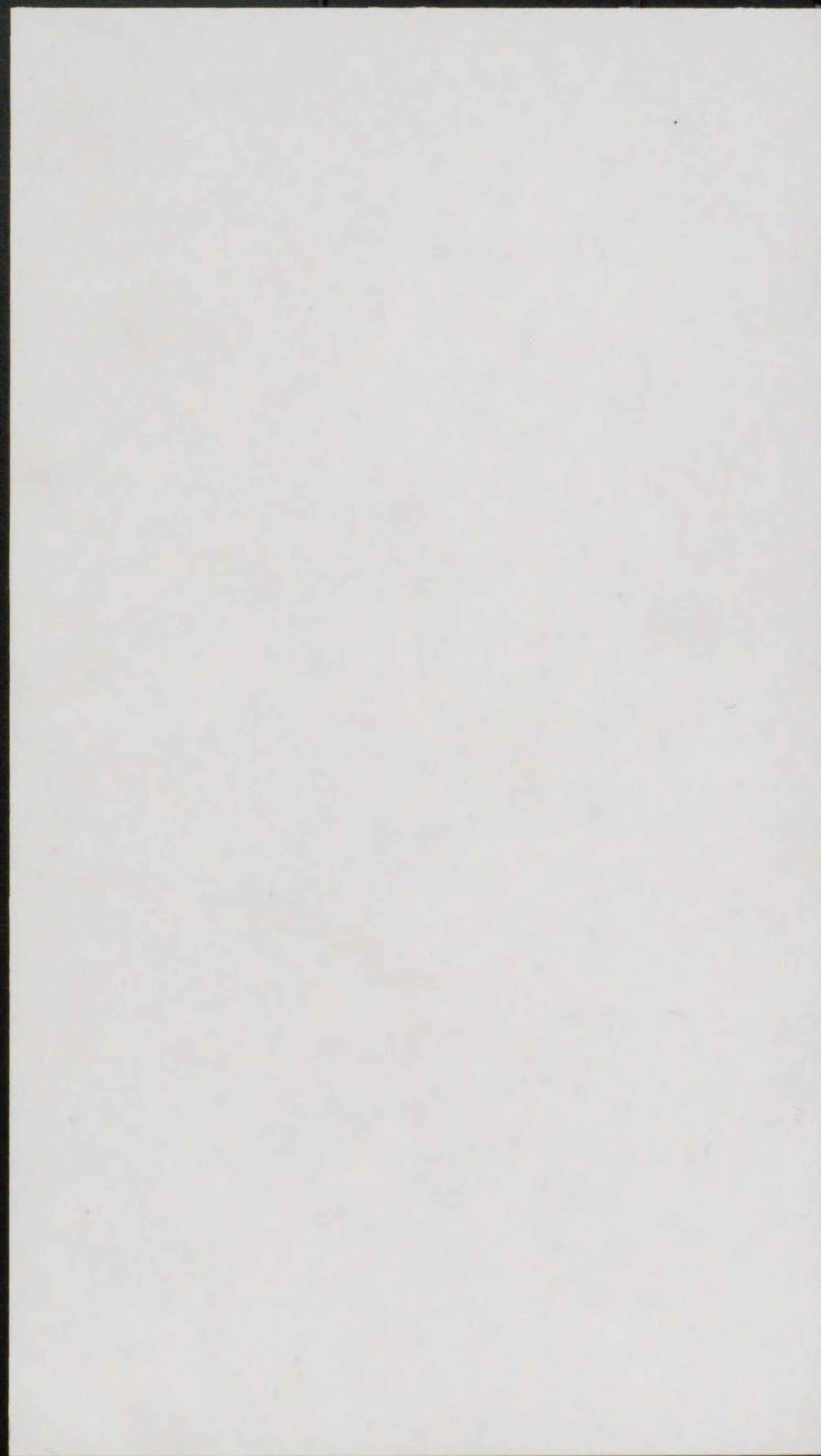
本館印 本館印 本館印 本館印

本館印 本館印 本館印 本館印

(此山印本)

543
65



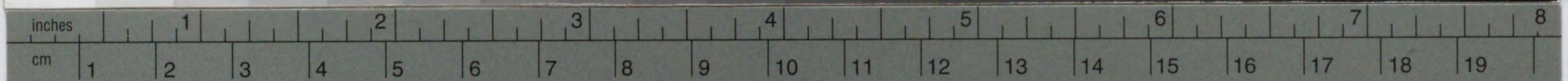


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

